
学園黙示録と武器商人の男

シュヴァルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録と武器商人の男

【Nコード】

N3372P

【作者名】

シュヴァルツ

【あらすじ】

はいどうも、シュヴァルツです。

今回も学園黙示録ネタでやらせていただきます。そして、チート系で行きますのでもし、嫌だっという方はお引き取り下さい。それでも大いに結構って方はぜひ、お読みください。まだまだ、未熟者ですがよろしく願います。

前書き

俺は、とある武器商人だった。

だが、ある組織との商売中に警察が割り込んできて商売が失敗しそのまま銃撃戦になった。

俺も応戦していたが、流れ弾に当たってしまい、運の尽きだなんて思ってたそのまま目を閉じた。しかし、起きてみたら天国ではなく、ただ、真っ白な世界が広がっていた。

そこに現れた一人の美女、彼女はおれに何をしようというのか？

ついでに、いろいろなチートも付けさせてもらった。俺にとって有利な……

物語は始まったばかりである

白い世界……

「う、うん？」

気が付くとそこは、白い世界が広がっていた。ただ、何もない真っ白な世界

あつ名前乗ってなかったな。俺は齊郷英樹だ。生前の仕事は武器商人、いろんな国で売買をしていた。それこそ軍隊からマフィアまで幅広く仕事をしていた。

そのせいか。国際警察とかいう連中に目を付けられて仕事をするたびに邪魔ばかりされた。それで、死ぬ前の仕事の時にも邪魔されて流れ弾で死んじまったんだよね

「俺は、死んだのか……」

もう一度、辺りを見回して見るが、何度見ても白いままだ。これが死後の世界って言う奴か？なんか実感ないな

「死後の世界ってこんなにつまんないところなのか」

「いいえ、ここは死語の世界ではありません」

「ん？」

振り向くとそこには一人の美女がいた

「あんだ、何者だい？それで、ここが死後の世界じゃないっていえ

るんだい？」

「驚かないんですね。」

「だって、死ぬ瞬間があつたしな。それで？」

「私は、ミカエル。簡単に言うなら天使の部類ですね。そして、こは、プロイセン、善悪の裁判所とも言えます」

「ふうん、なら俺はもう決まってるだろ。」

「なぜそう言えますか？」

「だって、生前は武器商人をしてたんだぜ？善人からすりゃあやバいつて思われるしな。何より、武器を売って生活してんだぜ。」

「それは、人間達が勝手に決めているだけの事でしよう？ここでは、もつと根本的な所で決めるのです。」

「根本的？」

「そうです。人間は心で善悪を決めています。それが最初っから持っている人と途中から持つ人では大いに違うのです」

「例えば？」

「そうですね、こちらで言うサタンとかでしょうね」

「サタン？ああ！あの悪魔の人？」

「そうです。ですが、あなたの心を見る限り、悪に染まっているとは思えません。ですから第二の人生をあげたいと思ったのです」

なるほど、俺は完全には染まっていなかったわけだな。昔っからそうだな

「あんた、優しいんだな」

「か、勘違いしないでください。私は、ただ暇つぶしにですね・・・」

あれ？少しツンデレ要素が入ってるな

「はいはい、そう言うことにしてあげるよ。」

「それでは行きたい世界はありますか？」

「んゝ昔読んだ漫画の学園黙示録がいいなゝ」

「あの死亡フラグ満載の？」

「ああ、あれは意外と面白かったしなゝできる？」

「あなたがそれで良いというのであれば・・・」

「よし、決まりね」

「後、付けたい能力はありますか？」

「んゝあつ！FATEの全キャラの能力とそのキャラを召喚できる

ようにしてくれ」

「分かりました」

「後、ギルガメッシュのゲート・オブ・バビロンで銃も出せるようにしてもらえる？」

「分かりました。それぐらいですか？」

「ああ、そんぐらいで充分だろ」

「分かりました。それではあのゲートを潜ってください。そうすれば向こうに辿りつけます。あなたに神の加護があらんことを」

「おう、分かった。世話になったな。ミカエル」

そうやって俺はゲートを潜った

キャラ設定

名前：齊郷英樹

歳：生前21歳 こつちの世界に来て16歳にもどされる

性格：武器商人という割には温厚で誰とも仲良くできるが、自分の嫌いな奴や気取ってる奴なんかを見ると殺人衝動にかられる。また、限界が過ぎると裏の性格が出る。

格好：背的には高めで178cmある。また、顔がキリツとしているので悪い印象はないと言える

能力

FATEの全キャラの能力とサーヴァントの召喚ができる

金ぴか王子のゲート・オブ・バビロンに銃も取り込んだ

また、生前にはCQCができており、かなりの物にまで極めたという

趣味

銃整備 射撃 パソコンなどで軍事情報を調べること

小説（二次元など）ゲームやアニメもみる

キャラ設定（後書き）

また、後で書き加えるかもしれません

第二の人生

「んっ」

俺は目を覚ました。

「ここが学園黙示録の世界か……」

あんまし実感わかないな〜というか生前と変わらない感じがする。

（目が覚めましたか？）

「うお!？」

突然、声がしたのでびっくりした。

（?どうかしましたか？）

「いや、突然声がしたからビックリしただけ」

（そうですか、知っての通りあなたは学園黙示録の世界に居ます。）

「そうか。でも、実感わかないな〜」

（それもそのはずです。原作から、二年前になりますから）

「そっか。じゃあその間に準備やら何やらをすればいいってことだな」

（お察しの通り）

「でも、内容まではよく覚えてないんだよね」

最後に読んだのどんぐらいの時だっけ？覚えてないや

（そこはまあ自分で何とかして下さい）

「ひどっ！？こう言う時神様が何とかしてくれるんじゃないの？」

（私はあくまでも天使の部類です。そう言うことは、規則違反ですから）

「はあ、神様でも規則はあるんだ」

（それはともかく、あなたの現状を教えます）

「あつ頼む」

（先ほども言ったように原作開始から二年前になります。この間に自分でいろいろ準備して下さい。それと、あなたの年齢は16歳してありますので）

「分かった。」

（藤見学園には1年から入れるように手配しておきました。それと生前の預金とかもそちらに送っておいたので確認してください。机の上にある筈です）

そう言われて確認してみると確かに机の上に通帳が置かれていた。

でも、こんなにあっただけ？

「俺、通帳は2冊ぐらいしかなかったはずだけど？」

（残りは私の方で用意させていただきました。アフターサービスという奴です）

「へーありがとうな」

（いいえ、気にしないでください。後連絡などが必要になったら念じてくれれば出ますので）

「分かった」

（それでは、神の御加護を）

そう言っミカエルは通信を切った

「さてつと」

とりあえず能力確認からまずはゲートからいくか

「開け・・・」

そう言っ後ろを振り向くとたくさんの武器が宙を漂っていた。要望通り世界中の銃も浮かんでいた。とりあえず手短にあったM1911A1コルト・ガバメントを取った

「うーんやっぱり生前と変わらないな」

久々に銃を握ったが、変わらない重さにホッとした

バビロンはOKっと次は……

それじゃあ能力確認と行きますか？

体は 剣で 出来ている

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r
d .
」

アーチャーの呪文を唱えた。

すると、家の背景が巨大な歯車の背景に変わった

「すごいな〜実物は初めて見たわ〜」

能力の方もOKっと

次はサーヴァントか……

「出だよ。セイバーのサーヴァント」

そう言ったすると……

ブォン

目の前に魔法陣が現れ一人の少女が姿を現した

「問おう、あなたが新しいマスターか？」

「ああ、そうだ。よろしくなセイバー」

「我が剣、常にあなたと共に」

そう言つて誓いの儀を行つた。その後また戻つてくれた

すごいな。この全部のサーヴァント扱えるかな？まあ状況次第だな

その後、家の方を見て回つた。一軒家で和風の家であつた（例えるなら衛宮士郎の家）

そこで、家の開発から行つた。

まず、地下を作り1～5階まで作つた

地下一階 車庫

ここには世界各国の軍用車両から一般車両まで置いてある
（すべて闇市などで横流し品を買つた。）
一角には車両などを整備する整備場などもあつた

地下二階 武器・弾薬庫

非常時のための武器などで普段はバビロンの方の武器を使用する

地下三階 食糧庫

国家規模の食糧備蓄が備えてある

地下四階 訓練場

ここで、英樹はCQCやいろんな訓練を行う

地下五階 居住区

居住区で水道や電気も非常時に備えて別の回線があり、最終防衛ラインとも言える。ガトリング砲など重装備にしてある

尚、移動に関しては階段もあるが、エレベーターも備え付けてある

（一度でいいから、こんな家に住みたいなー）

とりあえずこんなもんかな？まあ貯金はまだあるんだしいろんなことに使おう！

そうじゃないとせっかくもらった第二の人生なんだから始まるまで楽しく行こうじゃないか！

第二の人生（後書き）

「どうも～作者です」

「英樹だ」

「いや～第二弾学園黙示録、始まるよ～」

「そっぴゃ作者」

「何？」

「俺、学園黙示録の内容あんまし覚えてないんだけど？」

「あつ大丈夫大丈夫。今回はオリジナルで行こうかな～って思ってる。もちろん、原作キャラクターは出すけどね」

「は～そうなんだ。なら大丈夫かな」

「で、ヒロインなんだけど」

「誰にするんだ？」

「まだ、決めかねてる。候補としては一条美鈴と二木敏美のダブルでしょ、後、鞠川校医、林京子」

「待て、先に言った二人は良いとしてどうして鞠川先生や林先生を出すんだ？」

「うん、個人的に好きだから?」

「お前のか?」

「うん、キャラ的に良いと思ったから」

「そうか。なら俺は何も言わない。好きにしてくれ」

「そう。でも英樹の意見も聞くけど?」

「そうか?なら……」

「あつー応言つとくけど冴子さんは駄目だよ?前の作品でヒロインにしたから」

「そ、そんな……」

「仕方ないだろー?同じヒロインてのもつまらないだろうし俺も冴子さんは好きだけどさ、これでも悩んだんだよ?」

「それじゃあ、仕方ないよな」(ズーン)

「まあまあ、落ち込まないでちゃんと書くからさそれで許してくれない?」

「まあちゃんと書くって言っなら」

「うん!そこは任せておいて」

「なら、最後のアレいくか」

「
応！」

「「次回もお楽しみに」」

原作開始一年前

あれから、俺は藤見学園に入学し、一年を満喫した

そして、いろんな奴と友達になった。中でも一番の友達は平野コータという少年である。彼は一見するとただのデブにしか見えないが、あるキーワードを入れるとたちまち早変わりする。

それは、銃というワード

これが付くものと言ったら一つしかない。それは……”軍才”だ

〈教室〉

「おはよ」

「おはよ！英樹」

「おう、コータおはよ」

「英樹、この銃のカタログを見てよ。最新の奴が載ってるよ」

「おゝ本当だ。米軍のM4の最新式が出たんだな」

「うん！今度これ買おうかなーって思ってるんだ」

「そつなんだ。買ったなら教えてくれや」

「もちろん！」

俺はいろんな奴と仲良くすると同時に準備も進めてきた

まず、車両を買い取って、改造したり武装を施した

そして、武器や弾薬も入手しどんどん貯蔵していった

どこからやったって？

それは、もちろん持前の武器商人としての力をこつちの世界でも發揮したわけだよ。もちろん正規の軍からマフィアまでいろんなところにね……

まあ、そんなこんなで準備を進めてきた

今日は久々に取引もなかったので学校に行って暇を持て余していたいけない時はどうしてたって？まあそこはご都合主義ということでお願いします

（放課後）

俺は屋上に来ていた。どうやら先客がいたようだ

「よう、小室、森田」

「おつ英樹じゃん珍しいな」

と森田

「ああ、英樹か」

暗くなりながらもこっちを振り向く小室

「なんだ？元気がねえじゃねえか小室」

「………ほつといってくれ」

「まゝた、宮本と一悶着あったのか？」

「ギクツ！！！」

ありゃあ、本当にそうだったのか

「ははは！！懲りないな」お前も、いつそ、高城にでも乗り替えた
ら？」

と俺がそそのかす

「なんで、高城に乗り換えなきゃいけないんだよ！」

「そうだよ。それだけは駄目だよ」

「おや、小室だけじゃなく森田まで反論するとは珍しいな」

「フッフ、それはだな今、俺が絶賛アタック中だからだ！！」

と親指をたてながら言った

「「な、なに〜!?!」」

俺と小室が大声で言った

「お、お前、そういう趣味なのか!?!」

と小室

「そうだぞ、罵りたいのか?」

「まあ、三回告って全部無視されてただけだね……………」

酷いな〜高城、せめて返事ぐらいはしてやれよ

俺は心の中で思った

「まあ、チャンスはまだあるさ、頑張れ!」

「……………ああ」

森田がこんなにも暗くなつてるところは初めて見たぞ!?!

「じゃあ、俺は戻るわ」

そう言つて屋上を後にした

〜家〜

「さて〜何か来てるかな?」

そう言ってパソコンを開いた

「おっ！あの武器社長から連絡が来てた。何々？最新式の銃ができたから見えてくれないか？かどんなのだろっな？」

そう言いつつファイルを開いて確認を行いそれからはいつも通りの生活を送った

原作開始一年前（後書き）

原作開始まであと一年！！

原作開始じゃあー！！

あれから更に、一年たった。

俺は、二年になり、小室達も二年になったが、宮本が留年した。

・・・確か、理由は紫藤とか言う奴が留年にさせたんじゃないのかっただけ？

酷い奴だよな」というよりもそろそろ原作が開始するな

俺はいつも通り学校に来て授業を受けた。

そして、午後は授業をさぼって屋上に来て寝ていた

く屋上く

「そろそろ、始まるな」

独り言のように言った。すると・・・

「あれ？英樹？」

「ん？おつ森田、お前もサボりか？」

屋上に来たのはギターを持った森田だった

「珍しいな。英樹がサボるなんて」

「俺だって人間だぞ？そんな風にできていない」

「ははっそうか」

そう言っつて俺の隣に来た

その時！

ガシャアアン！！

「ん？なんだ？」

「英樹、あそこ」

そう言っつて森田は校門を指さした

そこには、一人の男が門に体当たりしていた。外見は普通だったが、行動が妙におかしい

「不審者か？」

と森田は言う

「いや、あれは多分……あつ体育教師だ」

そう言いかけたが途中で教師が数人校門の方に向かっていった。先頭に居るのは体育教師の手島と卓球部顧問の林だ

そして……………

「ぎゃあ ああああ！！！！！！！！！！」

手島の叫びが響いた

「な、なんだ！？何があつたんだ！？」

「分からんともかく教室に戻るか」

「わ、分かった」

そう言っ
て俺達
は校内
に入っ
た

廊下

俺と森田は教室の戻ろうとした。しかし……

「校内、全校生徒、教師に連絡します！！ たった今校内で暴力事件が発生しました！直ちに避難して下さい！！くりかえし……」

そう言ったところで放送が途切れた。次の瞬間……

「うわ！！やめろ！！ひぎつ！？痛い！痛い痛い痛い痛い！！！！！！！！死ぬ！！ぎゃああああああああああああ！！！！！！！！！！」

放送した教師が断末魔を上げながら死んだのである。その後にはクチャクチャと生々しい音が放送を通して全部に響いたであろう。

数秒後

「うわあああああああああ
きやあああああああああ！」

校内の全校生徒が一斉に逃げだし始めた！

我先に逃げようと前の生徒を蹴飛ばしたり、落ち着かせようと声を張り上げている生徒も殴られ踏まれて死亡している。

しかし、まだこの死に方の方が良いのかもしれない。この先の地獄に比べたら……

「何が起こってるんだよ!!」

森田が叫ぶ

「落ち着け、森田」

「落ちていていられるか！！人が殺されたんだぞ！！」

「ああ、しかも人間じゃないかもな」

「人間じゃない？どういうことだ？」

俺が答えようとした瞬間……

アアアア

奴はもう来ていた

「来たか……」

「お、おい、あいつ怪我してんぞ。助けようぜ」

そう言つて森田が動こうとしたが……

ガシッ！！

「英樹！何すんだよ！？」

「待て、あいつを良く見てみる」

そう言つて生徒だったその体を指さした。

一見すると普通の怪我に見えるがわき腹が何かに食いちぎられたような跡が大きく残っていた

「……なんだよあいつ」

「あんな怪我になっっているなら怪我どころじゃすまないだろ？病院送りか。死んでいるはずだ」

俺が淡々と言う

「じゃあ、あいつは……………」

「ああ、死んでいるってことさ」

そう言っ**て**バビロンからカラドボルグ螺旋剣を出した

「それ、どこから出した!？」

「企業秘密」

タンッ!

「ハアッ!！」

ズシャア!!

バタッ

奴の首を切った

「やったのか？」

「ああ、奴らをな」

「奴ら？」

「ゲームや映画じゃあるまいしそう言う風にした方がいいだろう。
だから、奴らさ」

「でも、こんな風になるってやつぱり……」

「ああ、事件には真実がある。それと同じさ。でも、今はここから出ることを考えた方がいい」

「そうだね」

「とりあえず、職員室に向かおう」

「なんで？」

「一階や校庭なんかはこんな奴らでいっぱいだ。そんな中を歩きたくないだろう？だから、車を使って脱出だ。それに、奴らの特性が分からないからな」

「それもそうだね。じゃあ行こう！」

そう言って俺達は職員室を目指した

職員室まであともう少しという所で……

「「キャアアアア！……！！！」」

「「……！！！」」

女子の叫びが聞こえた

「行くぞ！森田」

「応！」

そう言つて叫び声の方に向かった

しばらくすると、奴らに囲まれた女子が二人いた

「嫌！」

「来ないで！」

アアアアア

奴らは躊躇なく彼女達に向かう。そして……

ズバツ！！

奴らは切り裂かれた

「はぁ！！！」

ズシャツ！

「大丈夫か！？」

「はい」

「大丈夫です……」

「待ってろ、すぐに終わるから」

そう言つて奴らを切り捌いた

「よし、もう大丈夫だ」

「ありがとう」

「ごじます」

「それより」

「何が起こつてるんですか？」

と彼女達は交互に言いながら説明を求めてきた。

今の下りで分かるだろう。彼女達は一条美鈴と二木敏美だ

「さすがに俺も分からん。とりあえず、ここから脱出しようと思つてゐる。一緒に来るか？」

「はい」

「行きます」

そう言つて彼女たちと行動を共にすることになった

「職員室付近」

俺達は職員室付近まで来ていた。脱出計画は彼女たちにも話してある

とその時！

「キヤアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「「「「「！！！！！！！！」」」」」

「行こう！！」

俺達は急いで声のした方に向かった。

（職員室前）

職員室前に辿りつくと二人の男女がいた

コータと高城である

その反対側には小室達がいた

「小室！！こっちは俺がやる！！」

「分かった！僕はこっち側をやる。麗行くぞ！！」

「ええ！！」

そう言っただけ俺とは反対側の奴らを掃討し始めた

俺の前に居るのは3体ほどだ

だった！

カラドボルグから干将・莫耶^{かんしょう・はくや}に変えた

「おら!!」

ズシャ!ズシャ!ズシャ!

あっという間に倒した。向こうも丁度終わったようだ

「小室、ありがとうな」

「良いつてお互いさまだろ?それより・・・」

「なんだ?」

「お前、どつから、手に入れたんだ?その剣」

干将・莫耶かんじょう・もへを指さした

「ああ、これか?企業秘密ってやつだ。他にも出せるぞ」

「マジッ!?!」

「ああ、それは職員室の中で話すよ。それはそつとこちらの方はどなた?」

そう言つて紫の髪の彼女と金髪彼女を言った

「紹介がまだだったな。私は3年B組の毒島冴子だ。」

「私は〴〵鞠川静香よ」

俺も自己紹介する事にした

「俺は、齊郷英樹と言います。」

「よろしく」

そう言って笑顔で言ってきた。ヤベツ可愛い！！

その後、皆も自己紹介をした。

途中、高城が恐怖のためか錯乱したが毒島先輩によって抑えられた

（職員室）

俺達は職員室に入った

「よし、じゃあ英樹、説明してくれよ」

「分かった。それじゃあ皆聞いてくれ」

そう言って皆の方に向いた

「俺には特殊な力がある」

「どんなの？」

コータが聞いてきた

「まずはこれだ」

ヒュウン

後ろにバビロンを開いた

[illegible]

森田と美鈴、敏美以外は全員驚いていた

「特殊な力ってこれの事か？」

「ああ、そうだ」

「どうして、もっと早く出さなかったんだ？」

孝が聞いてきた

「簡単だよ。使いたくなかったからだ」

「なんだつて？」

「俺は人間のあらゆる汚い所を知っている。だから、安易に出したくなかっただけだ」

そう。武器商人をしているとしても、人間の黒い所を知ってしまふからだ。表面の世界だけでは生き残れないからな

「ついでに言っておくと、俺は武器商人もしている。だから……」

と言いかけた時

バキヤ！！

「痛ってな〜何すんだよ。小室」

「なんで、その事を教えてくれなかったんだよ。僕たちは親友だろ！？隠し事なんか無しかっただろ！？」

「待て、落ち着いて聞いてくれ。こう言うことを安易に話すと、無関係な奴まで巻き込みまう。それが嫌だったから話してなかっただけだ。本当にすまん」

そう言って頭を下げた

「！！そうだったのか・・・すまん」

「良いつて俺が話してないのが悪いんだし、それはそうと特殊能力の話だったな。後もう一つある」

「どんなのだ？」

毒島先輩が聞いてくる

「今から、お見せしますよ。・・・出でよ、セイバー」

そう言う後ろに魔法陣が現れセイバーが出た

「お呼びでしょうか？マスター」

「ああ、紹介しよう。騎士の英霊・セイバーだ」

そう言って皆に紹介した

「セイバーです。以後、よろしくお願いします」

セイバーもお辞儀をした

「あっども」

と小室が返した

「もういいぞ。セイバー」

「はっ失礼します」

そう言ってセイバーは消えた

「とまあこんな感じだ。」

「分かった。ありがとう英樹、教えてくれて」

「気にすんな。信用できるから教えたまでだ」

「そうか、よし、少し休憩しよう。それから学園を出よう」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

そう言って俺達は休憩した

午後から脱出じゃあゝ!! (前書き)

英「なに?このサブタイトル」

作「気にしない気にしない」

「気にするよ!」

「それより、そろそろ始まるなゝ皆スタンバイしてくれ」

「おい!!無視かよ!?!」

「よーい、スタート!!」

午後から脱出じゃあゝ！！

俺達は職員室で小室達と合流し、俺の秘密も皆に教えた。

そして、今後の方針を決めることになった

「英樹達はどうして、職員室に来たんだ？」

小室が聞いてきた

「俺達は車で脱出しようと思ってな。キーは全部ここにあるだろ？
小室達は？」

「僕たちは高城の悲鳴を聞いて来たんだ。毒島先輩は？」

「私たちは齊郷君と同じく車で脱出しようと思っていた」

「鞠川先生、車のキーは？」

小室が鞠川先生に聞いた

「あつえゝとバックの中に……………」

とバックを漁っていると

「全員を乗せられる車なのか？」

と言った

「うつー！！コペンです……………」

痛い所突かれて頂垂れる鞠川先生。

そんなに落ち込まなくていいから

「部活遠征用のバスはどうだ？壁にキーが掛かってるが」

俺が言う

「バス、あるよ」

コータがブラインドから覗きながら言った

「よし、移動手段は見つかったんだ。次に情報だ。誰か、テレビを付けてくれ」

俺が指示を出す

「英樹、あつたよ！」

美鈴がリモコンを見つけた

「よし、付けてくれ」

ピッ

テレビを付けた瞬間、生中継なのかアナウンサーが報道していた

「……………のようです。周辺地域ではすでに一千万人以上の死傷者

がでており、知事は非常事態宣言を発令されました。警察は「パン
！！」！発砲です！ついに警察が発砲しました！！でも、一体何に
！？「ガシヤアン！！」嫌あ！なに！？助けて！！いやぁ！！ああ
ああああああああああああああああああああああ！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

そして、映像が途絶した。最後に映っていたのは死体袋が独りでに動き出した。まるで、人間が上体起こしをするように……

「美鈴、他のチャンネルに変えてくれ」

「わ、分かった」

そう言ってチャンネルを変えた

「アメリカ政府はホワイトハウスを破棄、洋上の空母に移転しました。モスクワは通信途絶、中国は全域で炎上、ローマでは略奪が行、イギリスは治安が安定してますが長くは持たないと思われます。」

「もういい。消してくれ」

そう言ってテレビを消さした

「これで、現状が分かった。」

「そんな、たった数時間でこんなことになるなんて、きつと元に戻るわよね？　いつもどおりになるわよね？」

麗が怯えながら小室の服を引つ張つた

「なるわけないしー」

高城がそれを破った

「高城、そんな言い方はないだろ」

小室が反発する

「パンデミックなのよ？仕方ないじゃない」

「『『『『『パンデミック？』『』『』『』『』』」

俺と高城と静香先生以外は皆分からない表情をしていた

「感染爆発の事だな。昔だとスペイン風邪とか黒死病が有名だな。

最近だと鳥インフルが例に挙げられる。スペイン風邪だと感染者数六億人にまで昇った」

俺が説明する

「どうやって感染は止まったんだ？」

小室が聞いてきた

「簡単だ。感染すべき人がいなくなる事だ。」

「齊郷の言つとおりよ。どんな感染症でも感染すべき物体がなくなったら自然消滅するわ」

高城が補足する

「でも、死んだ奴らは動いて襲ってくるよ?」

コートが外を見ながら言う

「あつ！！これから暑くなるし死体とかは腐るんじゃないのか？」

森田が思いついたように言う

「どれくらいでそうなるのだ？ 鞠川校医」

「ん、夏場なら20日程度で冬場なら一カ月かかるわ」

「本当にそうか分かったもんじゃねえぞ」

俺が言う

「どういふこと？ 英樹」

「動く死体なんて医学の対象じゃないからな。拡大が止まる理由がない。本当に止めるならどちらかが滅亡するまでやるさ」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

皆黙つてしまった。でも、考えてみたら怖い事だ。人間と奴らによる滅亡を掛けたチキンレースというわけか

「でも、俺達にそんな事はないと思ってる。いつか専門家がワクチンをとか作るだろう。それまで俺達は生き残らなきゃあいいけない」

俺が言う

「齊郷君の言うとりだ。このままでは生き残れまい。チームだチームを組むのだ」

毒島先輩も賛成してくれたようだ

「よし、今後の方針が決まった所で皆に朗報だ」

「なんだ？英樹」

小室が聞いてきた

「俺が武器商人として皆に武器をプレゼントするよ。」

そう言っバビロンを出した

「そうだけど、どれを使ったらいいのか分からない。英樹、教えてくれよ」

「そうだな。ここには初心者も多いからな」

冗談交じりで武器を取り出した

「まず、小室だがベネリM1とM92Fを渡す。使い方はコータに教えてもらってくれ」

「分かった。ありがとう」

「次に宮本だがお前には無爪鉈長刀（むそう・なた・なぎなた）と・シグP226を渡そう」

「ありがとう」

「つぎに高城だがファマスF1とワルサーMPLだ」

「ありがとう」

「毒島先輩には備中青江とPMマカロフを渡します」

「ありがとう、でも、銃は使うかどうかからんな」

「まあ保険として持っておいて下さい」

「そこで、森田がMP5とUSPだ」

「ありがとう」

「そして、美鈴と敏美は何かやってたか？」

「私はクレー射撃」

「私は弓道」

美鈴はクレー、敏美が弓道か

「だったら、美鈴はM870ショットガン、敏美は和弓でどうだ？
後、サブでグロック17を渡しておく」

「「ありがとう」」

「鞠川先生はこのFNハイパワーです」

「でも、銃は使った事ないから」

「自分の身に危険が来たときだけ使用して下さい。その他は俺らがフォローしますよ」

「分かったわ」

そう言つて銃を受け取つた。

「そして、コータお前には、この銃を渡そう」

「何何!?!」

目がものすごく輝いている

「ファルコンだ」

「マジ!?!チエコで作られたアンチマテリアルライフル!?!」

「ああ!そして、サブにコルトパイソンを渡そう」

「イーヤッホウー!?!」

飛び跳ねながら受け取つた

その後、コータと俺で皆に銃の使い方を教えた

因みに俺の武装は基本は金ぴか王子の螺旋剣ガラドボルグを基本とし、銃はトンブソンM1927A1とコルトガバメントだ

M1927A1はセミだが改造してフルオート・三点バーストを取り付けてある。また、マガジンも100発ドラムマガジンに変えたコルトも改造して弾を強化弾にしてある。これなら三体連続でブチ抜ける筈だ

「みんな、準備はいいか？」

小室が聞いて来る

皆は黙って頷く

「よし！」

ガラッ

「行くぞ!!！」

そう言っで脱出を開始した俺達だった

計画的に事は進めましょう（前書き）

作「これ、現実世界でも言えることだね！」

孝「いや、それってただの無謀とかいうんじゃないの？」

「そうなんだよねー俺も、そう言う所あるからなー後先考えずにズーン

「そ、そんな落ち込むなって、ほら！始まるよ！」

「おおっと、そうだな。気を取り直して、行くぞー！」

計画的に事は進めましょう

職員室からでた俺達はすぐさまマイクロバスまで移動を開始した。

その途中・・・・・・・・

「キャアアアアア！！！！！！！！」

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

叫び声の方に行ってみると、奴らに囲まれた生徒が数人いた

「嫌あ、来ないで」

「た、卓三」

「くっ下がってろ！」

そう言いながらも角に囲まれていて危機的な状況だった

「おら！こっちだ！」

そう言ってトンプソンを奴らに向けた

タタタタタタタ！！！！！！！！！！

アアアアア

奴らが倒れたがまだ、残りがいた。

そこに毒島先輩が動いた

「ハア！！」

ズバッ！！

アアア

「食らえ！」

ダアン！

そして、奴らを排除する事が出来た。

「よし、大丈夫か？」

「え、ええ」

「？まれたものはいるか？」

「いませんいません」

そう言って全員拒否のそぶりを見せた

そこで、宮本が言う

「本当みたいよ彼女たち」

「ここから、出るつもりなんだが一緒に来るか？」

俺が計画を言った

「え、ええ！」

そう言つて俺達は正面玄関に向かった

く正面玄関く

俺達は正面玄関に着いたがさらなる問題が発生した

「たくさんいるな」

俺が愚痴るように言う

「連中は音に反応するんだから隠れることなんてないのに」

高城が言う

「なら、証明してくれよ」

孝が反論する。その答えに高城は答えられないようだ

どうするかなくこのままじゃあ埒が明かないしな

そう思つてると

「僕が行くよ」

孝が立候補した

「孝！？なんで！？」

宮本が言う

「なんでかな？」

「小室、だったら俺が……」

「英樹は後ろの援護をしてくれないか？」

「分かった。だが、危なくなったら言えよ」

「ああ、分かってる」

そう言って階段を下りていった

しばらくすると……

ガシャァン！！！！

小室の投げた靴が遠くにあったロッカーに直撃して大きな音を出した

すると、奴らは引き寄せられるようにそっちに向かって歩き出した。

それを見届けた小室は扉に向かって歩いて開き、俺達に合図を送った。

その合図で俺達も動き出して扉の方に向かった。

順調に思えたのだったが……

ガシャアアアン！！！！

俺のちょっと前に居た少年のさすまたが扉に当たってしまい学校中に響いてしまった！

「しまっ「走れ！！」「！！」

小室の叫びで皆が走りだした

「なんで、声なんか出したのよ！？玄関の奴らだけやつつけてそのままにしとけばよかったのに！」

高城が反論した

そこに一体の奴らが近づいていたのでガバメントで撃ち抜いて行った

ダアン！

「どっちにしろ、学校中に響いてんだ。奴らは集まってくるよ。それよりも走れ！後衛は俺が務める！！」

そう言って近づいて来る奴らを撃ちまくっていた。

「「英樹、私達も手伝うわ！」」

美鈴と敏美と一緒に戦ってくれた

タタタタタタ！！！！！！！！！！

ダァン！ダァン！ダァン！

シュ！シュ！シュ！

それぞれの武器で奴らを仕留めつていった。

しかし、奴らは減るところか増える一方だった。

「クソッこれじゃあジリ貧だ！」

「ええ！」

「そうね！」

なんとか、皆がバスに乗るまでは防がなくっちゃあな。

仕方ない！！

「小室！！！」

「な、なんだ！？」

「俺達はいつらを引き付ける！お前らだけ先に行け！」

「そ、そんな無茶な事！」

「いいから！早く行け！！」

「わ、分かった！」

そう言つて孝達はバスの方に向かった

「悪いな二人まで巻き込みまうて」

と言いながら美鈴と敏美を見た

「いいの」

「気にしないで」

「でも、これから」

「どうするの？」

二人が交互に聞いて来る。本当にすごいな、シンクロ率100%だよ

「安心しな。これから暴君が現れるから」

ニヤリと笑いながら言った

「「暴君？」」

二人は訳が分からず首を傾けた

「まあ、見てなよ」

そう言いながら魔法陣を出した

（美鈴・敏美 side）

私たちは、英樹と一緒に奴らを引き付けることに成功したが今度は私たちが出られなくなった

それで、英樹にどうするのか？と聞いてみたところ

「安心しな。これから暴君が現れるから」

と言って後ろに魔法陣を出した。

もしかして、さっきのセイバーさんを出すのかな？

そう思っていると後ろの魔法陣が光りなから、巨大な何かが出てきた

（美鈴・敏美 side out）

よし、あれを出すか

そう思つて呪文を唱えた

「出でよ、ヘラクレス」

そう言う魔法陣から一体の巨大な人が現れた。

体は黒く、手には岩でできた剣を持っていた

「お呼びでしょうか？マスター」

（一応言つとくがまだ、理性が狂気化されていないのでバーサーカ

「は喋れるのだ！」by作者

「おう、いきなしで悪いんだが周りに居る奴らを吹っ飛ばして、狂気解放してもいいから」

「了解しました」

そう言ってバーサーカーは奴らの方に向いた。

そして……

「

!!

!!!!!!!!!!!!!!」

雄たけびと共に奴らを吹き飛ばし始めた

「「きゃ!?!」」

二人は驚いたようだ

「大丈夫だ。あいつはバーサーカーと言ってギリシャの大英雄だ。これで小室達も逃げやすいだろう」

そう言っつと、バスは発進して校門を突き破り脱出に成功したようだ
しばらくするとバーサーカーはすべて終えたようだ

「すべて、処理しました」

「御苦労さん、戻っていいよ」

「はっ了解しました」

そう言つてバーサーカーは戻つていった

「なんとか、終わつたな」

「そうね、」

「でも」

「これから」

「どうするの？」

「みんな、先に行つちやつたよ？」

「大丈夫、大丈夫、こんな時のために用意したんだ。こつちに来て」
そう言つて二人を裏門に連れてきた

（裏門）

「ここに、何があるの？」

敏美が聞いてきた

「それはだな……これだ!!」

バサッ!!

「「!!」」

二人が驚くのも無理はない。なんせ目の前には一台の車が止まっていたのだから・・・

しかも、軍用車両のハンヴィーが止まってりゃあ

「これどうしたの？」

美鈴が聞いてきた

「ああ、俺の所有物だ。」

いやゝ前におふざけで持ってきてここに隠しておいて正解だったな。迷彩カバーのおかげで見つканなくて良かったなゝ

「運転できるの？」

敏美が聞いてくる

「失礼な！それでも、武器商人だぞ。これぐらいできなくてどうする？」

「「ふん」」

「んなことより、さっさと出発するぞ。小室達と合流しなきゃあな」
そう言って三人はハンヴィーに乗り込んだ

ガソリンスタンドは火気厳禁……じゃないと悲惨な目に会っよ？

小室たちと別れたあと俺と美鈴と敏美は裏門に来てハンヴィーで学園を脱出した。

俺達は裏道から大通りに出た

～大通り～

「ねえ、英樹」

美鈴が聞いてきた

「なんだ？」

「これから、どうするの？」

「とりあえず、小室達と合流しなきゃな。俺、こっち側の出身じゃないからな～二人はこっち側か？」

「「ええ」「」

「じゃあ、校門から出たらどこの橋に出る？」

「えーと、一番近いのは床主大橋ね」

敏美が答える

「じゃあそこを合流ポイントにしとこっつ」

「「ええ」」

そう言つて俺達は出発した

街の惨状はひどいものだった

到る所で交通事故が発生し、街は静かだった。

「まるで、ゴーストタウンだな」

俺が言う

「じゃあ、街の人たちは」

「皆、奴らに」

「なっちゃったの？」

二人が交互に言う

「多分な、死んだあと奴らになって、生存者を追いかけて行ったんだろう」

俺が答える

そこで、タンクメーターを見た

「やべえな」

「どうしたの？英樹」

美鈴が聞いてきた

「燃料が足りなくなってるな」やっぱあのまま放置してたからかな
「近くにガスタとかあるか？」

二人に聞いた

「信号を二つ先に行った処にあったはずだけど」

敏美が答える

「ガソリンスタンド」

そして、目的のスタンドについた

「残ってるかな？」

「ほとんどのガスタは千台分は入るように設定されてるからな。
大丈夫だろう」

そう言って車から降りた

「ああっくそっ！」

「ど、どうしたの？英樹」

美鈴が聞いてくる

「こいつ、セルフだゝ俺、財布、家に置いてきちまったんだ。どちらか持っていないか？」

二人に聞いてみた

「私、カバンの中」

「私も」

「そうかゝ仕方ない。中にあるレジから金、取ってくるから待っていてくれ。何かあったら声を出してくれ」

「「分かったわ」」

そう言つて店の中に入った

ゝ店の中ゝ

「お邪魔しまゝす」

すでにいないであろう店主に向かっていった。中は思ったほど酷くないようだ。

「レジは・・・・あつた」

そう言つてレジの引き出しを引いてみたが・・・・

ガッガッ

「やっぱり駄目か、しょうがない」

そう言ってバビロンからパールを出した

「そりゃあ!」

ガシャアン!!

ジャラジャラ

レジの中から大量の金銭が出てきた

「よし、これなら……」

と行こうとした瞬間

「「キャア!!」」

「!!」

二人の叫び声が聞こえた

「二人ともどうした!？」

「ひ、英樹」

「た、たすけて」

二人は大男に捕まっていた

「ゲヘヘ、兄ちゃん、可愛い彼女連れてんじゃねえか。」

「貴様……」

「おーと動くなよ？大人しく従えば命までは取らない」

「どうすればいい？」

「簡単だよ。そこにある車を俺に寄越してくれればいいだけのことよ」

「……それだけで彼女たちを解放するか？」

「バーカ、んなわけねえだろ！！こいつらも連れて行く」

「……離さないと死ぬことになるぞ」

「お前にできるか？そんなこと」

「……いい加減にしろよ。てめえ」

「あ？」

「いい加減にしろって言うてんだ！！」

そう言っつてバビロンを開いた

「ヒッ！？」

大男は腰を抜かしたようだ

その隙に二人がこちらに移動する

「大丈夫か？二人とも」

「「ありがとう、英樹」」

二人はそう言っただけで抱きしめた

「よし、このまま移動しようここも危険だ。」

そう言っただけでハンヴィーに乗り込もうとした所……

「ま、まてよ！このまま置いてくのかよ！？」

「ああ、そうだ。当然の報いだと思うが？」

「だ、だったら、武器ぐらいくれよ！」

「ふむ、武器を所望するか。だったら……」

そう言っただけでマグナムを出した

「ほら、これを使って生き残れ」

そう言っただけで渡した

「さて、行くか。二人とも」

「「え、ええ」」

二人は戸惑いながらも英樹の後についていった。

しかし・・・・・・・・・・

「ひやはははは！！！馬鹿め！簡単に武器を渡してくれるとはな！
！」

そう言つて大男がマグナムをこちらに向けてきた

「・・・・・・・・・・引き金を引いたらヤバいことになるぞ？」

「へっ！そんなことでビビるとも思つてんのか？」

そう言つて引き金に指をかけた

そして・・・・・・・・

バン！！

「「ヒッ！？」」

二人は銃声に驚いて英樹にしがみついた

「あゝあ、だから、やめとけつて言つたのに」

俺は呆れながら言つた

「あ、あああ、ああああ！！！！！」

弾丸は英樹に当たらなかった。なぜなら、マグナム自体が暴発した

からだ

これは、英樹のやり方だった。信用できない相手に対して敢えて強力な武器を渡す。それで何もしなければ信用できる。撃てば撃った本人が酷い事になる。

この方法で彼は裏社会を乗り切っているのだ

「今の音で感づかれたな。二人とも移動するぞ」

「「え、ええ」」

「おっと、その前に・・・」

そう言って、大男の前に立った

「痛てえよ」

「おい、クソ野郎。プレゼントだ」

バビロンからある物を出す

「こいつがあればしばらくは大丈夫だろ？それじゃ、」

そう言ってハンヴィーに乗り込んだ

「よし、行くか！」

ブオオオ！！

「ねえ、英樹何をしてきたの？」

敏美が聞く

「すぐに分るさ」

そう言つてスタンドの方に指さした

「「??」」

二人は分らない表情だったが次の瞬間……

ドッカアアアアン!!!!!!!!!!

スタンドが大爆発を起こした

「「きゃあ!？」」

「あゝあ、汚ねえ花火だ」

「何をしたの？」

美鈴が聞く

「ああ、あいつに爆弾を送りつけてやったのさ。さあ、さっさと小室達と合流するぞ」

そう言ってハンヴィーのスピードを上げたのだった

ガソリンスタンドは火気厳禁……じゃないと悲惨な目に会っよ? (後書き

作「はい作者です」

英「英樹だ」

「いやゝ火っていうのは怖いもんだね」

「そうだな。作者は火に関してやったことはあるのか?」

「大したもんじゃないけどゝ昔、小型爆弾を作ったことあるよ」

「マジでか。俺でさえc4で敵組織の会社潰したことあるけど……」

「いやいや、それの方が十分危なくね?」

「あつそれもそうか。あつはっはっは」

「怖えよ!!--」

「それより作者、いつものやるぞ」

「はいはい」

「次回もお楽しみに!!」

床主大橋

俺達はガススタを爆破した後、橋の出る道まで走っていた。

しかし……………

ブオオオオオオ……………

「あら？」

ハンヴィーが突然、止まったのだ。幸い、回りに奴らはいなかったので、エンジンを調べることにした。

ガチャガチャ

「英樹」

「どう？」

二人が聞いてきた

「こりゃあ、駄目だな。オイルが古くなってエンジンが焼きついちまってやがる。二人ともここから橋までは遠いか？」

俺が聞いた

「うっん」

「すぐそこまでだから」

「大丈夫だよ」

「よし、ここからは歩きで行く。一応、橋の状態も確認しておこう」
そう言っただけは行動した

「床主大橋の手前」

俺らは歩きで行った

橋の方を確認したが、酷い状況だった。

向こう岸では警察が封鎖し、人が溢れかえっていた。

そして、俺らは橋の手前まで来ていたが、そこも、酷い状況だった

道路は、渋滞し歩道は避難民がぞろぞろと動いていた。

その時

「齊郷君！」

「ん？あつ」

声がしたので振り返ってみるとバスから顔を出している毒島先輩がいた

「良かったら、乗るかね？」

「もちろん」

そう言って俺らはバスに乗り込んだ

「バス車内」

「齊郷、無事だったのね？」

高城が言ってきた

「ああ、お前らが脱出した後、俺らも裏門から車で脱出したんだ。で燃料補給のためにガスタに寄ったんだがそこで一悶着あってなそれからなんとかここまで来たんだ」

今までの経緯を話した

「そう。良かったわ」

高城はほっとしたように言った。

それにしても後ろで騒いでる奴うざいな

「あれ？そういえば、小室と宮本は？」

俺が気づいて言った

「小室君と宮本君はバスを降りたんだ」

毒島先輩が言った

「どういうことですか？」

「君たちと分かれた後、紫藤と他の生き残りが現れて、それに乗せて脱出した後、いきなり、紫藤がリーダーになると言いだしてな。それを聞いた宮本君はバスを降りてしまったんだ。その後を、小室君が止めに行ったんだが道路の反対側から暴走した路線バスが来て、私たちと小室君達との間に横転して爆発炎上してしまったんだ。」

「なるほど」

それでは仕方ないな。後、紫藤、お前は小学生か？

「まあ、どっちにしてもバスからは降りないと言けないかもしれないな」

「どういうこと？英樹」

コータが聞いてきた

「さっき、橋の方を見て来たんだが警察が封鎖をおこなってな。渡るにも時間がかかってしまう。なにより、奴らが来る可能性が高い」

「それは、どういうことだ？英樹」

森田が聞いてきた

「森田、学園で経験しただろ？奴らは音に敏感なんだぞ？」

そつ、こんだけ大音量を出していれば自然的に奴らが引き付けられ

る。そしたら、最悪な状況になっちまう。それだけは避けないと

「それなら、さっそく行動しないとね」

高城が言った

「ああ」

「皆、バスを降りるの？」

静香先生が聞いてきた

「ええ、そのつもりですよ？」

「じゃあ、私も連れてって」

「いいですよ。二人もそれでいいよな？」

美鈴と敏美に聞いた

「もちろん」

そう言った後、バスを降りようとした時……

「おや？どうしたのですか？」

紫藤が聞いてきた

「俺達はバスを降ろさせてもらっぜ。紫藤先生」

「君は……ああ！齊郷君ですね。そうですか。」と自由にどうぞ。しかし……」

そこで、一区切りした

「あなた達は、残ってもらいますよ？鞠川先生、齊郷君」

「ヒッ！」

「ほう？それはなぜだ？」

「まず、鞠川先生は医師です。現状で医師を失うのはメリットが大きすぎます。そして、齊郷君、君は武器商人としての力があります」

ああ、そういえば、客のリストに紫藤ムラサキの親父さんの名前があつたな。まあ今となつちゃあ関係ないが。どっちにしろ信用できないけど、蛙の子は蛙っていうしね。

「どうです？残っていただけませんか？」

「断る」

俺が言った

「はっ？」

「だから、断ると言ったんだ。いくら、取引相手の息子がいようと今となつちゃあ関係ない。それに俺は信用する奴らしか手助けはしない。」

俺は淡々と言った。

「んだと！？紫藤先生が言ってる事が正しいんだ！さっさと武器渡せや！」

と言つて金髪不良が突っ込んできた

「ふっ甘いな。新兵」

ドカツ！

「グハッ！？」

俺がCQCで不良少年を吹っ飛ばした

「一応、俺は実戦経験を豊富に積んでいる。そんじょそこらの輩にやられはしないぜ？」

ニヤリと言った

「でしたら、尚更！残ってください」

紫藤が言ってきた

「嫌だね。誰がテメーなんざの事を信じるかよ。取引した後、俺を消すつもりだった輩にな」

「「「「「なんだって！？」「」「」「」

俺らのグループが叫びながら言った

あの時はビックリしたけど、追ってはすべて消したからな。証拠も残さずに……ニヒヒ

「どうせ、お前も同じ魂胆だろ？利用するまで利用し、最後はポイツと捨てちまうに決まってる。」

「……………」

紫藤はだんまりだ

「なんだ？本当の事を言われて何にも言い返せないか。まっせいぜいそうしてるがいいさ。リーダーになる！みたいな小学生発想は、それじゃあな」

そう言って降りようとした時

「調子に乗るな！！！！このクソ餓鬼が！！！！！」

紫藤がキレたのかこっちに突っ込んできた

「はあ、だから俺には敵わないって言ってるだろ？」

呆れながら言った。

そして、CQCをお見舞いしてやった

「ふん！」

ドカツ！！

「ぐは!!」

ドサッ

「こんなものか。だらしがないな。あつ！そうだ。頑張った褒美に武器をやるよ」

そう言つてバビロンから名銃をたくさん出した

ガチャガチャガチャガチャ

「それじゃあな」

そう言つてバスを降りた

そして、歩道橋を渡つてゐる時、

「どうして、奴らなんか武器を渡したの!？」

高城が大声で言つてきた

「待てってあれはちゃんとした銃じゃない」

「どういうこと?だって、ほとんどが名銃ばかりだったじゃん」

コータが聞いてきた

「外見はそう見えたかもしれないが中身はとんだジャンク品だ。」

俺はニヤリと笑いながら言った。これなら、皆にも分かりやすいだろう

「・・・・ハッ！という事は」

コータが気づいたように言う

「ああ、ほとんどが暴発、又は弾詰まり（ジャム）を起こす物ばかりだ」

それが起こった時の奴らの顔が見てみたかったがな／＼しょうがない

「あんた、本当にすごいわね」

高城が感心するように言う

「まあ、伊達に武器商人をしてるわけではないからな。あんな事、日常茶飯事さ。それより、これからどうする？」

俺が皆に聞いた。

「まずは、小室君達と合流しなければなとは言っても何処に居るのか、皆目見当が付かない」

毒島先輩が言った

「ああ、それなら大丈夫ですよ」

「？？どういうことだ？」

「それはですね。これですよ」

と言ってPDAを出した

「英樹、これは？」

森田が聞く

「皆の武器に超小型発信機が付いてる。これなら離れていても場所がすぐに分かるだろ？」

「へーすごいわね。それより、小室達は？」

「待つてろ。えーと御別橋からこっちに向かって来ているな。もうすぐ見えるはずだ」

そう言った。数秒後に……

ヴィイイイン

バイクの音が聞こえたので見てみると、小室達がいた。

その後移動して、土手の下で休憩する事になった

「これから、どうするよ？」

俺が皆聞く

「とりあえず、橋は駄目だったんだよな。すぐに暗くなるしどこかで休まないといけないな」

小室が言った

「あの～それなら良いお部屋があるわよ」

静香先生が言った

「彼氏の部屋？」

高城が嫌みたつぷりに言った

「ち、ちがうよ！！女の子のお友達の部屋！！空港とかの仕事で忙しいから鍵を預かって空気の入れ替えとかしてるの！」

と慌てた様子で言った。でも、先生、それじゃあ、ますます怪しいですよ？

「マンションですか？回りの見晴らしは良いですか？」

コータが聞く

「あっうん！川沿いに建ってるメゾネットだからすぐ近くにコンビニもあるし、後ね車も置きっぱなしなのこ～んなのよ！」

そう言って手を大きく広げて説明したが、今一分からん

「まあ、ともかく移動しようや。暗くなる前に、小室は先に行って安全を確保してくれ」

「分かった。静香先生、案内お願いします。」

「うん！」

そう言って小室の後ろに座つた先生。

・・・・・うらやましいな、あんな双子山がぴつたりと背中にくっついてるなんて

そう思いながらも移動を開始する俺達だった

仮拠点

俺達は静香先生の案内で先生のお友達のマンションに訪れていた。

「マンション前」

「ハンヴィー！それも軍用モデルだ」

コータが叫ぶように言う

「これ持つてるってことは相当のマニアだな」

俺が言った

「ね？すごいでしょ？」

静香先生が嬉しそうに言う

「ともかく、寢床に着けそうだな。」

「そうだな。塀もあるから、奴らは簡単に・・・」

そこで小室が言葉を止めた。理由は・・・

アアアア

マンションの中から奴らが現れた。

どうする？

1・他を探す

2・戦って占拠する

3・逃げる

うん、二番が妥当だな。さっさと終わらして寢床に着こつ。眠い・
・

「小室、準備はいいか？」

「ああ」

「コータ」

「まかせて」

「森田」

「いつでもいいよ」

「よし、行くぞー!!」

ダン!!

そうやって俺らはマンションに居る奴らの掃討を開始した。

数分後

「はい、これで終わりっ！」

タタタタタタ！！！！！！

そう言って最後の奴らをトンプソンで仕留めた

「静香先生、部屋までの案内、お願いします。」

「はいはい」

そう言って友達の部屋まで案内してくれた

「先生の友達の部屋」

「いや、広いな」

俺が第一の感想を述べた

「彼女、警察の特殊部隊だから」

「へ、そうなんすか」

回りを見たが高級感あふれるマンションの一室だった。

「とりあえず、女子組は風呂に入ってきて来いよ。今日のせいでいろいろと疲れただろう？見張りは俺らがやっておくから」

「分かったわ。そうさせてもらっわ」

高城の返事で女子は風呂に入っていた

「さて、俺らは部屋の搜索と見張りをやるぞ。」

「でも、英樹、どこを搜索するの?」

コータが聞いてきた

「そうだな。二階部分に何かあると思うんだが、それ以外、分かん」

「じゃあ、僕と平野で二階を搜索するよ。英樹と森田は一階を頼む」

「「応」」

俺と森田が同時に答えた

「一階」

「森田、そっちは何か見つけたか?」

「いいや、何も」

あれから俺達は搜索していたが、一階からは特にこれと言った物は見つからなかった

とその時だった

「やっぱりあった　　! !」

コータの声が聞こえた

「英樹」

「ああ、行ってみよう」

そう言って二階に上がった

く二階く

「おい、コート何か見つけたのか？」

「あ、英樹、平野が暴走しちゃった」

と困惑気味に言った

見ると、壊れたロッカーの所にコートが蹲っていた

「おい、どうした？コート」

「うふふふ、」

ガチャン！

「スプリングフィールドM1A1か、セミオートだけど、まっM14シリーズのセミオートなんて弾の無駄ずかいにしかないし、マガジンは20発入る！日本じゃ違法だ違法！クウー！」

と完全暴走したコートがいた

「おい、コート……」

「ナイツSR - 25狙撃銃！いや、日本じゃあそんなもの手に入らないからAR - 10を徹底的に改造したのか！？こっちは、クロスボウ！ロビンフットが使った奴の子孫だよ！バーネットワイルドキヤットC - 5！！」

とどんどん銃講義をしてしまう

「これは？」

森田がショットガンを取り出した

「それは！イサカM37ライオットショットガン！アメリカ人が作ったマジヤバな銃だ！ベトナム戦争でも活躍した！！」

「へえ」

ガシャン！

森田はそう言つてスライドアクションをし銃口をコータに向けた

「！！！！！！た、たとえ、シエルが入ってなくても絶対に銃口を人に向けんな！！」

大慌てで言つた

「向けていいのは……」

「奴らだけか……本当にそうならいいけど」

小室が答えを言った

「無理だよ。小室、これは一種の戦争なんだ。どちらかが全滅するまで止まらないルール無き戦争だ」

俺が言った

「でも、戦争って言うなら降伏とかあるだろう?」

「普通ならそうなんだがな。考えてもみる。奴らに智能なんかあるか?さらにサイコ野郎は弱者に耳を傾けないだろう」

そう。普通の戦争ならば互いの国が理想や主義を抱えて反する国と戦う。その中で、降伏などのルールを入れているんだ。

しかし、今の状況は違う。奴らなんかには智能はないそんな奴に弱者の耳は届かないだろう。

「そう・・・だよな」

小室は落胆したように言う。

「まあ、この状況下でいかに、俺らが生き残る。とりあえずはそれで良いんじゃない?難しく考えることはない。自分の思った通りにしてみる」

俺が言う

「・・・ああ」

「それじゃあ、次の課題だ。誰が見張りをする？」

「とりあえず、一人でいいんじゃないか？多すぎてもしょうがないし」

小室が提案を出す

「そうだね。後は弾を込めるのを手伝ってほしい」

とコータが言う

「よし、じゃあ森田、この双眼鏡で見張りをしてくれ」

そう言って小室は森谷双眼鏡を渡した

「OK！ばっちり任せておいてよ」

そう言って小室はベランダに行った

「さて、残り組はこっちで弾込めをするぞ」

「そうだね」

「分かった」

二人は返事をし弾詰めではないということか

そう思ってから作業を開始した

仮拠点2

静香先生の友達の部屋で銃を見つけた俺達は弾をマガジンに入れる作業を行っていた。

森田は外で見張りをしてくれている

カチャカチャ

「小室も手伝ってよく面倒なんだ弾を込めるの」

コータが文句を言いながら弾を込めていた

「それだったら、英樹だって」

「英樹ならほら」

そう言つて英樹の方を指さした。ものすごい速さで弾を込めていた

「ん？なんか言つた？」

「いや、それより二人ともなんで手際いいんだ？」

小室が質問する

「俺達、実銃は持ってやってたからな」

「そうそう」

そう言つて俺とコータは相槌を打つた

「二人して本物持った事あるのかよ!？」

小室が驚いた

「僕は、アメリカに行った時、民間軍事会社ブラックウォーターのインストラクターに一カ月、教えてもらったんだ!元デルタフォースの曹長だよ!！」

「俺は、職業柄、銃を持つ事があつたからな、身を守るために持ってた」

二人がそれぞれの経緯を話す

「マジかよ……お前らと仲良くしておいて良かった」

「あはは」

「にしても、どんな人なんだ? 静香先生の友達、ここにある銃絶対に違法だろ?」

小室が最もな質問した

「と言っても、パーツと銃を別々に買うのは違法じゃない。その後でこういう風に組み合わせたら違法になる。だけど、裏で根回ししたんじゃないか? 俺みたいに武器商人から手に入れたり、正規の軍人からもらつたりして」

俺が答えた

「でも、軍人からもらった事がばれたら、捕まるんじゃないか？」

小室が言う

「要はばれなきゃいい、簡単な事さ」

笑いながら言った

「でも、普通の人じゃないのは確かだね。結婚してない警官って本来なら、寮に住まなければならいんだけど、こんな家を借りてるなんて、実家が金持ちか、付き合ってる男が金持ちか、汚職でもしているのか。」

とコータが疑問を上げた

「まあ、今となっちゃあ関係ないがな。」

俺が言う

その時

「孝！平野！英樹！」

ベランダで見張りをしていた森田が駆け込んできた

「どうした？森田」

小室が答える

「ちょっとテレビ付けてみて」

と言われてテレビを付けた

ピッ！

映ったのは御別橋の所で団体で何かを叫んでいた

「我々は、政府の陰謀に対する、殺人ウイルス蔓延を」

「たった今、地域団体を始めとした。集団がスプラッシュコールを
始めました！！彼らは、この騒動が日米共同で開発した生物兵器が
漏れ、このような事態になったと言っています」

とアナウンサーが彼らの事を説明した

「正気かよ！？死体が動き回るなんて現象、科学的に証明できるわ
けないのに！」

小室が驚きながら言う

「てことは、連中、設定マニアかな？」

「今の現状をみたくないだけじゃないのか？」

俺は呆れながら言った。

人は非現実的なものが起こると、それを戻したくなる。例えば、戻ら
ないと分かっているも・・・それが、人間の愚かさなのかもしれない

そう思っていると橋側から一人の警官が出てきて引きさがるように言った。しかし、集団の先頭に立っていたおっさんが拒否し帰れコールを始めた。

後ろの連中も便乗して帰れ！と叫んでいる

そして、命令を出した警官は独り言を始め・・・・・・・・そして・・・・・

パン！

一発の銃声と共におっさんの額に弾が命中した

その後は砂嵐になり映らなくなった

ピッ

テレビを消した

「どうにもなくなってるね」

コータが言う

「もう、警察や軍なんかは当てにならないだろう。実際に警察が崩壊してんだ。軍もいつまで持つか分からないぞ」

俺が言った

「すぐに出た方が……」

「駄目だよ！明るくならないと奴らにいきなりやられるかも……」

コータと小室が今後の事に着いて話していると後ろから気配を感じた俺はそのまま退却を開始した

「よつと！」

「英樹？おわっ！？」

小室の後ろに何かが寄っていた。その正体は……

「うっふん！こ・む・ろくうん」

「わああ！？し・静香先生！？って酒くさ！？飲んでんですか！？」

「いいじゃない。ちょっとだけよ」

ムギユ

「わあぁっ！あつ！英樹、どこに行くつもりだ！？」

「お、おれ、ちょっと喉乾いたからっ下行ってくるわ」

「ま、待て！俺を助けてからにしてくれ！」

「・・・ごめん！無理！！」

ダッ！

「あつ！！待てっ！卑怯者っ！」

小室の悲痛な叫び？を後に俺は一階に下りた

ゝ一階ゝ

俺は何とか修羅場を脱出して一階のリビングのソファに座りこんだ

「ふう」

俺が一安心していると

「英樹」

「おわ！？」

後ろから、美鈴と敏美がくっついてきた。艶やかな服装で

「英樹」

「どうしたの？」

「なんだ、お前らかゝって酒くさ！？お前らも飲んでんのかよ？それに、タオル一枚なんてどいう格好なんだ？」

「なんで、酒に走るんだ？このお方たちは・・・しかも、服装がタオル一枚ってどこかの映画じゃあるまいし」

「だつて」

「服、洗濯」

「してるんだもん」

「それに」

「疲れて」

「いろんな危険な目に有って」

「そうかそうか。じゃあ、ゆっくり休めよ？」

「それより」

「私達」

「話があるの」

おいおい、今、俺が言った事スル　されましたよ？まあいいや

「で？話って何だ？」

「私達」

「英樹の事が」

「「大好き！！」」

「はっ？」

この方たちは今なんと？俺が好きだって！？

「ど、どういうことなんだ？」

「私達」

「学園で」

「英樹を見たときから」

「ずっと、好きだったの！」

と二人して恥ずかしそうに言った

そうなのか、二人とも俺の事が好きなのか。なら、それ相応の返事をしなきゃな

「分かった。これから、この三人で生き残ってやろう！そして、

俺は二人を愛し続ける！」

そう宣言した。でも、これ言つと恥ずかしいもんだな

「「ありがとう！英樹！」」

そう言つて抱きつき、交互にキスをした

そして、二人はそのまま倒れこむように寝てしまった。しかも俺の膝を枕にして

「どうしよう？動けない……………」

俺はそのまま膝枕をする羽目になってしまった。

小さな女の子を助ける！！

俺は美鈴と敏美から告白を受けて、そのまま寝てしまった二人の面倒を見ていた。

そこで、俺は今後の事について考えていた

「どーっすのかなー？」

俺は誰も答えない部屋で一人愚痴っていた。

その時！

「ロックンロール！」

ドコオオン！！！！

「！！！」

今のコータの声だ。しかも、火を吹いたのはファルコンだ

一体どうしたのだろう？

俺は寝ている二人を起こして二階に上がることにした

「おい、二人とも起きろ」

「う、うん」「

「あ、おはよう」

「英樹」

「おう、おはよう、二人とも出る準備をしろ」

「なにか」

「あつたの？」

「ああ、ここを捨てるかもしれない。だから、準備をしておけ。他の寝てる奴も起こしておけ」

「「分かったわ」」

そう言つて二人と分かれて二階のベランダに出た

「コータ、何があつた？」

「小さな女の子が危ない目に有つてるんだよ。今、小室が助けに行つてる！」

「何!?!」

そう言つてベランダから身を乗り出した。見てみると庭ができている家に奴らがどんどん集まっていた

「よし、俺も手伝うぞ！コータ」

そう言つてバビロンから銃を出した。コータはそれを見て喜んだ

「そ、それは！ドラグノフSVD！ソ連が造った自動狙撃銃だね！」

「ああ、そうだ！それよりコータ、小室を援護するぞ！」

「うん！」

「こーた、Are you ready？」

「OK！」

「fire！」

ダアン！ダアン！ダアン！

ドコーン！ドコーン！ドコーン！

そこから俺達は奴らにありったけの弾をぶちこんだ

（数分後）

小室は無事に少女を助ける事が出来たみたいだが……

「多いな」

俺は家の方を見て言った

「そうだね。あれぐらいだと戦車が必要じゃない？」

「いや、この道幅だと戦車は通れないよ。しゃあない、いつちよ行

つてくるか」

俺は愚痴るように言った

その時

「平野、齊郷」

「高城さん」

「高城か」

そう言つて二人して後ろを振り向いた

「「!!」」

俺とコータは振り向いて驚いた

だって、振り向いた瞬間、し・静香先生が……は、裸、同然でいたんだもん!!

「し!しずかせんせい!」

「……ブ!」

コータは股間を抑えながら、俺はリアル鼻血噴水をしてしまった

「……二人して何してんのよ?」

高城は呆れながら言ってきた

「い、いやなんでもない。それよりなんだ？」

「今すぐ出る準備をして、もう分かってるでしょ？」

「ああ、美鈴と敏美に出る準備をさせた。高城もそっちに回ってくれ」

「分かったわ」

そう言って高城は出る準備を行いに行った

「よし、それじゃあ俺は、小室を助けるか」

「何言ってるの！？英樹、あの数は無理だよ！？」

と言ってきた

「慌てるな。あんなの数の中にも入らない。」

ニヤリと笑いながら言った

「分かった。でも、無理な時は下がってね。」

「ああ、もちろんさ」

そう言ってマンションから出た

（マンション前の通り）

「さあて、いっちょ派手に行きますか！」

そう言つて魔法陣を出した

「出でよ、セイバー、アサシン！」

そう言つてセイバーとアサシンを出した

「アサシンのサーヴァント・佐々木小次郎」

「セイバー参上しました」

「よう、二人ともよろしく頼むぞ。よし、セイバー、例の奴をやつてくれ」

「了解しました」

そう言つてセイバーは光の剣を取り出しこう言い放った

「エクス・カリバー！！」

ドオオオン！！

く小室 sideく

僕はバイクで少女のいる家までたどり着いたが、今度は帰る事が出来なくなっていた

「どーっすかな？」

「逃げられないの？」

この子は稀里ありす、助けられたのはこの子だけだった。

アアアアアア

ガシャン！ガシャン！

「奴らがいっぱいいるんだ。出る事が出来ない」

「なら、いないとこを行けばいいのに・・・」

おいおい、そんなの無理だってそれこそできるとしたら、英樹しかないけど・・・あいつは絶対にやると思う

そんな風に思っていると

「エクス・カリバー！！」

ドオオオン！！！！

「！！！！」

目の前の通りを光の柱が通り過ぎた。そして、光が収まった後・・・

「なっ！？」

僕は驚いた。さっきまでたくさんいた奴らが一瞬にして数体しか残っていないのだから

「小室 side out」

「相変わらず、すごいな」セイバー

俺はセイバーの技を見て感心した

「ありがとうございます」

「よし、セイバーは左・アサシンは右・俺は真ん中の奴らをやる。」

「了解しました」

「承知！」

「よし、行くぞ！」

そう言っただけ俺達は突撃をした

因みに俺はM93Rを所持している（ジョン・ウーみたいでカッコいいから）

「ハア！！」

ズバ！

「秘剣・燕返し！」

ズバ！ズバ！ズバ！

「そら！そら！そら！」

ダン！ダン！ダン！ダン！

そして、奴らを殲滅した後、小室がいる家にたどり着いた。

セイバーとアサシンには戻ってもらった

ギギイ

「大丈夫か？小室」

「ああ、これじゃあ、助けたのに助けられた気分だな」

苦笑いしながら言った

「お嬢ちゃん大丈夫かい？」

俺は優しく言った

「うん……でも、パパが……」

そう言って服をかぶせてある死体に目をやった

「今の内に泣いとけ。後悔が残らないように……………」

「……………うん……う、うわああん」

そして、ありすが泣きやんだ後、小室と一緒に先にマンションに行かせた。俺はと言うと

「さうて、親を失くさせた代償は大きいぞ。クソ野郎ども」

俺はありすから事情を聴いて目の前の家に向かって言った。どんな時でも親と一緒にというのは心の支えになる。

例え、どんな事情であろうと親を失わせた事実には変わらない。だからこそだ

よし、陽動も兼ねて爆発物にしておこうか

そう思つてバビロンからC4やらダイナマイトをたくさん取りだして家の周りに取り付けた

これをやられたら中の奴らは驚くだろう

そして、奴らもこっちに引き寄せられる

そう思つて一旦、離れた

くマンション前く

俺はマンション前に戻っていた。皆、準備ができてるみたいだな。ていうかハンヴィーは確か、6人乗りだったよな？まあ大丈夫か？

「「英樹！！」」

ポフッ

「おわつと！？」

「もう」

「心配したんだよ？」

二人が潤る目で見てきた。マジで可愛い

「悪いな二人とも、あの子と小室を助けるためだったんだ」

そう言つて二人を抱きしめた

「／／／／／」

二人は真つ赤つかになった

かわいいな

「三人とも桃色空気はいいけどそろそろ出発するわよ」

高城がニヤニヤしながら言った

「……分かつてるよ。ほら、二人とも行くぞ」

「うん」

そう言つて俺達もハンヴィーに乗り込んだ

ブオオオオオ

そして、発進した

「そういえば、英樹」

「なんだ？小室」

「さっきの家で何してきたの？」

「ああ、ちょっとした陽動装置さ」

「陽動装置？」

「これを押せば分かるさ」

ピッ

ドオオオン！！！！

さっき仕掛けた爆弾が一斉に爆発し、遠くから悲鳴が聞こえる

「なっ！？」

俺以外の全員が驚いた

「何をしたんだ!？」

小室が聞いてきた

「爆弾をあの家仕掛けて来たんだ」

「なに！？どうしてそんな事を、あの家には生存者がいるんだぞ！？」

「知っていたさ」

「なら、なんで!？」

「許せなかつたのさ」

「許せなかった？」

「自分勝手に振る舞い、他人の親を殺してまでも生き残る。それが許せないんだ」

そう。他人を助けながら生き残る。甘いかもしれないが今の状況じゃあ人間としてとつても大切なことだと思う。それが心の支えになるし生きる希望にもなる。

それはどんな力よりも強いものだ。たとえ、武器を持っていても

もちろん、自分や仲間にとって危険な奴はさつさと捨てるけどね。そこまで、できるような人間じゃあないしそんな奴はクソだと俺は思ってる。

「そうか、怒ってすまなかったな。」

「良いつて、俺は俺の正義を貫いたまでだ。そして、敵討ちをな」

そうして俺達の乗せたハンヴィーは川の方に進んでいった

川を渡りんしゃい！・・・・・・・・僕のお家へ・・・・・・・・（前書き）

メリ〜クリスマス！

皆はどのようにお過ごしかな？

川を渡りんしゃい！・・・・・・僕のお家へ・・・・・・

マンションを脱出した俺達は川から、向こう岸に渡るため上流の方まで来ていた。

なんとか、渡れそうな部分まで来たが新たな問題が発生した。それは、人数が多すぎてハンヴィーが途中で沈没する可能性が出てきたのだ！

「どうする？皆」

小室が聞いてきた。

現在、俺達のチームは合計で12人になっていた。ハンヴィーは6人乗りなので多少は大丈夫なのだが、一気に12人を乗せるのはさすがのハンヴィーでもきつい物がある

半々に分けようとしたがその間に奴らが集まってくる可能性が高い

「あ！そくだ！」

俺が思い出したように言う

「何か思いついたの？英樹」

コータが聞いてきた

「ああ、俺のバーサーカーなら行けるんじゃないかな」

「「「「「バーサーカー？」「」「」「」

俺、美鈴、敏美以外の皆が分からないと言った表情を出した

「今から、出すよ。バーサーカー」

そう言つて魔法陣からバーサーカーを出した

「お呼びでしょうか？マスター？」

「「「「「！！」「」「」

「わあゝすっごい大きいね」

ありすがはしゃぐ

「ああ、そうだろう？皆、そんな身構えなくていい。こいつはバーサーカー、またの名をヘラクレス」

「ヘラクレス！？」

高城が驚くように言う

「知っているのか！？高城！」

小室が言う

「ええ、ヘラクレス。ギリシャの大英雄よ。日本風に言つと狂戦士とも言つわ」

「おっ！良く知ってるな」正解だ。こいつは本物の大英雄だ。」

「マスター。そんなに褒めないでいただきたい。」

「そんなに照れるなつてヘラクレス、これは本当の事なんだから、で、これから川を渡ろうと思ってただけど、車の方が人数が多すぎて渡れないんだよね」頼む、肩、貸してくれないか？」

バーサーカーに頼んだ

「良いでしょう。これが従者の務め、喜んでやらせていただきますよう」

バーサーカーは賛同してくれた

「いつもいつも、悪いな」

「気にしないで下さい。」

「じゃあ、ハンヴィーの方に静香先生、小室、宮本、高城、毒島先輩、コータ、あります、ジーク、森田が乗ってくれ。バーサーカーの方に残りが乗る。それでいいか？小室」

「ああ、それでいい」

「よし、乗るか！」

俺の合図とともに皆が動き出した。

「川を渡河中」

俺はバーサーカーの方に乗ってのらりくらりとしていた

「すごいね。英樹」

美鈴と敏美が言ってきた

「ああ、これだと、あっという間に着いちゃうな」

その時

「漕げ、漕げ、漕げよ。もっと漕げよ」ランランラン、川下り」

ハンヴィーの方から歌が聞こえてきた

「おっうまいな」

「そうだね」

「ありす、英語でも歌えるよ!」

「すごいね」歌ってみてよ

「law, law, law, your, bout, just, the, dream, merry, merry, merry, merry, life, but, dream」

おっおっあの年にして、英語で歌えるなんてすごい才能だな。それにしても、コータよ。その怪しい笑みなんだ?何かやらかすつもり

だな

俺は内心、ハラハラしながら思っていた

「じゃあ、今度は替え歌だ！」

笑顔で言った。絶対に何かやらかすぞ。こいつは！

次の瞬間

「shot, shot, shot, shot, gun! kill, tham, now! bann! bann! bann! bann! lift, but, dream!」(略、撃て！撃て！撃て！撃てよ！皆殺しまくれ！バン！バン！バン！バン！あーたまんね！)

やりやがった。子供の前で変な替え歌するなよ！コータさん

「ちよつと、そのデブオタ！！子供に変な替え歌教えるんじゃない！！分かってんの？元はマザーグースなのよ？」

あつ怒られた。

そんなこんなで川向うに着いた俺達、女子は昨日から同じ格好なので服を着替えることになった。

俺達、男子陣はハンヴィーを壁にして今後の事を相談した

「それで？これからどうする？」

森田が聞いた

「この付近はほとんどが学園の寄宿舎に住んでた奴らだ。まずは俺の家に向かってほしい。乗り物や武器、食糧を確保しなきゃあいけないだろう？」

俺が言った

「英樹は、ここから近いんだっけ？」

コータが聞いてきた

「ああ、ここから、直線距離で数百メートルと言ったところだろう。で？その後は？小室」

「ああ、その次に近いのは高城の家だ。そこに向かう」

「よし、それで行こう。」

そう言った瞬間

「お兄ちゃん！」

「「「ん？」「」「」

全員でハンヴィーの陰から出るとそこには……………

「WOW!!」

俺は思わず英語で言ってしまった。だって、艶やかな衣装に身を包んだ女子陣がいたから

小室と森田は苦笑いし、コートはまたもや怪しい笑みをしていた

「なに？文句ある？」

宮本が小室に言った

「いや、それよりこれからの事なんだけど、まずは、英樹の家から行くことになったんだ」

「どうしてなの？」

静香先生が聞いてきた

「自分の家には武器、車両、食糧があります。準備を整えた方がいいでしょう。それから高城の家へと向かいます」

俺が説明すると、みんな納得してくれた

そして、そのまま俺の家に向かうことになった

「俺の家」

俺の家の前に着くと悲惨な光景が広がっていた

生身の人間がバラバラになっていたり焼かれていたり

「なんなのこれは？」

高城が言った

「大方、俺の家に侵入しようとして返り討ちにあつたんだな。」

「なに？英樹ん家には防犯装置でも付いてるの？」

コータが聞いてきた

「ああ、火炎放射機にブービートラップ、自動機関銃が付いてる」

「それ、防犯つて域じゃないよ……」

「そうか？念には念をって言うじゃないか。とりあえず入ろうぜ」

そう言つて俺の家に入った

く中く

「へく中つて広いだね」

森田が言つた

「まあ、そこまでじゃないさ。よし、コータ、森田、小室は俺について来てくれ。女子たちは食糧を頼む」

そう言つて俺は男子陣を連れた

「英樹、どこにあるのさ。武器や車両は」

コータが聞いてきた

「慌てなさんな。ちゃんと見せるから。おっ！ここだ」

そう言つてたどり着いたのは家の端っこのところだった

「ここにあるのか？」

小室が聞いてきた

「ああ、見て驚くなよ？」

カチッ

ガラガラガラ

秘密の扉が開いたその先には……

「うつひょー！！」

コータが叫んだ。無理もない。ミリオタにはたまない宝庫だからな
そこに、広がっていたのは世界のあらゆる軍事車両が止まっていた
のだからな

耐えて上げるなら、ソ連のBMPやアメリカのエイブラムズまであ
ったのだから

「すごいすごい！！これは堪んないな〜！」

「ああ、そうだろう？それじゃあ好きなのを選んでくれ、コータ」

「そうだな。まずはロシアのウラル4320だね。兵員輸送車兼武器輸送に使えるから、次にドイツのデインゴ2だね。こつちもハンヴィーと同じくらい装甲はあるから、それに難しい8輪よりは大丈夫だと思う。」

「そうだな。それじゃあ銃器の方に移ろう。」

そう言つて奥に進んだ

パチンッ！

「いーっやほーう！！」

おうおう、今度は踊つたぞ

「こつちに有るのはバレットM82A1！アメリカ軍の対物ライフルだよ！こつちにはMG42！旧ドイツ軍が創つた、軽機関銃の祖先だよ！！あー！こつちはジャベリン！アメリカ軍の対戦車ランチャーだ！」

と喜び乱舞するコータだった

数分後

「気が済んだか？」

「う、うん。御免、でも英樹、どうするの？こんなに銃を持っていけないよ？」

「そんなことか。ここに入ればいいだろう？」

ヒュウン

「あっその四次元ポケットがあつたか」

「そうそう。パンパカンパンパン、どこでもドアってちゃうわ！」

バシッ！

コートを殴った

「いた！？」

「全く、ほれ、それよりちやっちやかと済ませるぞ。全員動け！ MOVE！MOVE！MOVE！MOVE！MOVE！」

そう言つて準備をした

数分後

「よし、終わりつと」

ドスッ

粗方、準備を終えた俺達はそのまま、車を車庫から出した

高城達が何か言っていたが気にしないでおこつ

そして、俺達はそのまま高城の家に向かった

・・・死亡フラグ？んなの認めるか！

俺の家を出発した俺達はそのまま高城の家に向かうことになった

今、俺はウルル4320を運転している

ブオオオオ

「すごいね！」

「英樹」

「こんなもんお茶の子さいさいだ！まあ、二人はくつろいでなよ」

乗るときにそれぞれの車両に乗った

ハンヴィー

静香先生、小室、宮本、毒島先輩

ディンゴ2

コータ、森田、ありす、ジーク

ウルル4320

俺、美鈴、敏美

のように分かれている

先頭はハンヴィー俺達は最後尾にいる

まああわよくばこのまま、無事にたどり着けるかな？と思っていたが、ある事に気付いた

「おかしいな」

俺が呟くように言う

「何が？」

二人が聞いてきた

「奴らさ、こっちに来てから一度も出くわしてない。おかしすぎる」

そう。奴らは音に反応するのだとしたら、今の状況はまさにそうだ。

周りは昨日と違い、物音ひとつしないとはどういうことだ？

「前に英樹が」

「言ってた。生存者の可能性は？」

「それもあるかも知れんがだとしても一匹もないというのはおかしい何かあるぞ」

その時だった

「英樹！」

無線でコータが呼びかけてきた

「どうした！？」

「前からの報告で奴らが現れたみたいだよ！」

「マジでか！？とりあえず、前に付いていくぞ！」

「分かった！」

そうして、俺達はハンヴィーについて行った

キュルキュル！！

ハンヴィーは右に曲がった

「右か・・・」

俺達も付いて行った

キュルキュル！！

今度は左に曲がった

その先にはたくさんの奴らがいた

「そのまま突き進んで！」

無線越しに高城の声が聞こえた

「ダメ！止まって！」

また、無線越しに聞こえた

そして、ハンヴィーが左に曲がった、デイゴン2は右に曲がり、両方ともワイヤーらしき物にぶつかった

俺達はなんとかその前で止まったが、奴らが多い場所だウラルは車高が高いので大丈夫だと思うが・・・問題はハンヴィーやデイゴン2の方が気がかりだ

〈冴子side〉

私達は齊郷君の家で武器、車両、食糧を整えて高城君の家に向かっていた。途中で奴らと遭遇し車を飛ばしたが思いもよらない事が起きた

なんと、途中の道がワイヤーが張られており私達の乗せたハンヴィーはワイヤーに引っかかり何とか止まった。

平野君の乗った装甲車も何とか止まったようだが

私達の周りには奴らが大勢いた

私は備中青江を手にし車外に出た

アアアアア

「はぁ！！！」

ズシャア！

目の前に居た奴らを切り捨てて次へと目標を定めた

ダアン！！

「冴子さん！僕も手伝います！」

小室君が言った

「ああ、よろしく頼むよ！」

そう言つて私達は駆逐し始めた

〈冴子 side out〉

ハンヴィーの方にもディゴン2の方にも奴らが群がっていた。無論、俺のウラルにも群がっている。今、美鈴と敏美が後部で奴らを掃討している

俺は無線で皆の無事を確認した

「両方とも大丈夫か！？」

「高城よ。こっちは全員無事、今、小室と毒島先輩と宮本が蹴散らしてるわ」

「こちら、コータ、全員無事だ。今、僕と森田でやってる」

そうか、無事なら安心だ。だが、俺達はヤバい状況だ。一般的には

これを死亡フラグというがそんな事気にしない！

俺は、M2キヤリバーを出し、ウラルに取り付けた

「おらー！掃除の時間だ！」

ドドドドドドドド！……！！……！！

アアアアアア

それから、俺達はなんとかやってみたが奴らは増える一方だった

「英樹」

無線から小室の声が聞こえた

「どうした！？小室」

「こいつらを引き付けてみる！」

「！無茶だ！いくらなんでも！おい！小室！小室！」

それから無線から小室の声が聞こえなくなり代わりに

ガン！ガン！

「おらー！こつちだ！」

奴らの中を駆け抜ける小室と毒島先輩がいた

「小室！」

「英樹！後を頼んだ！」

「こつちだ！小室君！」

「はい！」

そう言つて階段を駆け上がったが、付いて来たのはほんの数体だった

ガン！

「くそ！こつちだつて言つてんだろ！！」

その時だった

「皆、伏せなさい！」

そう言つて現れたのは消防服に身を包んだ団体だった。

「消防」

「かな？」

二人が聞いて来た

「いや、それにしても物々しすぎる」

そう言っている間にもワイヤーの近くに居たハンヴィーグループと
デインゴ2グループは救助され俺達にも

「そこの君達も！速くこっちに来なさい！」

そして、小室と毒島先輩以外の全員が助かったのだ

「ふいゝ助かったゝ」

俺は安堵の声を出した

静香先生がお礼を言う

「先程は助けていただき、本当にありがとうございます！」

「当然です。娘とその友達を助けてくれたのですから」

そう言ってメット外した

「！ママ！ママ！」

高城が抱きついた

知る人ぞ知る、高城の母、高城百合子だった

「そつだ！小室達は！？」

そう言つて小室がいた階段の方を見たがすでに移送した後のようだった

「待つてるから！私の家で、待つてるから　！」

高城が叫んだ

こうして、俺達は小室と毒島先輩以外は助かったのである

「百合子さんのその時のコードネームがロンリ ウルフ（一匹狼）だったからな。かつこ良かったぜ」

「もう、英樹君、褒めても何も出ないわよ」

と照れながら言った

そうこうしてる内に高城の家に着いた

「でか」

コータが言った

「さあ、入りましょう」

百合子さんが先頭で誘導してくれた

→ 高城家内部

俺達はそれぞれの家に案内され各々の時間になった。俺は百合子さんに久しぶりに話したいと言われたのでバルコニーに来ていた

「百合子さん、あれからどうしたんです？」

「あれからって？」

「俺を助けてくれたあと、そのまま日本に帰国したって言ったじゃないすか」

「ああ、その後、私は壮一郎さんと出会って、結婚に至ったのよ。そう言う英樹君は？」

「俺は、しばらくはアメリカに居たんすけど警察が厳しくなってきたて帰国しました。その後は自分の家を拠点に幅広く商売してました。でも、世界がこんなになりやあ商売もできなくなりますね」

そう、奴らに銃は必要ない。必要なのは本能の食えることだけだそんな奴らに商売何ぞできやしないましてや、自分のために銃を欲する奴にも売買しないがな

俺が銃を売るのは本当にそういう理由の奴だけだ。まあ例外もいるが……

「そうよね。本当にできなくなるわね」

百合子さんも賛成してくれたようだ

「そういえば、壮一郎さんはどこにいるんです？」

「壮一郎さんは、今、部下の人達と共に物資を集めてるはずよ。多分、明日の昼には戻ってくると思うわ」

「そうなんですか。大変ですね、右翼の人達も」

「ええ、でも、少しでも生存者がいれば助けくると思うわ。彼なら」

実は、高城会長とも知り合いなのだ。何故かという、百合子さんが武器調達のために英樹を推薦したからだ。

そのおかげで、会長や部下の人達とも仲がいいのだ

「それじゃあ、これで失礼します」

「ええ、皆さんにも挨拶してってね」

「はい」

そう言って部屋を後にした

俺は、地下の車庫に来た。車庫には俺達の車両が置かれていた

「松戸さん」

「ん？おう、英樹の旦那久しぶりですな」

「うん。久しぶりどう？車の方は」

「ハンヴィーの方がちょっとばかし傷が付いてますが、他は大丈夫ですな。」

「そうか、良かった。じゃあ、ちよつと、銃の方を調整するから奥、借りるね」

「分かりやした」

そう言っつて奥に進むと専用の作業場があった

「よし、ちゃっっちゃかとやりますか！」

そう言って出したのはトンプソンだ

一番使っているが、こいつは壊れやすいので慎重に扱わなければならない

カチャカチャ

そうこうしていろんな銃器を調整した

「旦那」

「ん？どうしたの松戸さん」

「いや、車の方がなんとか終わっただんで知らせに気たんすけど、そ
うちは大変そうですね」

「そうかな？車に比べたら比較的簡単だと思うけど、」

「それじゃあ、少しお茶にしませんか？茶菓子とかあるんで」

「本当？じゃあ甘えさせてもらおうかな」

「では、こちらに」

そう言って松戸さんと少しお茶して分かれた俺は美鈴と敏美が気になっ
たので部屋に行ってみた

コンコン

「二人ともいる？」

「「あっ英樹！いいよ、入ってきて」」

ガチャ

「お邪魔します」

部屋に入ると二人は机に座ってお茶を飲んでいたようだ

「英樹」

「どうしたの？」

「いや、二人の顔が見たくなってね。二人とも何してたんだ？」

二人に聞いた

「うん、小室君と」

「毒島先輩が心配で」

「そうか。でも、あの二人なら大丈夫だろう。なんせ武器は俺が用意したもんなんだ。一級品であることには間違いないぜ。だから、心配しなくていい」

その時だった

ダッダッダッダッダ

ダン！

「英樹！」

コータが部屋に入ってきた

「どうした？コータ、そんなに慌てて」

「小室達が……小室達がここに着いたみたいだよ！！」

「何！？本当か！？」

「うん！今、裏門からこつちに来たみたいなんだ。皆で迎えに行こうと思っただけで行く？」

「もちろん！二人もそれで良いよな？」

「「うん！」」

そう言っただけ俺達は裏門に行った

高城壮一郎

俺達は裏門に行った。なんと、小室達がここにたどり着いたらしい

く裏門く

裏門に行くとみんなが集まっていた

「小室！」

俺が呼んだ

「英樹！」

「良かった。無事なんだな」

「ああ、なんとかね。皆も無事でよかった。」

その後、皆で喜びを分かち合った

「小室、」

「なんだ？英樹」

「とりあえず、着替えたら？返り血がすごいぞ」

「え？あつ」

小室と毒島先輩の服は返り血ですごい事になっていた

「そうだな。そうするよ」

「じゃあ、百合子さんに話してくるよ。美鈴、敏美、来てくれないか？」

「「いいわ」」

そう言って裏門を離れ百合子さんの部屋に行った

トントン

「百合子さん、いますか？」

「はい、どうしたの？」

「小室と毒島先輩がここにたどり着いたんですが、返り血がすごくて、服がすごい事になってるんですよ。服、貸してもらえませんか？」

「いいわよ。後で持っていてあげるわ」

「すみませんね」

「いいのよ。お互いさまじゃない」

「それじゃあ、失礼しますね」

「ええ」

そう言って俺達は百合子さんの部屋を離れた

「ねえ」

「英樹、」

「どこか、」

「行こうよ」

「そうだな。じゃあ庭を散策するか」

「「やったー!!」」

二人は喜んだみたいだ

「庭」

「「すごい、大きいね!」」

「ああ、そうだな」

俺達のはのんびりと庭を散策していた

「ねえ」

「英樹」

「なんだ?」

「私達」

「これから」

「「どうなるのかな？」」

二人が質問してきた

「これからってこのままでいるって事か？」

「「うん」」

「どうだろうな」百合子さん達の目的は小室達と違うからな」別れるんじゃないか？」

「やっぱり」

「そうなるのかな？」

「多分な、このままいれば日常の生活が手に入るだろう。だが、外は地獄その物だ。」

「「・・・・・・・・」」

二人は黙って聞いてくれる

「だが、小室達はそれでも親を探しに行くだろう。どんな結果が待っているよとな・・・・」

その時だった

「英樹！」

「ん？森田、どうした？」

「小室達が話があるってさ。みんな集まってるよ。」

「OK、どの部屋だ？」

「宮本の部屋」

「よし、行こう」

そう言っただけで俺達は宮本の部屋に向かった

「宮本の部屋」

「で？なんで、あたしの部屋なの？」

第一声がこれだった

「仕方ないだろう？麗は動けないんだから」

小室が最もなことを言った

「それで？高城、話つて言うのはなんだ？」

俺が言った

「皆も分かっているでしょう？私達は日常の生活を取り戻したと言え

るわ。だけど、この先も仲間にいるかどうかよ」

「ぶほっ!!」

わあ!!いきなし、吐かないでよ、静香先生

「どう意味だ？」

「確かにそうだね。我々はより強い結束と合流したわけだ。」

毒島先輩が言った

「選択はふたつつきり!!」

高城が言った

「飲み込まれるか」

「別れるかだな」

俺が言った

「でも、別れる必要があるのか？」

バン!

高城がバルコニーの扉を開いた

「ここから、見渡せばいいわ!そとがどうなってるかを!!」

そう言つて小室に双眼鏡を渡した

「街は……酷くなる一方だな」

双眼鏡で見ながら小室が言つた

「高城のお父さんはすごいな！ここまで物資を集めたりしてさすがは右翼の会長さんだよ」

小室が呟くように言う

「ええ！確かにすごいわ！私の両親は最高！異変に気づけば、すぐさま動いて、部下とその家族を助けた！本当にすごいわ！もちろん！娘の事は忘れはしなかった！むしろ、一番に考えたわ！」

「お、おいたか「名前で呼びなさいよ！」……ご両親を悪く言つちやいけない」

「さすがよ！！さすがはあたしのパパとママ！生き残ってるはずがないから即座に諦めていたなんて！」

その時、小室が動いた

「やめろ！！！！沙耶！！！！」

思いつきり胸倉を掴んだ

「か……………はっ……………」

「皆……………皆、同じなんだ！！いや、親が生き残ってるだけ、

皆黙っていた

だが……

「刀じゃあ効率が悪すぎる」

コータが口を開いた

「決めつけが過ぎるよ。平野君」

その言葉に毒島先輩が反論した

「で、でも！三・四人切ったら使い物にならないし！骨に当たった
ら刀が欠けちゃいます！」

「平野君、結果は乗数で決まるのだよ。剣の良さ、使い手の技術、
精神力があれば、刀は戦力を失わない」

「で、でも！！」

「お、おい平野……」

小室が止めようとしたが

「触るな！！まともに銃が撃てないくせに！！」

「平野！！あんた、いい加減にきなさいよ！！」

「クッ！！」

タッタッタッタ

コータはそのまま出て行った

「なんだよ。あいつ……」

「小室君、平野君も男の子なのだよ。」

「ええ、分かっていますけど……」

「君のそういう所が……いや、同じ硬化の裏表か……」

そう言っただけ毒島先輩も出て行った

暫く、沈黙が続いたが俺が口を割った

「小室」

「……なんだよ」

「もう一度、話し合ってみる。分かるまで、話し合っただ。原因は必ずある」

そう言っただ俺も部屋を出た

（廊下）

「「待つて、英樹」」

「ん？どうした？二人とも」

「あそこ」

「居心地」

「悪かったから」

「そうか、なら、一緒に行くか？」

「「うん！」」

そう言っ て俺達は進んでいった

これから……

俺達は高城家館内を散策していた。

「ねえ」

「英樹」

二人が聞いて来た

「なんだ？」

「平野君」

「どうしちゃったの？」

「ああ、あれか。あれは一種の表しみたいなものだ」

「「表し？」」

「そうだ。毒島先輩なら刀、宮本なら槍、俺とコータなら銃みたいにな。自分でやる事を見つけたんだろう。まあ偏見の部分もあるかも知れんが」

「へえ」

「そうなんだ」

二人は納得したみたいに言った

その時だった

「何を騒いでいる!!!」

「「「!!!?」」」

俺達は突然聞こえた怒声にビックリしたが声のした方に移動した

「庭」

俺達は庭に出た。そして、見るとコートを囲んで会長とその部下がいた

「私は高城壮一郎！少年！名を聞こう」

「ひ、平野コータ！藤見学園二年B組！出席番号32番ですう」

「声に覇気があってよろしい！平野君……どうあっても銃は渡さないつもりかね？」

「だ、駄目です！嫌です！銃を取られたら俺は……やっ自分ができる事が見つかったのに!!」

コータは大声で言った

「自分にできる事とは何かな？」

「そ、それは……それは!!」

コータが言おうとした瞬間

「あなたのお譲さんを守ることです!」

小室が言った

「こ、小室……」

「小室？聞いた事のある名だ。娘とは良くしてもらっていると」

「ええ、そうです。ですが、平野は、この地獄の中あなたのお譲さんを守ってきました」

「自分も彼の活躍を目にしています。高城総帥」

毒島先輩が言った

「あたしもよパパ！こいつはどうしようもない軍オタだけど、こいつがいなかったら今頃、奴らの仲間入りをしていたわ。」

高城が言った

「高城……さん」

そして、俺も言った

「高城さん。俺も、見ていますよ。彼の活躍は」

「む？英樹君か。」

「ええ、お久しぶりですね。」

「うむ。それより行くぞ。お前達」

「「「「「はっ！」「」「」」」」

そう言つて高城会長はその場を離れた

「おら、大丈夫か？コータ」

俺は笑顔で言つた

「ひ、英樹」

「話せるなら大丈夫だな。」

そう言つて平野を肩を貸した

しばらくして、高城会長に呼ばれたので、離れに向かっていた

「ここか」

離れを見て言つた

「高城さん！いますか？」

「うむ！入ってまいれ！」

「失礼します。」

そう言つて離れに入つた

「久しいな英樹君」

「ええ、あなたがまだ、軍人の頃でしたね。」

そう。英樹は一回高城会長とアメリカで会つていた

「その頃よりずいぶんと遅くなつたな。あれからはどうした？」

「俺はアメリカにしばらくいた頃、警察が厳しくなつたんで日本に戻つてきた。それで、自分の家を拠点に商売していました」

「なるほど、それで、君はこれからどうするのかね？」

「俺は、小室達と一緒に小室達の親を探す手伝いをします。」

「はっはっはっは！なんとまあ、君ともあろう者が物好きだな！」

「いや、俺は信じる物しか手助けはしません。信用できない奴は死あるのみです。」

「そうだったな。君はそういう主義だったな。」

「ええ、ではそろそろ行かせてもらいます」

「うむ！」

そう言って俺は離れを出て行った

俺は正面玄関に行った

く正面玄関く

正面玄関にたどり着くと小室達がいた

「小室、どうした？そんな恰好して」

「いや、俺達は親を探しに行くって言ったら高城会長がOKしてくれてね。それで、出る準備をしていた」

「そうかそうかだったら俺も準備しますか」

「いいのか？」

「何が？」

「いや、こう言うのもなんだけど、ここから先は僕達の我儘なんだ。無理について来る事はない」

「それじゃあ、残ってるってか？おいおい、武器の補給は誰がやるんだ？コータか？森田か？」

「あ！そっぴやそっぴやだつたな。だつたら英樹一緒に来てくれるか？」

そう言つた瞬間だつた

「！！」

ダッ！

「麗！？」

宮本が走り出した

俺達も付いて行った。

そこには最悪の厄災がいた

人ってのは怖いねえ」

俺達は小室と宮本の親を探すため、高城邸を出る予定だったが、そこで想定外の問題が起きた。本当に最悪だ

宮本が突然走り出したかと思えば、先には奴がいた

宮本は静香先生の友達の家で見つけた銃、M1A1の銃剣を使っていた

「お久しぶりね。紫藤先生？」

「み、宮本さん……御無事で何より……」

「ねえ、先生？私がどうして銃剣が強いかわかってる？お父さんに教わってたからよ！県大会じゃあ負け知らずのお父さんに泣いて謝られたわ！自分せいで留年させてしまったってね！」

そう言って剣先を奴の頬に突き付けた

「さ、殺人を犯すのですか？警官の娘なのに！？」

「うるさい！誰があんなに……」

その時だった

「ならば！殺すがいい！！」

現れたのは高城さんだった

「私もその男とはいくつかの関わりがある！だが、今となっては関係ない！殺すというのならそうしろ！必要とあらば私もそうする！」

そう言つて引きさがった

「麗！」

孝が止めようとしたが……………

ガシッ！！

「英樹！？何すんだ！！！」

俺が止めた

「今、止めたら。この先、宮本は一生抱えることになる。我慢しろ」

「……………クッ！」

空間が止まったようにも思えた。

そして……………

スウ

宮本が銃口を下げた

「それが、君の答えなのかね？」

「・・・・・・・・・・殺す価値もありませんから」

そう言つて俺らの所に戻つた

でも、なんか不完全燃焼なんだよな。奴を苛めるか

「高城会長」

「なんだね？英樹君」

「ちよつとあのクソと話させてもらつていいですか？」

「少しだけだぞ」

「はい」

そう言つて奴の前に立つた

「よう、ろくでなし」

「き、貴様は！」

「なんだ？さっきまでの迫力はどうした？全く見る影もねえな。学園の時とは大違いだ。まあこんな状況になりやあ本性が現れるって言うしな」

笑いながら言つてやつた

「・・・・・・・・・・」

奴は黙ったまんまだ。へっ！いい気味だぜ！

「なんだ？本当の事が当たって何も言えないか？ダッセー！こりゃあ笑いもんだ！」

大笑いで言つてやった

「……………貴様！！！！黙って氣いてりゃあ！！！！良い氣になるな……………！！！」

ガチャ！！

持っていたのは俺が出した名銃だった

銃の名はM500

こいつは世界最大のハンドガンで両手で使わないと大変なことになる銃である

「……………英樹！！！！！！……………」

その場にいた全員が撃たれると思っていたらしい

だが、俺は

「ふふふ、ははははははは！！！！！！！！！！……………」

俺は笑っていた

「何がおかしい！！！」

奴は怒鳴っていた

「撃てるもんなら撃ってみろ!!」

これまで出した事のなかった声を出した

「!!!う、うわあああ!!!!!!」

ダーン!!!!

一発の銃声が響いた……………しかし

「これだから、信用できない奴は」

呆れながら言った

「ぐあああ!!!!」

奴はのたうちまわっていた

何故かというと、奴の銃が暴発し俺には弾が当たらなかったのだ!

「て、てめえ!先生に何しやがった!!」

金髪不良が言った

「なに、銃の整備もできない新兵がいるんじゃない」

ニヤリと笑った

「てめえ!!」

ガチャ!

不良も銃を出した。だが、

よく見てみるとあれは俺が出したもんじゃない!!

俺は急いでガバメントを出した

ダーン!

奴の銃が火を放った

ダーン!

俺もガバメントで撃った

果たして銃弾は!?

カキーン!

銃弾は互いにぶつかってそのまま地面に落ちた

「ヒュゝアブねアブね」

俺が言った

「うむ！見事だった英樹君！相変わらずの腕だな！」

高城さんが俺の腕に感動したようだ

「お前達は去れ！本当なら教育し直してやっていいがそんな時間はない！乗ってきたバスで戻れ！」

そう言つて紫藤達を追い返した

「はあゝ疲れたゝ」

俺は緊張をやつと解いた

「「英樹！」」

ポフッ！

「おつと！」

美鈴と敏美が抱きついた

「もう心配」

「したんだからね」

二人が泣きながら言った

「悪いな。二人とも、まさか、予想外の事が起きたからな」

「「予想外の事って？」」

二人が聞いて来た

「ああ、不良の持ってた銃が俺のあげた奴じゃあなかったんだよ。あれにはビックリしたな」

本当にびっくりしたぜ

「そつだ。俺、着替えてくるから」

そう言つて一旦、高城邸に入った

俺は家から持ち出したある服に着替えた

ちよつと時間はかかるがこいつは軍隊仕様だからな十分この状況に対応できるだろう

そう思いながら着替えていった

電磁波攻撃ってすごいね

高城の館に逃げ込んできた。クソ野郎どもを追い返した俺は自分の部屋に戻り服を着替えた。

「よし、これで良いだろう」

鏡で見ながら言った。

俺は部屋を出て皆のいる。玄関前に来た。

「あーー!!」

玄関前に着いた瞬間、静香先生の大声が響いた

「せんせー、どうしたのー？」

ありすが聞いた

「友達の電話番号、思い出したのよー携帯貸して!」

「あっはい」

小室が携帯を静香先生に渡した。

「えーと、一番がここで、二がここで……」

とゆっくりと番号を押した

耐えきれなくなったコータが

「代わりに押しましようか？」

と言った

「んゝ分からなくなるから邪魔しちゃだゝめ！」

と拒否った

そして……

トゥルルルル……

「はい、もしもし」

「あ　！リカ！？」

どうやら、繋がったようだ

その隙に俺は皆の元に戻った

「繋がったんだな」

俺がコータに言った

「あつ英樹、もどったん……」

そこで、コータが止まった

「コータ、どうしたんだ？」

俺が聞いた

「英樹、どこの軍隊？」

俺の姿を見て言った

「ああ、これが、某国の大佐から頂いた。貴重な物だ。全部、本物だぜ？」

ニヤリと笑いながら言った

因みに上下は迷彩色で、コンバットアーマーなど、軍隊が使用する物を取りつけていた。これだけで、重さは約、五キロ半って所だ

その後、皆も俺の姿にビックリしたようだ。

いやゝ人をビックリさせるのって楽しいねゝ

とその時だった

ピカー！！

突然の光と共に周囲が明るくなった

「な、なんだ！？」

小室が叫んだ

ガッ！

「り、りか！？リカ！！？」

静香先生が携帯に向かって叫んだ

これは、まさか……

「これって……！！！」

高城が気づいたようだ

「気づいたか？高城」

「気づいたって事は、英樹も？」

「ああ、同じ考えだろう」

この状況で電子機器が壊れるって言ったたらあれしかないしな

「何か知っているのか？英樹」

小室が聞いて来た

「ああ、EMP攻撃だろう」

「……………EMP攻撃？」「……………」

俺と高城以外の全員が分からないって言ったところだ

「コータ、お前も分からのかい」

「う、うん。銃以外にあんまり詳しくないから」

「おいおい、軍オタが聞いて呆れるぜ」ちゃんと勉強しとけよ。じやあ、説明するぞ。EMP攻撃ってのは日本語で言うなら電磁パルス攻撃の事だ。こいつは空中で核弾頭を爆発させ、周囲の電子機器を駄目にしてしまう攻撃の事だ」

俺が説明した

「じゃあ、携帯も駄目なの!？」

宮本が聞いた

「携帯どころか車、パソコンも駄目になってるはずよ。発電所も駄目になってるでしょうね。EMP対策をしていれば話は別でしょうけど、そんなの政府と軍の一部だけよ。」

と高城が補足をする

「直す方法はあるのか？」

高城会長が階段を降りながら言った

「車は焼けたプラグを変えれば平気なはずよ。爆発の規模が狭くて生きている車もあるかも」

と高城が言った

「すぐに探せ」

「はっ!!」

部下の人に命令を出した

「沙耶!!」

「な!なに?」

「この状況でよく、冷静でいられた!誉めてやる」

高城会長が高城の事を誉めた

「.....あ」

高城が礼を言おうとした瞬間

「入って来たぞ !!!」

部下の一人が叫びながら言った

正面の門の方を見ると数十体の奴らが来ていた

「く、来るな!来るな!ぐあああああ!.....!」

逃げ遅れた部下の一人が奴らの餌食となった

「門を閉じよ!!死人どもを中に入れるな!!」

「し、しかし会長！閉めれば逃げ遅れた連中が入れません！！」

「中が崩壊すれば同じ事だ！やれ！！」

高城会長の命令で門が閉じられいく

ガーン！

「一人、入ったぞ　　！！」

閉めた瞬間に一匹の奴らが入った。

俺はバレットライフルを改造した対戦車ライフルを構えていた。だが
が・・・・・・・・

「ポケットの中には・・・・・・・・」

ダン！

バタッ

「・・・・・・・・がひ・と・つ」

悪人顔で笑いながら親指を上げた

「会長！奥様！得物をお持ちいたしました！」

部下の人が壮一郎さんと百合子さんの武器を持ってきた

すると・・・・・・・・

ビリッ！！

百合子さんがスカーフを投げ、ドレスの裾を破いた。

その光景に俺以外の皆が見とれた

「また、ロンリ ウルフの姿を拝見できるとはな。劣ってないでしようね？」

俺が茶化すように言う

「大丈夫よ。いくら結婚したとはいえ、腕は落ちてないわよ。マッドマックス」

百合子さんが笑顔で言った

「あれま、当時のコードネームで、呼ばれるとはな。こりゃあ、一本取られたぜ」

俺は両手を上げながら言った

「お使いなさい。沙耶ちゃん」

そう言つて銃を渡した

「ル、ルガーP08のオランダ軍植民地モデル ！！しかも、銃床にドラムマガジンまで ！！」

コータが叫びながら言った

「こんなの扱えないわよ!!」

高城が反論した

「そこは、平野君に教えてもらえばいいんじゃない?」

「はい!お任せ下さい!いや待てよ、こう言う時は……えっと・
……イエス!マム!」

と左手を上げながら言った

ガシャ ン!!

「む!?!」

全員、正面の門を見ると、さっきまで銃数体しかいなかった奴らが、
その倍に膨れ上がっていて門に迫っていた

そして……

ガシャガシャ ンン!!!!!!

門が耐えきれなくなり倒れてしまった。近くに居た部下の人達が餌
食になってしまった

「おっしやああ!!!!来れるもんなら来てみやがれ!!!!」

俺は叫びながら銃を撃った

ドコーン！！

それを合図にそれぞれが武器を使って掃討し始めた。最初は持ちこたえていたが、奴らの数は逆に膨れ上がって行くばかりだ

「これじゃあ、持ちこたえられない！！」

宮本が叫ぶ

「ああ！そうだな！」

小室が答える

「弾も持ちません！！」

コータが言う

「皆！一旦引くんだ！高城会長のいる所まで！！」

俺が言った。その瞬間皆は速やかに移動した

くホール付近く

高城会長のいる所まで行くと避難民と共に留まっていたようだ

「会長、隣家の方はまだやられていません。門の補強も可能です！」

部下の一人が言った

「うむ……これより敵中を突破し隣家に向かう!! 生き残りたいのであればついて来い!」

そう言つて男は武器を持ち、女、子供はその後ろに着いた

「親を探すのではないのか? 小室君」

「!」

「自分のやりたいようにやるがいい」

「……はい!」

小室が決意したように言う

「平野君」

「!」

「娘を……頼む!」

きつと、託したんだろう。コータに

「パパ!! それってどういう……」

パン!

百合子さんが高城をはたいた

「・・・・・・・・ママ?」

「私と壮一郎さんにはやらなければならない事があるの、小室君達に預けるのが私達のせめてもの我儘、お願いだから、これ以上苦しめないで」

百合子さんは泣きながら言った

「ママ・・・・・・・・」

「さあ、・・・・・・・・お行きなさい!!!!」

百合子さんは泣くのを我慢して言った

「ママ・・・・・・・・パパ・・・・・・・・大好き!!」

そう言って俺達の元に来た

そして、俺達は車庫に来た

「マッドさん!!いない?」

高城が松戸さん呼んだのだが、姿が見えない。すると・・・・

「お譲様」

「きゃあ!?!どこから現れるのよ!?!」

松戸さんはハンヴィーのしたから姿を現し、高城のスカートを覗く形になっていた

「……羨ましいな。こんな状況下でなけりゃあ

「ラッキーですよ。お譲様、後ろのトラック以外動きますよ」

松戸さんは笑いながら言った。

そう言えば、全部の車にしてなかったんだっけなEMP対策

「それじゃあ、動くんですか？」

静香先生が言った。

「多少の傷はあるので少しばかり調整が要ります」

「なら、ここを死守するしかないね」

毒島先輩が言った。

振り向くと奴らが大量に現れていた

「よし、班を作ろう。俺、小室、毒島先輩、コータ、宮本は攻撃班に残りは荷物などを積み替えておいてくれ、全部トラックの方にあるから、それでいいか？小室」

「ああ、行くぞー!!」

そう言ってそれぞれの役割に動いた

「おらあああ!!!死にたい奴は掛かって来い!!!」

そう言ってバビロンからM2キャリバー（三脚バージョン）を取り出した

$$\dots T_k T_k T_k T_k T_k$$

ア
ア
ア
ア
ア

そうしてるとコータが近づいて来た

「これじゃあ、アラモだよ!!」

「そんな才ちはいらなないな!!」

そうしている内にハンヴィーの方が治ったらしく静香先生が大声で俺達を呼んだ

だが、この大人数ではこの車両数では足りない。おまけに荷物量が半端ないだろう仮に入っても横転する可能性が高いからだ。それでは本末転倒だ。

ここは……あの手で行くしかないか

「小室」

「なんだ？」

「この車両数ではとても人は収まらない。だから、俺はここに残るよ」

「何言つてんだ!？」

「分かるだろう?この人数に二車両では収まらない事をトラックも生きていれば話は別だったが、今じゃあ動かない。だったら誰が残らないといけないだろう。それなら俺だ」

「なら、俺だっ……」

バキヤ!

そこで小室を殴った

「何言つてんだ!!お前は親を探すんだろう!?!だったら残る必要はない!!」

俺は叫びながら言った

「ひ、英樹」

「大丈夫だ。必ず追いつくそれまでにはちゃんと親を探しとけよ?」

笑いながら言った。

「………分かった。必ず追いつけよ?もし、死んだりしたら許さないからな」

小室は決意したように言う

「俺を誰だと思ってんだ?武器ならたんまりとあるから安心しな。さあ行け!!」

そう言つて小室はハンヴィーの方に向かった

「英樹」

「なんだ？美鈴、敏美」

「私達も」

「ここに」

「残る」

二人は残りたいみたいだ

「いいのか？正直、二人を守りきれ自信はない」

「大丈夫」

「私達は」

「二人で」

「一つなんだから」

なるほど、二人一緒だから大丈夫って事か

「よし、分かった。だが、危ない時は言ってくれよ？二人とも生きてくれなくっちゃあ困るんだからなおもに俺が」

俺が笑った

「クスツ」

二人も笑ってくれた

「よし、それじゃあ静香先生、思いっきり飛ばして行っちゃってください」

俺が指示を出した

「必ず、会えるわよね？英樹君」

「もちろんですとも」

「分かったわ………それ！」

ブオオオオオオ！！！！！！

ハンヴィーとディンゴはすごいスピードで走り去って行った

「さてと、松戸さん武器はありますか？」

「俺はこれがある」

そう言ってレンチを見せた

「それじゃあ、心もとないですね。それじゃあこれを渡しませう」
そう言ってバビロンからAK47（ドラムマガジン仕様）を渡した

「銃の扱いは大丈夫ですよ。」

「ああ、少しはいじっていたからな。大丈夫だとは思っ

「まあ、無理はしないでください。俺らが何とかして見せますから」

「ああ、分かってるよ」

「二人とも準備は良いか？」

「もちろん！！」

美鈴と敏美は戦闘準備OKと言ったところか

「よし、地獄のパーティーの始まりだ！！」

そう言って俺らは奴らの掃討を開始した

電磁波攻撃ってすごいね（後書き）

まさかの急展開になりました。果たしてどうなるか？

あの人って鬼神だ！（前書き）

誰のことだろうね

あの人って鬼神だ！

小室たちが脱出した後、俺、松戸さん、美鈴、敏美は車庫から中庭まで移動することにした。そこでは、未だに高城会長と百合子さんが闘っていた。

が、娘が無事に脱出したのを確認すると覚悟を決めたように言った

「もはや……後顧の憂いなし!!」

だが、そうは問屋が卸さないぜ!!

「死ねやこら——!!!!」

百合子 side

私は小室君たちが脱出できるように荘一郎さんと表で派手に死人どもに再び死を与えていた。そして、沙耶ちゃんは無事に脱出した。

未来ある若者と一緒に……

私たちの役目はここで終わりだと思っていた。ここで、荘一郎さんと一緒に死を迎えられれば良いと思っていた

「荘一郎さん、沙耶は無事脱出できましたね」

「うむ。未来ある若者と一緒にな」

「これで、もう後悔することはないですね」

「そうだな」

私たちの周りには死人だけでもはや味方はいないと思っていた

だが……

「死ねやこら——！！！！」

ドオン！ドオン！ドオン！

私たちの周りで爆発が起きた

そこにいたのは……

百合子サイドアウト

俺は二人の周りにいた奴らを四連装ロケランで吹っ飛ばした。二人は何が起きたのかわからないみたいだな。

「大丈夫ですか？お二人とも」

「あ、あなたは英樹君！どうして！？」

俺がいたことに驚いた様子の百合子さん

「いや、車に乗れなかったんすよ。トラックだけEMP攻撃受けたみたいでそれで、他の皆には先に行ってもらいました。こっちの生き残りはお二人だけですか？」

「え、ええもう周りには死人だらけで部下の人も避難民も皆なっちやったわ」

「うむ、もう私と百合子だけかと思っていたが、松戸も生きていたようだな。」

「ええ、英樹の旦那のおかげで会長もお変わりなく」

松戸さんは嬉しそうに言った

「うむ」

「「ねえ、英樹」」

「ん？どうした、二人とも」

「話してるのは」

「いいんだけど、」

「周り」

「また、ふえて」

「来たよ？」

美鈴と敏美に言われて周りを見るとまた、奴らが湧いて出て来た。いったいどこに隠れていたんだ？

「もうっただけ増えるんだよ。仕方ないな。出でよギルガメッシュ」

ユ
」

後ろに魔方阵を出したところ、会長、百合子さん、松戸さんは驚いたようだ。だが、気にしてる場合じゃない

出したのは最古の英雄王ともいえるある男だ

「どうした？英樹よ。また我^{おれ}の力が必要になったのか？」

「ああ、周りの雑種をやっつけてくれるか？あんたの力で」

そういつてギルガメツシュに目で状況説明した。

「なるほど、こんな雑種どもに手こずっていたのか？」

「まあ、数にはさすがに勝てないからな。しかも俺のゲートは飛ばせないからな。あんただけが頼りだ」

「はっはっはっはっは！！そうかそうか我の力が必要か。よし、一瞬で蹴散らせてくれよう」

そういつてギルガメツシュは一步、前に出た

「貴様ら雑種はとくと我の前から消え去るがいい！！」

そして、右手を上げた

すると、空間が赤く染まり中からいろんな武器が出て来た。

次の瞬間

「ゲート・オブ・バビロン」

シュシュシュシュシュシュ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

一斉に武器が飛び出し

ザザザザザザザザ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

アアアアアア

多くの奴等がその餌食となった

「すごいな、やっぱ、鬼神だな」

俺はギルガメッシュを誉めた

「なに、私の力はこんなものよ」

「じゃあ、ゆつくり休んでくれや。用があつたらまた呼ぶから」

「そうか。」

そういつてギルガメッシュは魔方陣から戻って行った

「よし、もう大丈夫ですよ。」

そう言つて三人のほうを見た

「ひ、英樹君、今のは？」

百合子さんが質問してきた

「ああ、今は俺の特殊能力ですよ。俺はあれ以外にも呼び出せるんですよ。それより、さっさとこっから脱出しましょう」

「しかし、英樹の旦那、どこに行くんだい？」

松戸さんが聞いてきた

「決まってますよ。皆のところですよ」

「沙耶達の所、というわけか？」

会長が聞いてきた

「ええ、でもその前に足となるものが必要なので一旦、家に寄らせていただきます」

「そうか、分かった。では、行くとするか百合子、松戸」

「ええ、莊一郎さん」

「もちろんですとも」

会長が二人に呼びかけ

「行こっか？美鈴」

「うん！行こ！敏美」

二人も確認しあい

「よし、再び再開することを祈って出発だ!!」

「」「」「応!」「」「」

俺の呼びかけに全員が反応してくれた

そうして、高城邸から脱出した俺たち

小室たちはどこにいるんだろうな

再び、俺の家へ

高城邸を脱出した俺達は一路、俺の家へと向かっていた。

「そういえば、英樹君」

「なんすか？」

「二人は彼女かね？」

そう言つて美鈴と敏美を見た

「あ・・あの！」

「私たち・・・」

二人は恥ずかしそうに顔を赤くしていた

「ええ、そうですよ。というよりも二人を愛していますから」

「「ひ、英樹!!」」

二人は顔を真っ赤っかにして詰め寄った

「はっはっはっは!!!!!!仲が良いな三人とも」

高城会長は盛大に笑った

「「高城会長も笑わないでください!!!」」

「いやあすまんすまん、だが、恥ずかしがることはない二人で彼のことを支えてやってくれ」

「はい！」

二人は決意したように言った

「おい、そろそろ着くぞ」

そして、数分後何事もなくなるとどり着けた

「さあ、上がってくれ」

そう言つて皆、家に上がった

「相変わらず広い家ね」

百合子さんが言った

「高城邸に比べれば小さいほうですよ」

「ふふっそうね」

そう言つて百合子さんも上がった

「よし、それじゃあいつちよ集めてきますか。俺と美鈴、敏美は武器と弾薬を会長達は食料を集めてください」

「合い分かった」

「じゃあ、二人とも行こう」

「うん」

そう言って俺達は地下に行った

武器庫

俺達は最初に武器庫に向かった。ほとんどの武器は小室たちにやっ
たがまだ、若干まだ残っている。

「英樹、どれを持っていくの？」

美鈴が聞いてきた

「うん、そうだなこの先、何があるか分らないしな。とりあえず
いろんな物をかき集めてくれ。敏美にも同じように言ってくれ」

「分かったわ」

「さて、俺も集めてきますか」

そう言って手短にある物から探りを入れて行った

「やっぱ、遠距離からの攻撃は必要だな」

今の武装じゃあ近距離と中距離しかないしな持っていて越したこと
はないだろう。そう思ってM700スナイパーライフルをバビロン
に入れた。

この銃は世界中の警察で採用されている銃だ。ボルトアクションだ
が高い攻撃能力を持っている

「次は・・・・・・・・」

M16A4：ベトナム戦争時アメリカ軍が最も使っていた銃で当時
では高い評価を受けている

と他にもないか探っていると・・・・

「英樹」

「ん？敏美かどうした？」

「こんなものあったんだけど、これも持って行く？」

そう言って指さした方向には大型のライフル銃にも見えた。しかし
よく見てみると・・・・・・・・

「なんで、こんな物まであるんだ？」

はつきりと見るとそれは、メタ○ギアで出てきたレールガンだった。
ミカエルようこれまで入れてどうするんだ？第一、誰が使うんだ？
ス○ークじゃあ、あるまいし

「まあ、一応持って行こう」

そう言ってバビロンに放り込んだ。

「敏美、そっちは何か見つけたか？」

「うん、いろいろあったよ。」

「そうか、じゃあ一か所に集めておいてくれ。俺は車両を選んで来るから」

「分かったわ」

そう言つて車庫の方に向かった

「車庫」

俺は車庫に来ていた

「さうで、どれにしようかな」

戦車は無理だろ。車幅に無理があるからな、やっぱ、兵員輸送車が妥当つてとこか………。だったらあれが良いかな？

S i s u X A - 1 8 5

この車両は原型の車両から改良を加え、強力なエンジンを搭載している。そのおかげで乗員数が18人まで乗る事が出来る。さらに、俺独自の改造で車体上部に110mの低姿勢砲台が取り付けられてある

このおかげで火器支援と兵員輸送が同時に行えるように設計したのだ

「とりあえず、調整をしてつとそれから砲弾も選んどくか」

何が良いかな。通常の砲弾でもいいけど、それじゃ面白くないしな。よし！あれを入れとくか！！

何を入れるかって？それは使ってからのお楽しみだよ。

「とりあえず、こんなものかな？」

美鈴と敏美は大丈夫かね？様子を見てくるか

そう思つて武器庫に向かった

武器庫

「どうだ？二人とも」

「「あつ英樹」」

二人の後ろにはどっさりと武器・弾薬が山のように積まれていた

「おいおい、どんだけ集めたんだよ……」

俺は絶句した

「だつて」

「この先」

「なにが」

「あるか」

「分からないんでしょう？」

「まあ、そりゃそうだが……これはな」

ハンドガンからライフルまでそれこそ商売ができるほどだ

はたまた、どこから持ち出してきたのか対戦車ライフルまで置いてあった

「これは……対戦車ライフルだぞ？二人とも分かって持ってきたのか？」

二人に聞いてみた

「……」

二人は「何それ？」と言った表情で見つめていた

「二人とも分かってなかったのかよ。これは、対戦車ライフルと言つて本来なら戦車相手に使う代物だ。それを奴ら相手に使うとはな感服した」

「それは誉めてるの？」

「一応、そのつもりだ。さっ上にあがるぞ。あっちも準備は終わってるはずだからな」

そう言つて三人で上に上った

（居間）

俺達が居間に着くと会長達はお茶を飲んでまったりとしていた

「あら、お帰り英樹君、お茶、入れたわよ？」

「すみませんね。じゃあお言葉に甘えて」

そう言っただ俺達も休憩に入った

「「おいしー！ー！」」

美鈴と敏美は百合子さんの入れたお茶に感動していた

「百合子さん」

「入れるの」

「うまいですね」

「そんなことないわよ。あなた達もうまく入れられるわよ」

どうやら女子団は話が会っているようだ

「高城会長」

「なんだね？」

「今日はここに止まって、明日出発する事にしませんか？さすがに夜じゃあ危険だと思うので」

「うむ、そうだな。それが賢明だろう。見張りはどうする?」

「そこは大丈夫です。家の門ブルドーザーでも持ってこない限り破られませんか」

「そう家の門は特注品で戦車やブルでもない限り破られる事はない。どんなに集まっても破られることはない」

「もし、入られた場合は?」

「大丈夫です。ちゃんと、罾も張っておきましたからこの家から出ない限り誤作動は起きませんよ」

「なるほど、用意周到と言うことが」

「ええ、そういうえば食糧の方はどうでした?」

「安心したまえ、一カ月は持つ量が手に入った。そう言う君の方はどうなのかね?」

「ご安心をちゃんと武器、弾薬、車両は手に入りましたから、後は積み込むだけです」

「そうかそれでは夕食にするか」

「ええ」

「そう言って夕食の準備を始めた俺達であった」

皆に武器を渡そう！そして、出発だ

一日、俺の家で過した後、全員で朝食を取った後積み込む作業を行うことにした。

「英樹君、車、どこにあるのだ？」

莊一郎さんが聞いてきた

「まあ、待ってください。今だしますから」

そう言ってスイッチを押した。

なぜ押せるかというと、家にある電化製品はすべてEMP対策をしてあるのだ！

ウイイイイン

と庭の下からエレベーターが昇ってきてS i s u X A - 1 8 5 が出てきた

すると松戸さんが……

「これって、確か輸送車両じゃなかったけ？なんで砲塔が？」

「これは、買った後で自分が改造を施したものですよ」

俺が説明した

「へえ、そうなんだ」

松戸さんは納得したように言った

「弾薬類は積み込みましたので後は食糧だけですよ」

「え？武器は？」

百合子さんが聞いてきた

「それは、こっちにありますよ」

そう言つて後ろにバビロンを出した

「「「！！！」」」

莊一郎さん、百合子さん、松戸さんが驚いた

「それも、英樹君の能力なのか？」

莊一郎さんが聞いてきた

「ええ、武器はほぼすべてありますよ。それより、さつさと食料を積み込んでいきましょう」

「う、うむ。そうだな百合子、松戸やるぞ」

「ええ」

「もちろんでさあ」

「よし、二人とも手伝ってくれ」

俺は美鈴と敏美に言った

「「分かったわ」」

そう言って全員で食料を車両に積み込んだ

「よし、これで全部だな」

「「そうだね。英樹」」

二人が答えてくれた

「さて、出発する前にみんなに武器を渡すでしょう」

俺は普段の顔から武器商人としての顔になった

「確かに、現状では今の武装じゃあ心もとないわね」

百合子さんもロンリーウルフとしての顔になった

「それでだ。武器を皆に配りたいと思う。まず、荘一郎さんから何か所望するものはありますか？」

「うむ、では刀をくれないか？」

「日本刀がいいですか？」

「うむ」

そうか。日本刀だったらあれがいいかな？

「だったらこれを使ってください」

そう言っ出て出したのは顕明連だ。けんみょうれんこれは、鈴鹿山に天下った天女、立烏帽子の所持する三振の剣の一つでこの頃の有名な人だと坂上田村麻呂である

「これは、顕明連！！こんなものをどうして！？」

莊一郎さんは驚いた

「言ったじゃないすか、いろんな物があるってそれを入手するにも大変でしたよーまあ、自分は剣のほうは他にもありますんで良かったら使ってください」

俺はそう言った

「うむ、ありがたく使わせてもらおう」

「それと、保険としてデザートイーグルも持っていて下さい」

「分かった」

「それから、松戸さんが……そのアサルトライフルとベネリM4を持っでいて下さい」

「ありがとう。英樹の旦那」

「弾薬類は大丈夫ですか？」

「ああ、まだ、ポケットの中にいくつかあるが、弾はどれを使えばいいんだい？」

と聞いてきた

「じゃあ、ちょっと来て下さい」

そう言つて装甲車の後ろに來させた

「弾はこの7・62mm×39弾を使つて下さい」

「分かった。ありがとう」

そう言つて離れた

「それで百合子さんが……FN P90とハンドガンはそのルガーでいいですか？」

「ええ、使い慣れたものが一番いいわ」

「そうですか。じゃあP90だけですね」

「ありがとう」

「英樹」

「私たちは？」

美鈴と敏美が聞いてきた

「そうだな・・・美鈴はモスバークM500と9mm機関けん銃だ。これなら扱いやすいだろう？」

「そうね。ありがとう英樹」

「それで、敏美が・・・重藤の弓とMP40をやろう。」

「ありがとう・・・でも銃はあんまし撃たないしな」

「大丈夫だ。こいつはサブマシンガンの部類に入るものでな敏美でも扱いやすいように改造したから」

「本当？なら、安心かな。ありがとう。英樹」

チュッ

「おろ？」

「あゝ敏美ずるい！私も！」

チュッ

「おろろ？」

なんとまあ二人からお礼のチュウをもらいましたよ。うれしいなでも、皆の前だと恥ずかしいな

「はっはっはっは！！仲がいいことだ」

と莊一郎さんは笑っていた

「莊一郎さん笑うなんてひどいですよ」

俺は抗議を入れた

「いやはや、すまんすまんお前たちを見てると何とも和む感じだな。なあ、百合子」

「ええ、本当ですわ」

「百合子さんまで」

「フフフフ」

百合子さんまで笑っていた

「まあいいや、それよりおれも武器を変えようかな？」

そう言つてバビロンからM240を出した。こいつはM60と重さは変わらないが様々な所が改良されている。それから、M14ライフルで下に火炎放射を付けた物を出した

これで、ドンナことでも大丈夫だろう

「よし、皆もう、出発していいか？」

「私は大丈夫だ」

「私もよ」

「俺も大丈夫ですぜ」

「「私たちも大丈夫だよ。英樹」」

全員が答えた

「よし、みんな、装甲車に乗ってくれ」

俺はそう言って運転席に乗った

その後、皆も後ろに乗った

「皆乗ったか？それじゃあ、出発！！」

そう言ってアクセルを踏んだ

ブオオオオオオ！！！！！！

無事にシスターは出発した。（シスターは俺が付けた名前である。）

事前に門は開けるように設定して置いた。

出て右に曲がると案の定奴らが迫っていた

「おらおら！！どかねえと踏みつぶすぞ！！！」

そう言ってアクセルを全開にした

ブオオオオ！！！グチャ！ドカツ！グチャ！ドカツ！

奴らは踏みつぶされたり跳ね飛ばされていった。

「英樹君！」

荘一郎さんが声をかけてきた

「なんすか！？」

「まずは、警察署に向かってほしい。そこに宮本君の親がいるはずだ」

「分かりました！」

そう言って警察署に向かった。

予想もしない事態

俺達は俺の家を出た後、そのまま警察署に続く大通りに出た。

大通りはたくさん死体や車の残骸があった。死体は喉や頭がやられており虫の息の状態だった。

「ひでえな」

俺は運転席で一人愚痴った。

そして、車は燃えたのか鉄の骨組みの状態だけが残っていた。たぶんイカれた野郎が点けたんだと思うが、まあそんなことはどうでもいい

そんなこんなで大通りを走っていると

パーン！

遠くで銃声が聞こえた。

「ん？壮一郎さん聞こえましたか？」

「ああ、銃声が聞こえたな。警察か？」

「いえ、銃声でわかりましたが、警察が使ってる銃じゃありません。多分、ヤクザが使っているグロックだと思います。」

「ほう、銃声だけで分るか」

「はい、さすがに型までは分かりませんがでも、この先ってヤクザが使っている施設はありませんよね？」

「うむ。私も裏で関わりはあるがこの近くにはないことは把握している。ほとんどが郊外にあるはずだ。」

「だとしたら、どこからかやってきたヤクザってことですか？」

「うむ、そうだろうな。警察がいないこと良いことに暴れているんだろうな」

こんな世界になっても暴れているのか。いや、こんな世界だからこそか

俺はそう思いながら車を進めていた

その時だった

バーン！カーン

「ん？」「」

二人して声をあげてしまった。

「まさか……」

ダン！ダン！ダダダ！……ダダダダダ！……！！

カン！カン！カン！カン！カン！

突然、自分達の装甲車に向かって銃弾が飛んできた。

「おいおい、こいつは徹甲弾でも使わない限り、貫通はしないぜ。はっはっはっはっは！！！！」

俺はそう言いながら銃弾の嵐の中を進んでいった

バシユウウウウ

「！おい！英樹君、ロケットランチャーだ！」

指さした方向には廃墟のビルがあり、その真ん中の部屋からロケット弾が飛んできた

「クソッ！」

俺はハンドルを思いっきり切った

その瞬間、横をロケット弾が通り過ぎ後ろで爆発した

「てめえら、俺に攻撃してくるとはいいい度胸してんじゃあねえか」

そう言いながら、砲塔をそのビルに向けた。

ウイイイイン、ガチャン！

「発射あああ！！！！！」

ドーーーーン！！！！！！

ドカーーン!!!!

見事、そのビルに命中してつかい爆発を起こした。中から燃えた人間が窓から飛び出している

「よっしゃああ!!命中!!!!」

俺は思いっきりガッツポーズした

だが、依然として銃撃は収まらなかった

「とりあえず、ここを抜けますね」

「うむ、そうだな」

そう言いながら、車を進めて行った

そして……

「ふうゝ何とか切り抜けましたね」

「ああ、そうだな」

俺達が大通りを抜けた後、銃弾は来なくなっていた。

そして、休憩のために近くの公園に停車していた。ここなら、どこから来たってすぐに分かるだろう？

因みに皆も出ている

「それにしても、すごい銃撃でしたね。」

俺がそう言った

「うむ、あれだけの数がいるんだ。組長は統率の取れた奴だろう。しかし……………」

「どうしたんすか？」

「いや、EMP攻撃されて車はほとんど動かないはずだ。あれだけの人数だ、足も必要になつてくるだろう。だったら私達を殺して車を奪った方が賢明じゃなかったか？それに、武器の出所も気になる。ロケットランチャーなんてこの国じゃあ普通、手に入らないはずだ」

「……………確かに」

車を奪うなら中に居る俺達だけ殺して、この装甲車を奪う事ができたはずだ。なのに、相手はロケランまで撃つてきて殺そうとしていた。引かかるな

「何か、裏がありそうですね」

「うむ、しかし、ここで考えていてもしょうがない事だ。先に警察署に向かって宮本君の父親を探すことにしよう」

壮一郎さんはそう言った。

「ねえ」

「英樹」

「ん？どうした二人とも」

美鈴と敏美が聞いて来た

「さっきの」

「攻撃は」

「結局」

「何が目的なの？」

「いや、俺にも分からん。ただ一つ言える事は」

「「言える事は？」」

「確実に殺しにかかっている事だ。この世の中、そう簡単に車は手に入らない。だったら奪っているはずだ。しかも、あれだけの人数だからな必要になってくる。まあそれは、おいおい考えることにしよう。とりあえず、先に宮本の親父さんを探すことにしよう」

「「そうね」」

二人とも納得はしてくれたようだ

「とりあえず、点検しなきゃな。松戸さん手伝ってくださいますか？」

俺は松戸さんに声を掛けた

「応！任せとけて」

「では、百合子我々は周囲の警戒に当たるか」

「ええ、そうね。美鈴ちゃんと敏美ちゃんも手伝ってくれる？」

「「はい！」」

残りの四人は警戒に当たってくれろみたいだ

そして、俺達はそれぞれの役割を果たして行くのだった……

警察署

俺達は、公園で一休みした後、再び出発を開始した。

しばらくして、警察署に辿りついた。

「警察署前」

「でかいな」

俺は警察署を見て言った。見た目はバ〇オ2に出てくる警察署にそっくりだった。だが、門はグンニヤリと曲げられ、奴らと警官の死体が入り乱れていた。

「これは・・・乱戦でもあったのか？」

壮一郎さんが言った

「そうでしょうね。でもまだ気配を感じます」

「英樹」

「それは」

「中から？」

二人が聞いて来た

「ああ、まだ生存者がいるかもしれない。だったら探すしかないだ

ろっ」

そう言つて全員で中に入ることにした

もちろん、シスターは取られないように防衛装置を作動させた

（警察署内部）

「うっんこれは結構、広いですな」

中を見渡しながら松戸さんが言つた

「そうだな。これは手分けして探すしかないようだな」

壮一郎さんが言つた

「そうね。それが良いかもしれないわね」

百合子さんも賛成した

「よし、それじゃあ手分けして探すことにしよう。壮一郎さんと百合子さんと松戸さんは一階と地下をお願いします。」

「合い分かつた」

「俺と美鈴と敏美は二階、三階を搜索するぞ」

「「分かつたわ」」

「それじゃあ、一時間後にここに集合でいいですか？」

「うむ」

そう言つて一旦、俺達は解散した

く二階く

俺達は二階から搜索する事にした。

「ねえ、」

「英樹」

「なんだ？」

「宮本さんの」

「お父さんって」

「どういう人？」

「うーん、簡単に言えば義理堅くて正義の人みたな者だよ」

「ふーん」

二人は納得したように言つた

俺は武器商人として働いている時、偶々あの人と出会つた。あの人がどっかのヤクザと銃撃戦になつた時、俺は取引を終えて帰る所でその銃撃戦に巻き込まれてあの人と一緒にその現場から脱出したん

だっ たな

それから、妙に仲良くしてくれたんだよな

「そういえば、二人はなんで宮本が留年したか知ってるか？」

「「ううん」「

「実はな、裏で紫藤が操っ ていてな。それで、落とされたんだ」

「「ええ！！そうなの！？」「

「ああ、さらにその後ろにはな紫藤の親父が汚職をしていたんだが、それに着きとめる事が出来たのが宮本の親父さんと言わけだ」

「「へえーそうなんだ」「

「そのせいで、宮本は留年させられ、宮本の親父さんも危ない所まで行っ てたんだ。まあ、こんな世界になっ ちゃあ関係ないがな。」

「酷いね」

「紫藤は」

二人は紫藤親子を許せないようだ

そんなこんなで二階を搜索したが見つからなかったため三階に移動する事にした

く三階く

「さうてどこに居るのかな？」

俺達は一つ一つの部屋を搜索して行つた。だが、一向に見つからなかつた。

そして、最後の部屋に来た時、事態は急変した

「ここで最後の部屋だな」

「うん」

二人が答えてくれた

ガタガタ

「あれ？」

「英樹」

「どうしたの？」

「いや、なんか開かなくなつてさ」

そして、もう一度開けようとした時

「誰か、いるのか！！」

部屋の中から声がした。この声は……

「元塀さん！」

「その声は……英樹君か!!」

「ええ、そんな事よりここ、開けてもらえませんか？」

「すまない。私は今、拘束されていて開ける事が出来ない。」

なに？どういうことだ？拘束されているなんて仕方ない

「分かりました。移動はできますか？」

「ああ、どうするつもりだ？」

「雇ごと、ふっ飛ばします！」

そう言っ**て**バビロンから有る物を取り出した

「英樹！」

「それ**っ**て!!」

二人も気づいたようだ

「危ねえから下が**っ**てな。ゴ**ッ**トヴエイド**ー**!!」

カチッ

ドカーン!!……!!

俺は、ロケランを至近距離でぶっ放した。おかげで髪がドリフみたいな髪形になってしまったが……

「ケホツケホツ、一体何が？」

「大丈夫ですか？元塀さん」

俺は元塀さんに近づいた。この人は宮本元塀、宮本の親父さんだ。今は警部補としてこの警察署に勤務している

「あ、ああ大丈夫だが、英樹君こそ大丈夫かね？」

「ええ、この通り、でもなんで縛られてんですか？」

俺はこの状況を見て言った

「いやなに、一騒動あつてな。それより、解いてくれないか？」

「ええ、分かりました」

そう言つて拘束を外した

パラッ

「ふう、またも借りが出来てしまったな」

「気にしないでください。それより何があつたんです？」

「実は、奴の息子がヤクザを連れてこの警察署を急襲して来たんだ。」

「

「なんですって!？」

奴って……まさか

「紫藤、ですか？」

「ああ、そして、保管してあった密売の武器が強奪されて行った。その後、あのゾンビみたいなのが……」

「なるほど、でも拘束されていたわけは？」

「ああ、奴は私を見つけるとヤクザに指示して拘束したんだ。そして、この部屋に」

「そうですか。それは大変でしたね。」

「それより、私の娘は!？」

「ああ、宮本さんなら、小室達と脱出しましたよ。まだ、無事です」

「そうか。良かった」

そう言つて元堀さんは安堵の表情を見せた

「それより、俺達是从ここから脱出して小室達と合流しようと思つています。一緒に来ますか？」

「ああ、もちろんだ!」

そう言って立ち上がった。さて、壮一郎さんにも知らせなきゃな

そう思っていた所……………

「「ひ・で・き」」

「なんだ？ふたりと……………」

俺は固まってしまった。まるで、蛇に睨まれた蛙のように……………

そこには般若がいた（英樹談）

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「「よろしい」」

俺は二人にO・H A・N A・S Iと言う名のリンチを受けてボコられていた

うう……………悪気はなかったんだけどな

そんなこんなでなんとか宮本の親父さんにも合流できたわけだ。

続きは、待て！次回！（サイボーグクロちゃん風）

警察署（後書き）

「こんにちは、作者です」

「英樹だ」

「いや、無事に宮本君のお父さんが見つかって良かったね」

「ああ、それにしてもまた、奴が出てくるのか？死んだかと思ってたのに」

「よく言うじゃん。しぶとい奴は生き残るって」

「まあ、確かにそうだが」

「そんなことより、朗報があるよ！..」

「なんだ？」

「ユニークポイントが約、15万にまで行ったんだよ！！本当に読んでくれてありがとうございます」

パフパフ

「ほう。それは、すごい事だな」

「でしょでしょ！？」

「まあ、こんな軍オタな作者ですがどうぞ、温かい目で見て下さい」

ペコリ

「うん。なんか引つかかるけど、まあいいか！それじゃあ次回も楽しみに！」

ヤバイ、ヤバイ、洒落にならない（前書き）

我慢できずに投稿します！

ヤバイ、ヤバイ、洒落にならない

俺達は元塀さんを助けた後、四人で警察署の入り口に来ていた。

数分後、壮一郎さんも戻ってきた

「壮一郎さん」

「おお、英樹君そっちは何か見つけたかね？」

「ええ、宮本の親父さんを見つけました」

「初めまして、宮本元塀です」

そう言うってお辞儀した

「うむ、私は高城壮一郎だ。沙耶がよく世話になったな」

「ええ、私の娘もよく仲良くさせてもらっているようで」

二人は気が合うのか合った途端に仲良くなったな

「壮一郎さん、早く移動した方がいいです」

「なに？それは・・・」

どういことだと聞こうとしたとき

ドカーーン!!!!!!!!!!

「『『『『『』！！』』』』』」

突然の爆発音とともに警察署が揺れた

「何事だ！？」

「多分、警察署を襲ったヤクザでしょう」

元塀さんが冷静に言った

「皆、一旦隠れるんだ！」

俺はそう言った。

そして、それぞれが隠れた瞬間……

ダダダダダ！！！！

ドン！ドン！ドン！

カン！カン！カン！カン！

入口から、弾の嵐が来た

幸い、こっちには怪我人がいなかった

「やっぱり、さっきの奴らか……畜生め」

「英樹……」

「どうするの？」

二人は怯えながら言ってきた

「大丈夫だ。安心しろ。二人は俺が守ってやる」

俺は不安を煽らないようにニツコリと笑った

しばらくして、外から

「さっさと出て来い！俺が直々に殺してやるから！」

この声は……紫藤！

紫藤は自暴自棄となり、なんとヤクザを自分の駒として使っていた
！！

「紫藤！てめえか！」

俺は叫びながら言った

「おや？聞きなれた声が聞こえたと思ったら英樹君じゃありませんか？」

こつからじゃあ見えないがあいつの表情はうざい位に笑ってるだろ
うな

「てめえ、何のつもりだ！？」

「もちろん、今の世界を楽しんでいるんですよ？自由気ままにね！」

ダン！

奴からは見えるのか、正確にこっちの位置に銃弾を放ってきた

おまけにこつちからだ太陽が反射して敵の位置が掴めない。どうすればいいんだ？

「私は・・・自分の欲求にしたがっているだけです。もはや、ほかの人間がどうなるかと知ったこつちゃあないですよ！あはははは
!!!!!!!!!!!!!!」

「ついに、イカレたか」

理性を失って人間本来の欲求にしたがっているということですか。
あゝあ、面倒な奴に見つかったまっただぜ

「ほら、どうしたのですか？英樹君、私を罵倒してみてくださいよ！それとも臆しましたか？」

「ばゝか、そんな安い挑発に乗るほど俺はできちゃあいねえよ。これでも、死地をぐり抜けてんでね」

「そうですか。そつちから来ないというならこつちから行かせてもらいましょうかね？やれ！」

「『『『『『『『へい！お頭！』『』『』『』『』『』」

そう言って何人ものヤクザがこつちに向かって来た

「皆！戦闘態勢に入れ！敵を圧倒させるのだ！」

「応！」

そう言っただちは、臨戦態勢に入った

「fire!!」

ダダダダダダダダダ！！！！

俺のM249が火を噴く。着弾と同時にヤクザの体に穴が開いていた

「があ！！」「ぐあ！！」「くそ！」

あちらこちらでヤクザが倒されていく。壮一郎さんところにもたどり着いたようだ。俺は美鈴、敏美、元堀さんと共に入り口付近で防戦をしていた。

だが、敵の方にも銃がある。たまに、俺の横を弾が通り過ぎていく

カチツカチツ

「くそ、弾切れか。誰か！カバーしてくれ！」

「私がやろう。」

そう言って元堀さんは自分の銃で敵を牽制していった

「元塀さん、それじゃあ心もとないです。こいつを使ってください！」

そう言つて89式小銃を渡した。

こいつは日本で唯一、国産として作られた銃だ。自衛隊からの評価は絶大だ

「ありがとうございます。」

そういつて89で応戦した

その間に俺はM249に弾をベルトリンクする。軽機関銃は弾が多いのはいいのだが、その分リロードする時間がかかってしまう

ジャラジャラ・・・ガチャン！

「よし！元塀さん！OKです！」

「よし、わかった！」

そう言つて後方に下がった

「英樹！ショットガンの弾、ある！？」

美鈴が聞いてきた

ガサゴソ・・・

「ほれ！」

美鈴に12ゲージの弾を渡した

「ありがとう！」

そう言つて弾を装填していった

そして、何とかヤクザの撃退に成功した俺達は壮一郎さんと合流した。三人とも無事みたいだ

俺達は、警察署の駐車場に出た。シスターにも襲われた形跡があったが防犯装置のおかげでなんとかなつたみたいだ。奴（紫藤）は逃げ出したようだ

「なんとかなつたな」

壮一郎さんが言った

「ええ、でも、ヤクザがあれですべてとは思わないですね。」

「うむ、奴のことだもつと大勢のヤクザを連れて来るだろう」

壮一郎さんが確信をもつて言った

その時だった

「壮一郎さん！！」

百合子さんが走ってきた。彼女には周囲の安全を確認しに行つてもらっていた

だが、すごい慌てようだなどうしたんだろう？

「どうした？百合子」

「表は奴らでいっぱいよ。今までの比じゃないです」

「なに！？」

壮一郎さんがそう言つと、みんなで確認しに行った

俺達は・・・・・・・・絶句した

警察署前を出られないように奴らが両方の道から数百、いや、数万の数がこちらに行進してきていた。それは、まさに死の行進といったところか？

「おいおい、冗談だろう？」

松戸さんが言った

「これは……どうするべきか……」

壮一郎さんが悩むように言う

「ひ……英樹」

美鈴と敏美が俺の服を掴みながら言った

「麗、きつと会えるよな？」

元塀さんは最愛の娘を思い

「沙耶ちゃん……」

百合子さんは自分の娘を思い浮かべていた

そして、俺は……

「さすがに、お手上げだな……」

俺は、今も迷走しているであろう仲間の顔を思い浮かべていた

「いや、約束したんだ。必ず会うつて小室と……その前に死んじやったら元もこうもないしな。壮一郎さん」

「……何かね？」

「一旦、警察署に戻りましょう。門はシスターを盾にしておけばいいです。何か、策を考えましょう」

俺はそう提案した

「そうだな。こうしている間にも沙耶は大変な目に会っている。百合子」

「ええ、行きましょう。沙耶ちゃんに会うために」

二人は決意した

「私も娘に心配させているからな。早く会って安心させないと」

元塀さんが言った

「俺もこんなところでしんじゃあ意味ないしな。あの時見たく沙耶お嬢様と遊べる日が来るまで」

松戸さんが言った

「美鈴、」

「うん！敏美！」

「私たちは」

「二人で」

「一緒に一緒だね！」

美鈴と敏美も決意した

「それじゃあ、俺も行くとしますかね。こんなところで死んだら小室に殴られるからな」

ニヤリと笑いながら言った

そうして、俺達は警察署に戻った。

THE・O・HANA・S Iと言つ名の玉碎

俺達は一且警察署に戻つて表の奴らをBGMにして今後の対策を練ることにした。

「それで、どうするのかね？英樹君」

壮一郎さんが聞いて来た

「どうと言われましても、あの数はさすがに相手した事ないですよ。軍の爆撃でもあれば話は別ですが……」

俺はそう言つて黙つた

「なら、君達が乗つて来た装甲車で強行突破というのは？」

元塀さんが提案を出した

「借りにできるとしても、あの数だと横転する可能性が出てきます。そうなつたら本末転倒です」

そう言つて却下した

「じゃあ、私達の武器で何体か倒しつつ突破するつてのは？」

百合子さんが言つてきた

「さっきのヤクザの戦いで弾がかなり消耗してます。正直、成功の確率は低いです」

「そう」

うーん、なんとかこの状況を打破しない限りここから出られないかな

「なら、英樹の旦那」

「何？松戸さん」

「旦那のあれは？」

「あれ？」

「ほら、高城邸で出した。人さ」

高城邸で？……ああ！

「ああ、ギルガメッシュのことですか？」

「そうそう。それ」

「なるほど、」

確かに、サーヴァントを出したら行けるかもしれないな。

「「英樹」」

「なんだ？二人とも」

「学園で出した。あの人はどうなの？」

「ああ、バーサーカーか……行けるかもしれないな」

「なら、その案で行くかね？英樹君」

壮一郎さんが聞いて来た

「ええ、作戦はこうです。まず、自分のサーヴァントを出してから
皆は車両に乗ってください。それで、車両をどけてから一気に叩き
こみます」

「なるほど、」

「あつそれとその間に皆も援護射撃をして下さい。できる範囲でい
いんでお願いします」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

全員が返事をした

「よし、表の人とO・H A・N A・S Iといきますか！」

そう言つて全員警察署の表に出た

「警察署表」

俺達は警察署の前まで出てきた

「よし皆、車両に乗り込んでくれ」

そう言つと全員車両に乗り込んだ。運転は松戸さんだ

「こつちも出しますか。最強の布陣を」

そう言つて後ろに魔法陣を出した

「出でよ。全サーヴァント」

そう言つと、FATEのサーヴァントが出てきた

「セイバー、参上しました」

「アーチャー、推参」

「ランサー到着だぜ！」

「バーサーカー、お呼びにより参上しました」

「ギルガメッシュをお呼びか？」

「キャスター、ただ今、現れました」

「ライダー、到着」

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

FATEのキャラをすべて出してやったぜ。こんなチートはないだろう

「よし、みんな到着したな。現状は最悪だ。そこで、皆の力を貸してもらいたい」

「当然です。マスター」

セイバーが答えた

「じゃあ、それぞれ、自由に動いてくれ。魔力は最大限使用を許可する」

「 應！」

全サーヴァントが答えた

「よし、松戸さん！動いてくれ」

「応！」

ブオオオオ！！！！！！

シスターが門から離れた瞬間……

[illegible]

大量の奴らが流れ込んできた

「よっしやああ！！！！O・H・A・N・A・S・Iだああああ！！！！！！！！」

そう言ってバビロンからレールガンを出した

ウィイイイン、ガチャン!!

ドン!

ドカーン!

俺はレールガンを撃ちながら奴らを殲滅を開始した

「エクス・カリバー!!!!!!」

ドオオオン!!

「アンミリテッド・ブレイド・ワークス」

シュザザザ!!!!

「秘剣・燕返し!!」

ズサ!ズサ!ズサ!

「天地乖離す開闢の星^{エヌマ・エリシュ}!!!!」

ドウウオオン!!!!!!

「

!!!!!!」

!

ブオン！！ブオン！！！！！！

「自己封印・暗黒神殿！！！！！！」

ブオオオオオオン!!!!!!

「その心臓、貫い受ける！！gay・Borg！！」

ズサ！

「食らいなさい。神官魔術式・灰の花嫁」

$\dots T''T''T''T''$

あつという間に奴らの数が減っていく、だが、奴らも負けていない。減るところか逆に増えているのか？どこから湧いてるんだ？

シスターからも壮一郎さんが援護射撃をしてくれているが……
……こいつは引き際が肝心だな

そう思いつつも俺はレールガンや四連装ロケランで近づいて来る奴らをすっ飛ばしてはいた

「そろそろ！！どどん、掛かってこいや！！！」

ブシュ！！ブシュ！！ブシュ！！

ドカーン！！

「壮一郎さん!!」

「何かね!？」

「シスターの砲台を使ってください!!!道を切り開くんです!!!」

「合い分かった!!!」

そうやって砲台を操作する。壮一郎さん

「そらああ!!!」

そう言って砲台から砲弾が発射される

ドカアアアアアアン!!!!!!!!!!

「命中！！」

「おっ！！」

今の砲撃で周りが将棋倒しで倒れて行く奴ら、

切り抜けるなら今だ！！

「全サーヴァント、戻れ！！」

そう言って全サーバントが戻ると同時にシスターの方も動き出していった

ブ
オ
オ
オ
オ
！
！
！
！
！
！
！

「英樹！！」

二人が身を乗り出して手を伸ばしていた

「フツもちろんだ！！」

そう言つて二人の手に捕まつた

パシッ！！

反動でシスターの屋根に昇つた

「よつと！」

スタッ

そして、中に入り休憩を取つた

「いや、今回は何とかまりましたな」

元堀さんが言つた

「ええ、このままどこに来ましょうか？」

「まずは、私の家に行つてもらいたい。麗なら必ずそこに行くと思うから」

「分かりました。松戸さん聞きましたね？」

「もちろん！！」

そう言って進路を宮本の家に向かった

宮本の家

俺達は、無事に警察署を脱出する事に成功した。そのまま、元堀さんの家に向かうことになった。

「さーで、このままどうなるかねー？」

俺は独り言のように言った。因みに俺はシスターの屋根の上で見張りをしながらコーンスープを飲んでいる

「うん！やっぱ、コーヒーよりコーンスープに限るな」

このまま元堀さんの家に向かうのは良いとして気になるのは野郎（紫藤）だ。あいつはまた仕掛けてくるはずだ、絶対にな。今度、あつたら必ず仕留めてやる

だとしても、ヤクザ共はどつから湧いてきてるんだ？あつちにも相当な被害が及んだはずだ。そして、その足となる乗り物はあるのか？

それが、最大の疑問だな。

「……今、こんな事を気にしてもしょうがないか。それより小室達と合流しなきゃあな一体どこに居るんだろ？あいつらはそんなこんなで考えていると……」

キキ

一軒の家の前で止まった

「元塀さん、ここですか？」

「ああ、妻も無事でいてくれたらな」

そうだった。家には元塀さんの奥さんがいるんだった。手遅れになつてないと良いがな

「それじゃあ、中を搜索しますか？」

俺が言った

「ああ、ぜひとも願ひする」

元塀さんが答えた

「じゃあ、俺と元塀さんと壮一郎さんで行きましょう。残りはここを見張っておいてくれ」

「分かつたわ」

百合子さんが答えた

「それじゃあ、行きますよ？元塀さん、壮一郎さん」

「ええ」

「ああ」

そう言つて俺達は中に入った

く宮本家、中く

俺達はまず、玄関から入ることにした

ガラガラく

「ふう、いきなりの御対面はないみたいだな」

俺が言った

「そうですね」

元塀さんが答える

「とりあえず、それぞれ分担しよう。英樹君は二階を、私と元塀さんで一階を搜索する」

「分かりました。それでは、お二人ともお気を付けて」

「ああ」「ええ」

そう言つて俺は二人と分かれ、二階に昇つた

く二階く

俺は二階に上がると、手短な部屋に入ることにした。さつきも見たが、廊下や玄関は血痕が残されていた。きっと奴らが侵入したのだろつ。

二階も例外ではなかった。所々に血痕が残されており、奴らが来た痕跡が鮮明に残されていた

「ひでえな」

俺はモーゼルを片手に進んでいった。そして、最初の部屋に入った

ギィ

「ふむ、異状なしか」

最初の部屋に入ったが部屋はきれいに整頓されていた。

「仕方ない、次の部屋に行くか」

俺はそう言っただ々と部屋を調べて行った

「ここで、最後だな」

そう言っただ最後の部屋の扉を開けた

ガチャ

「ここは？」

辺りを見回すとどうも女の子の部屋だ。

「……………もしかして

「宮本の部屋か？」

女の子らしい部屋の香りとすっきりと整頓された荷物、片隅には彼女が所属していた部活の長刀が置いてあった

「おっ？結構重いな。あれを軽々振うとはさすがだよ。宮本」

俺は長刀を持ちながら言った

「それにしても、誰もいないか……」

となる一階か？もし、見つからなかった場合はどこかに逃げたと考えていいか。そう言う風に考えた方がいいのかもしれない。人間的には……

どんなものでも希望が有るのならばそれにすがりたいと思う。それが、人間本能だから

そう思いながら俺は一階に戻った

く一階く

一階に戻ると二人は俺の事を待つてくれてたみたいだ

「英樹君、そっちはどうだったかな？」

元堀さんが聞いて来た

「搜索してみました、残念ながいませんでした」

「そうか。一階にも見当たらないという事はどこかに逃げたと考え

ていいのかな？」

「ええ、そう思ってた方が賢明だと思います」

「これから、どうするかね？」

壮一郎さんが聞いて来た

「そうですね。小室達がどの辺に居るか分かりませんが、とりあえず、ここで休憩しましょう。彼らの家が近いとしたら、まず、こつちを調べますからね」

「そうか。では、装甲車を入れて、中で休憩を取るか」

壮一郎さんはそう言って出て行った

「とりあえず、ここを仮拠点としましょう。それでいいですかね？
元塀さん」

「ああ、このご時世だいくらでも貸すよ。私は倉庫の方を見てくる。
やられてなければいいがな」

「あつ一緒にいきますよ」

「そうかい？じゃあこつちだ」

そう言つて俺達は倉庫の方に行った

（倉庫前）

「元塀さんここに何があるんですか？」

「この非常時の備えと言う物だ」

そう言つて元塀さんは倉庫の扉を開けた

ギィ〜

「おお〜」

その中に入つた物は武器・弾薬が山のように積んであつた

「これは、どうしたんです？」

「いやなに、裏でのコネクションと言う奴だ。知り合いに軍の関係者がいてね。そいつの所で貰つて来たのさ。自由に使ってくれ」

「じゃあ、後で皆に振り分けましょう。」

そう言つて倉庫を後にした

家の前に来ると、丁度、シスターが中に入つたみたいだつた

「「英樹」」

「なんだ？二人とも」

「どうするの？」

「これから」

「多分、小室達は家の近い順に回る。だとしたら、ここがそうだ」

「へ」

「だから、数日は留まるからな。二人ともそのつもりでな」

「分かったわ」

そう言つて二人は家の方に向かつた

「さて……いつ頃来るかな？」

俺は一人、空を見上げて言つた

仮拠点補強（前書き）

更新が遅れて申し訳ない

仮拠点補強

俺達は元堀さんの案内で宮本の家に着き、中を搜索したが、元堀さんの奥さんは見つからずにいた。そして、元堀さんの家を仮拠点とし、小室達が着くまで待つことになったのである。

俺は、倉庫で武器、弾薬のチェックをしていた。

「それにしても、こんだけの量とはさすがにビックリしたぜ。」

倉庫の中には一国の軍隊並みの武器弾薬があつた。これなら、持つて一年半はくだらないだろう。知り合いの人も気前がいいな

「え〜と、バレットライフルの弾薬は・・・つとあつたあつた。うわ〜こんだけありやあ十分じゃあねえか。しかも本体は遠赤外線スコープか。すごいな〜」

そういえば、俺の知り合いにもこんな奴がいたな。あいつは大丈夫だろう外国部隊に居るし世界中を飛び回ってるからな〜

そんな事を思っていると・・・

「「英樹」」

「ん？どうした、二人とも」

倉庫の入り口を見ると美鈴と敏美が来ていた

「百合子さんが」

「お茶、淹れたから」

「英樹も」

「呼んできてって」

「OK、今行くよ」

そう言っただけは縁側に向かった

「縁側」

俺達に着くと壮一郎さん、元堀さん、百合子さん、松戸さんの四人が集まっていた

「壮一郎さん」

「おう、英樹君座りたまえ。百合子」

「はい、壮一郎さん。どうぞ、英樹君」

「ありがとうございます。ズズンンおいしい」

こんなにのんびりしたのはいつ以来かなととても、懐かしく感じるわ〜落ち着く〜

と一人、のほほんとなる英樹だった

「あっそうだ、元堀さん」

「何かね？」

「この家って屋根に昇れますか？」

「ああ、二階のベランダから昇れるけど、どうするんだい？」

「いやなに、簡単な監視塔でも作ろうと思ひましてね。倉庫で調べた時、木材がありましたから。それを使えるかなって」

「なるほど。それじゃあ後で、持って行くとしましょう」

納得したように言う元塀さん

「その時は松戸さんにも手伝ってもらいますよ？」

「任せて下さい。英樹の旦那」

意気揚々と言う松戸さん

その後は、談笑を少しして解散となった。小室達はどこに居るんだろうな？

数十分後

「松戸さん、木材の余り、ありますか？」

「ああ、そこに置いてあるよ」

今、俺と松戸さんは屋根に上がって簡易監視塔を作っていた。もち

ろん、軍隊にあるような監視塔には程遠いが、相手はノロマな奴らだこれだけで十分だろう

カン！カン！カン！

監視塔はあつという間に出来上がっていった

「よし！完成じゃあ！」

「おお、見事な出来栄ですね」

下で元堀さんが言う

「そうですか？そう言われると照れるな」

俺は照れながら言った

「それより、皆を集めてくれますか？見張りの順番を決めたいんで」

「分かった。それじゃあ縁側に集合だ」

そう言つて元堀さんは中に入つていった

「それじゃあ俺達も降りましょう。松戸さん」

「はいよ！」

そう言つて俺達は下に降りて行つた

く再び縁側く

俺達が屋根から降りると皆縁側に來ていた

「さて、始めようか。英樹君」

壮一郎さんが言った

「ええ、では、見張り順を發表します。見張りの人数は二人ひと組で行います。」

「あれ？でも英樹」

「なんだ？敏美」

「今、ここに居るのは七人だよ？一人、余るんじゃない？」

敏美が最もなことを言った

「ああ、だから、俺が一人で見張りをする。因みに、監視カメラと
かもあるからそんなに気張らなくてもいいよ」

「ふーん。そうなんだ」

納得したように言う敏美

「で、英樹君、武器の所持は？」

壮一郎さんが聞く

「それも、許可します。でも、普段は安全ロックを掛けておいて下

さい。どうしても撃たなければならぬ時に限り、発砲を許可します。」

こつという風に規則を作つとくだけで人間は規律を保てるのだ。簡単なようで実は難しいのだ

「なるほど、それで、小室君達が来たと分かった場合は？」

「一応、二つの状況を考えてみました。一つ目は彼らが普通に来た場合です。その時は素早く、彼らに入ってもらえるように周りを警戒しながら援護します。二つ目は奴らに追われている場合です。その場合、全火力を持って援護します。」

俺は二つの案を出した

「なるほど、しかし、最悪の場合は考えているのかね？」

壮一郎さんが聞く

「ええ、でも彼らなら大丈夫でしょう。俺はそう信じています。」

そう、あいつらは小室を中心に完全に統制されている。まず、遠距離攻撃・コータ・近距離攻撃・宮本、毒島先輩・医療班・静香先生・指揮統制・高城そして、その中心を統べる小室。もちろん、ジークやありすちゃんも立派な仲間だ。

この完全なチームは他にはないだろう。それゆえに信頼ができるのだ

「そうか。」

壮一郎さんも納得したようだ

「それじゃあ、最初の見張りは美鈴と敏美でお願いするよ」

「「分かったわ」」

「それじゃあ、解散」

そう言って各々散った

「さうて、監視カメラでも設置しますかね」

そう言って俺はシスターに向かった

「シスター内部」

「え」と、監視カメラは」

ガサゴソガサゴソ

「おっ、あつたあつた」

そう言って手にしたのは軍基地でもよく使われる監視カメラだ。これはネットのオークションで落としたんだっけな。

俺は数台持ち出して、それをいたるところに着けることにした。

まず、正門の付近に二台・裏路地に一台そして・・・

「後は監視塔だな」

そう言いながら屋根に向かった。

そういえば監視塔には美鈴と敏美がいるんだっけな。

「さてと、」

俺は黙々と監視カメラの設置に勤しんだ。その時だった

ひゅっつっつ

「ん？風か？」

そう思つて上を見た瞬間・・・

「な!？」

上を見ると二人の姿があつた。二人は制服姿なのでもちろん・・・

「おお、桃源郷や」

上を見ながら言つてしまった

美鈴はしまパン、敏美はブラックのパンティーだと!？

「きゃ!？英樹!？」

美鈴がこっちに気づいた

「わ、悪い、悪気はなかったんだ。許してくれ」

「ううん、別に良いよ。気にしないで、」

「それより、何してたの？」

二人が聞いて来た

「ああ、監視カメラを設置してたんだ」

「ふん」

「モニターは一階に設置したからいつでも見れるぜ。」

俺が簡単な説明をした

「そうなんだ」

「ああ、それじゃあ二人とも頑張ってくれよ。」

「ええ」

そう言っただけ俺は一階に戻った。

「ふわ〜ねむ〜一眠りするか〜」

そう言いながら俺は布団に入ることにした

全員集合！！

俺達は宮本の家を拠点にしてそこで、小室達がここに来るのを待つてみることにした。その間に、監視塔を作って小室達をいつでも迎えられるようにしておいた。

そして、今俺はその監視塔で見張りをしていた。

「フワッさすがに変化がないと暇だな」

俺は欠伸をしながら見張りをしていた。それにしても暇だ。何か面白い事でも起きないかな。ちよつと言っちゃ駄目だけど

「さて、暇だからバレットの整備でもしておこうかな？」

そう言ってバビロンからバレットライフルを出した。

因みに監視塔にはM60軽機関銃とM2キャリバーをそれぞれ配置している

カチャカチャ

「えーと、ここは結構ガタがきてんな。パーツを交換しておこう」

カチャカチャ

数分後

「よし、完成だ」

そう言つてバレットライフルを掲げた。どこが変わつたかと言うとまず、銃身を短くして軽量化を図つた。次に弾を12・7mm弾から一回り大きい14・5mm弾を使用する。

この弾は第二次世界大戦時ドイツが試作で作つたものだが配備される前に戦争が終わつてしまい使われる事がなかった。そして、闇ルードで手に入つた代物だ。

こいつを喰らえば普通の人間は体が真つ二つになることは間違いない、さらに5人までが貫通できる。

「ふふふ、こいつを使う時が来るなんてな。思つてもみなかつたぜ」

ガチャン！

そう言つて弾を充填した

「さて、外はどんな風になつてゐるかな」

そう言つてスコープを覗いた時だった。

ドオン！

「……………今は……………」

俺はもしかしてと思い、銃声のした方向に銃を向けた

「ふつ……………生きてると思つたぜ。小室」

俺はニヤリと笑いながら言った。

「後ろは………ゲツいっぱい来てるじゃないか」

小室達の後ろにはいろんな服装をした奴らが来ていた。その数は・
・・・たくさん

だって、数えきれないくらい来てるんだもん

「こりゃあプランBだな。いっちょ派手に行きますかな」

ガチャン！

バレットに弾を装填してこう言った

「THE・END!!」

ドコーーン!!!!!!

グシャアアア!!!!

弾は見事奴らに命中して後ろの奴らも巻き添えを喰らったみたいだ

小室達は何が起こったか分からないみたいだ。

「ヒュ〜やっぱ14.5mmは伊達じゃあねえな。さて、こいつを
使うか」

そう言って取り出した物は・・・・・

「発煙筒〜!!」

一人でド〇えもんのまねをやった。……………恥ずかしい

「それはともかく……………せい!」

バシユウウウウ……………ボン!!

昼間だと言うのに良く見える発煙筒だった。それもそのはず、これは英樹が改造した特製の発煙筒だ。光は地面に落ちるまでずっと光り続ける

「英樹君!! 何事だ!？」

壮一郎さんが下から言ってきた

「小室達がいたんです!! 全員無事でした。壮一郎さん、全員に戦闘準備させて下さい!!!」

「分かった!!」

そう言つて壮一郎さんは中に入つて行つた

「さうて、小室達は……………おっ気づいたようだな」

小室達はここにまつすぐ来ているのが見て取れた

「ここからは、貫通弾じゃなくて普通の弾に切り換えよう。バレットじゃあ威力が強すぎるからな」

そう言つてバビロンからH&KMSG90を取り出した。こいつは
PSG1の発展型で欧米やアジアなどで使用されている

弾は7.62mm×51だ

「よし、得物を捉えますかね」

そう言つて構えた

「まずは……………一匹目!!」

タアン!

軽く発砲音が響いた

グシャ

弾は一匹目の奴らの額に命中した

「よし、どんどん続けるぞ」

タアン!タアン!タアン!タアン!

小室達に近づく奴らをどんどん倒して行つた

「英樹君!」

壮一郎さんが聞いて来た

「なんですか!?!」

「小室君達はどこまで来ている!？」

「もう、すぐそこまで来ていますよ!! 門を開けて下さい!」

ギィ

門を開けた数分後に……

「ハア、ハア」「ハア、ハア」

全員が中に入った

ギィボタン!

アアアアアア

バンバン

奴らは扉を叩きながら群がっていた。

「一先ず、安心だな。さて、降りるとしようか」

俺はそう言って監視塔を降りて行った

小室side

僕達はショッピングモールから無事に脱出して麗の家に向かうことになった。英樹がくれた車両はどちらともオシャカになってしまい。仕方なく、歩きで向かうことになったのだが、突然奴らが、現れて、

必死に逃走してた所で何とか麗の家に辿りついた

「た、助かりました。ありがとうございます」

小室が息を上げながら言った

「なに、娘の命の恩人だからな」

「え？」

「小室君、良く無事だったな」

壮一郎さんは笑顔で言った

「パパ！ママ！」

高城が二人に抱きつく

「沙耶ちゃん、良く無事だったわね」

百合子さんが背中をさすりながら言った

「う・・・ひつく・・・でも、どうして？」

「私達が生きているということ？」

高城が頷く

「それは・・・彼のおかげよ」

そう言つて百合子さんは家の方を見た

「よつ、久しぶりだな」

「お、お前は!!」

再び、僕達は再会したのであつた

〔小室 side out〕

俺は玄関から表へ出た。そして、彼らにこう言つた

「よつ、久しぶりだな。」

左手を軽く上げながら言つた

「英樹じゃないか！良く無事だったな」

小室が嬉しそうに言つ

「ああ、ついでに仲間も増えたからな。頼もしい人達が」

そう言つて壮一郎さんの方を見た

「麗！」

「お父さん！」

どうやら、宮本も無事に再会する事が出来たみたいだ

「英樹、」

「おう、久しぶりだな。森田」

「うん。」

俺達はにっこりと笑い合った

「英樹！」

「よう、無事だったか？コート」

「うん！なんとかね。英樹達は？」

「もちろん！ピンピンさ」

そう言って両手を広げた

こうして、俺達は無事に全員集合を遂げたのであった

これから、どうするか……

無事に宮本の家で再会を果たした俺達は一旦、中に入り、今の状態を話し合った

「それで、小室達はどうかやってここまで来たんだ？」

俺が聞いた

「沙耶の家から脱出した僕達は一旦国道に出たんだ。そしたら、奴らがたくさんいて、強行突破をした。暫くしてショッピングモールに避難したんだが、すぐに駄目になってね。それで、ここまで来れたってわけさ」

「そうか。車もじゃあ」

「ああ、一緒にお陀仏になっちまった」

「まあ、こうして、お互い会えたんだからよしとするか」

「そういえば、英樹達はどうかやってここに？」

コータが聞いた

「俺達はお前らが脱出した後、館で生き残っている奴がいなかどうか確認して居てな。そこで、会長や百合子さんに会ったわけだ。その後、一旦俺の家で武器・弾薬を補給で新しい車両で警察署に行ったんだ」

「どうして、警察署に？」

森田が聞いた

「まあ、情報収集と宮本のお父さんの搜索のためだったな。そのあと、無事に探し出して見つかったんだが、ここからが重要だ。紫藤が生きてやがる」

「紫藤が！？」

宮本が驚いた

「ああ、奴はヤクザを束ねて俺達に襲ってきた。なんとか追っ払ったんだが逆に大量の奴らが現れてな。全力でやってやったよ。それでその後は宮本の家に辿りついたわけだ」

「そうなんだ」

小室が納得したように言う

「あいつは必ず仕掛けてくる。必ずだ」

「どうして、そんな事が言えるんだ？」

毒島先輩が聞いて来た

「あいつは俺を最も邪魔な存在みたいだったし正気を失っていた」
「なるほど」

先輩は納得したように言った

「それで、この後はどうするんだ？小室」

俺が聞いた

「そうだな。英樹の件もあるし、しばらくはここを拠点にしてもいいんじゃないかな。」

「だが、あまり長くはできんぞ。小室君」

会長が言った

「どういうことですか？」

「いくら、武器弾薬・食糧があるとはいえ、小室君の母親がその間に亡くなってしまう可能性だってある。そう言いたいのだ」

会長は最もな事を言った

「そうだな。壮一郎さんの言うとおり、お前の母親がいつまで持つかは分からない。そのためにも早めに出発した方がいいということだ」

「なるほどな。分かった。じゃあ、出発は二日後にしたいと思う。皆はそれで良いか？」

小室が皆に聞いた

皆は了承した

「さて、方針は決まったがその後はどうするつもりなんだ？」

俺が小室に聞いた

「そうだな。他の状況が分からないけど、街からは脱出しようと思っ
っている」

なるほど、他の場所に移動すると言っことか

「だったら、港から脱出しないか？」

俺が言った

「港から？」

「ああ、港に俺の船があるんだ。」

「船を持っているの！？英樹」

コータが言ってきた

「ああ、ある国から貸して（盗んだ）もらっている代物だ。」

俺は笑いながら言った

「英樹、貸すの部分に他の文字が入ってるような気が……」

小室が言った

「気にするな。気にしたら、負けだぞ。小室」

「は、はあ」

「じゃあ、脱出は港からでいいな？」

全員に確認を取ってその後、解散した。

俺は見張り塔に昇っていた

「はあ、世界はどうなっているのかね」

俺はバレットを抱えながら呟いていた。携帯はすでに電池切れ、放送局も全滅し、一向に情報が入ってこない。唯一入るのは軍の無線ぐらいである

アメリカは国の半分以上が奴らと化していた。中国は全滅、ロシアは何とか中枢は生きているようだ。イギリスでは暴動を鎮圧、沖縄は軍により統制されていた。横浜では自衛隊およびアメリカ第七艦隊が協力して生き残っている市民の救助を行っているという

その他の国は無線が入らないため、生き残っているかどうか分からないに状態だ。このままではいずれ、世界が崩壊し近代文明も崩壊するであろう。一部情報では国連の研究場が新薬の開発に取り掛かっているという

「やっぱ、自衛する物が必要だな」

そう言ってバレットを見た

その時だった

「「英樹」」

「ん？なんだ、二人とも」

「英樹が」

「悩んで」

「いるみたいに」

「思えたから」

どうやら、二人に心配を掛けちゃったようだな

「安心しな。二人は必ず守ってやる」

そう言って交互の頭を撫でた

「何か」

「手伝えることはある？」

「そうだな。暫く、俺と一緒に見張りをしてくれるか？」

「「うん！もちろん！」」

二人は笑顔で言った

そうして、俺達は見張りをするのであった

床主市小学校

俺達は小室の母親がいる床主小学校へ向かうため、宮本の家で出発の準備を始めていた。武器弾薬をシスターに積み込んだり、シスター自体を改造したりした。

シスターの主な改造は上のハッチ部分にM2キャリバーやM60軽機関銃を取りつけていた。また、バンパー部分に鉄板を取り付け雪かきのように変形させた。

また、小室達の銃や刀、槍がボロボロになったため急遽変更する事になった。

小室

ベネリM1 M16A2 サブ M92F モスバーグM500

宮本

無爪鉈長刀 89式小銃（銃剣付き） サブ シグ・P226 9
m機関拳銃

コータ

ファルコン M240軽機関銃 サブ コルトパイソン M500

毒島先輩

備中青江 長曽根琥轍 サブはそのまま

森田

MP5 ファマスF1 サブ USP スタームルガーP85

高城

ファマスF1 G36C サブ ワルサーMPL イングラムM10

鞠川先生

そのまま

以上のように変更した。多少、使いづらいかもしれないが、ここま
で生き残れたんだ大丈夫だろう

そして、そのまま出発する事になった

「英樹、こっちは準備はいいぞ」

「おっ早いな。こっちも荷物を積み終えたら完了だ。皆、乗り込む
準備をしてくれ。小室、お前は助手席に座れ、ナビゲートを頼みた
い」

「分かった。」

そうやって俺達は改シスターに乗り込んだ

「さて、お客様方、準備はよろしいですか？」

俺が皆に聞く、皆は黙って頷く

「よし！発進！！」

ブオオオオオ！！！！！！

一気に門に突撃しそのまま突破を図った

バキッバキッ！！

門がものすごいきしみを上げて壊れていった

そして、奴らの中へと突っ込んで行く

「おら！邪魔だ！」

ウイイイン、ガチャン！ドカーン！

道路に出ると同時に主砲を発射した

そして、弾はそのまま奴らの中に言って巨大な爆発を起こした。爆発の衝撃で壁に叩きつけられる奴らや姿かたちが粉々になってしまった者までいた

だが、それに構うことなく俺達は宮本家を後にした

（国道）

俺達はそのまま国道に出ることにした。小室の話ではここからが近道なのと言う。

「英樹、次は右に曲がってくれ」

「了解」

俺は指示通りに沿って行く

学校までもう少しと言う所で軍の無線が入った

「ガー……ここ……は……床主……こう……
……誰か……無線を……いるもの……か
?……いたら……答……くれ」

「この無線は……」

今、この辺の区域は電子機器は使えないはず、だとしたら軍の者が
?しかし、使えるとしても限定されてくるだろうな

「英樹、この無線機って」

小室が言ってくる

「ああ、軍の無線機だ。この状況で使えるとしたら、EMPの攻撃
を受けていない海上自衛隊ぐらいだろう。だがな……」

俺は未だに疑問に思っていた。とその時

「英樹!」

コータが叫んだ

「どうした？コータ」

「学校が見えて来たんだけど、屋上に止まってるのってブラックホークだよな？」

そう言われて見ると屋上にはU・H・60の姿がはっきりと見えた。

「自衛隊が来ているのか？」

小室が言う

「分からないな。行つて見た方が早い、行くぞ」

そう言つて俺はアクセルを全開にした

「学校前」

学校前で俺達は一旦車を止めることにした。なぜなら、救助されているのが民間人だけとは限らない。それに無線の状態も悪いみたいだしな。なにかあったと見ていいだろう

とりあえず、無線で掛けて見ることにした

「あーあー、こちらはP・M・C、そちらの所属と現在の状況が知りたい」

前半は俺が武器商人の頃に使っていた奴でこれで、本当に武器がほしい奴かどうか判断をしていた。

「こちらは、陸上自衛隊 第三師団の星、久実三佐である。現在、我々は複数の民間人と共にこの小学校を拠点に救助活動を行っている」

相手はなんと女性だった。声から察するに20代半ばと言う所だろう多分上級士官だな。

「こちら、PMC現在、我々は学校の前に居る。そちらから装甲車が見えるはずだ。」

「少し待て」

そう言つて一旦、無線を切った

「確かに確認した。今から我々が行くので待っていて欲しい」

「了解した」

そう言つて無線を切った

暫くすると数名の自衛官がこちらにやって来た。俺も外に出ることにした

「そちらが星三佐でありますか？」

俺から言つた

「そうだ。私が星三佐である。」

髪は長髪できれいな茶色をしており、スタイルは抜群、胸はDぐら

いである。（例えで言うなら鞠川先生の胸が少しちっちゃいバージヨンと思えば良い）

「よく無事だったな。歓迎する」

そう言って手を差し伸べた

「まあ、こっちはこれがありましたからね」

そう言っただけでも握手をした

しばらくしてシスターも中に入れる事が出来た。

「それで、星三佐はどうしてこんな所に？」

俺が質問をした。

因みに他の皆は後者の中へと入って行ったのである

「EMP攻撃を受ける前の事だった。私は司令部から国民の救助の指令が来ていた。ある程度、市民は救助できたのだが、そんな途中でこの学校の付近での攻撃を喰らった。ヘリはなんとか着陸が出来て隊員も無事だったのだが、出る方法がなくなっただけ。幸い、無線機は直せたから若干の発信と受信はできたので定期的に行っていた。」

とここまでの経緯を言った

「そうですか。それは大変でしたね。」

「そういえば、あれはどうやって手に入れたの？」

シスターを指さして言った

「ああ、それなら………」

俺は自分の正体（転生者である事は言っていない）と職業とこれまでの経緯を話した

「そうか。」

「そうかってあまり非難しないんですね」

「もちろん、その事については非難はするよ。しかし、君のこれまでの行動はどれも武器商人とは程遠い物に感じたからな。」

そう言ってコーヒーを飲んだ

「そうですか。まあ、覚悟の上でやっている事なので自分はあまり気にしていません。」

「そうか。それより、彼の母親は見つかったかね？」

「それはどうでしょうか。それは彼自身が見極めることです。俺じやありません。それより、脱出の手段はあるんですか？」

俺は最もな事を聞いた

「それが一番の課題だ。ヘリは使えないし、どうしたものか……」

彼女は考えている

「だったら、こっちの装甲車はどうでしょう？」

そう言っで自分の装甲車を指さした

「だが、人数が多い。往復するにしてもその間に残っている者がアンデットの餌食になるかもしれない」

自衛隊ではアンデットと呼んでいるらしい

「それだったら、まだ生き残っている車とかを探すしかないですね」

俺は独り言のように言った

「そうだな。」

そう言っで三佐も空を見上げた

果たしてどうなるのか。次回を待て！

床主市小学校（後書き）

新キャラ紹介

星三佐

スタイル抜群で容姿端麗、家は軍家系で祖先は結構有名人がいる。
また、文武両道であらゆる銃火器、武術をこなす

胸はDカップらしい（よく分かっていない）

好きな物

映画

嫌いなもの

へびなどの八虫類

呉衛門軍曹

星三佐の副官的な人であらゆる補助をしている。出世欲がないため
今の地位で十分満足している。意外と気苦労な人

だが、昔は英雄的な人だったらしいがある日を境に出世欲を失くし
たという

好きな物

銃

嫌いな物
醜い願望を持つ者など

これから どうしよう？

俺達は小室の母親を見つけるべく床主小学校を目指していた。そして、小学校に辿りつくとなんと、自衛隊が学校を拠点しており、俺達はなんとか中に入る事が出来た。

小室は無事、母親と再会する事が出来たようだ。

俺は自衛隊の星三佐と共にこれからの事について話し合っていた

「それで、世界は今、どうなっていますか？」

俺が世界状況について聞いた。

因みに自衛隊は職員室を司令部にして事を進めてきたようだ。

「そうね。英樹君のさっきの話した通り、アメリカは半分が奴らに支配され、中国、ロシアは全滅、イギリスでも蔓延し始めたわ。アフリカは、どういう訳か奴らがあんまり出て来てないのよ。それと、オーストラリアは無事みたい」

「なるほど」

情報が入らなかったから分かんなかったけどアフリカとオーストラリアは無事だと言うことだな

「星三佐！」

話の途中で一人の兵士が入って来た

「どうした？呉衛門軍曹」

「はっ司令部から連絡が入り、生き残りは居るかどうかを連絡せよと通達がありました」

「そうか。では、連絡しておいてくれ」

「ですが、無線機の調子がまた悪くなりまして、発信ができない状態です」

「そうか……」

なんか、司令部に報告しなきゃいけないみたいだな

「あの、星三佐」

「なんだ？英樹君」

「だったら、俺の装甲車に付いてる無線機はどうですか？」

「あ！そうだな。それと、紹介しておく。こちらは呉衛門軍曹、私の副官として付いている者だ」

「よろしくな」

そう言つて呉衛門さんは手を差し伸べた

「俺は齊郷、英樹って言います。英樹とでも呼んで下さい」

「分かった。それじゃあ英樹君、無線機、借りるな」

そう言つて職員室を出た

「それで、星三佐」

「なんだ？」

「これから、どうするつもりです？」

「そうだな。まず、あの装甲車以外で動かせそうな大型の車両はあるかね？」

「うーん、そうですね」

俺達は一番の課題にぶつかっていた。ここに居るのは自衛隊と民間人、俺達を合わせてざっと50〜60人位はいたよな。普通ならバスやトラックを使えば何とかなるんだが、この近くには駐屯基地はないしな。ましてやEMP対策をしている車なんて、俺の家に止めてある車しかないよな

ん？俺の家か……

「星三佐、ここら辺の地図はありますか？」

「地図？地図ならホワイトボードに張つてあるけど？」

そう言われて見ると床主大橋からこっちの区域の地図が張られていた

「えっと、小学校がここで、高城の家がここ、俺の家はここか、」

うゝん、直線距離ならそう遠くはないんだが、奴らと廃棄車両とかあいつのヤクザ共の配置を考えると、丸一日は掛かりそうだな。

「そんなに見てどうしたんだ？」

星三佐が聞いて来た

「いや、動ける大型車両なら俺の家にあるんですけどね、奴らとか他の残骸を考えると一日以上は掛かるんですよゝ」

俺はボードを見ながら言った

「まだ、動ける車があるのか？」

「ええ、家のはEMP攻撃を喰らってなかったもんですから大体は動かせますよ。」

「そうなのか。だったら上のへりはどうだ？」

そう言って屋上のへりを指さした

「え？でも、動かないんじゃないあ」

「実はな、片道切符だけなら用意できるよ」

ニヤリと笑いながら言った

星三佐の話ではへりはEMP攻撃を喰らったはものの整備員のおかげで何とか動けるのだと言う、しかし、応急処置的な物なのでずっ

と保てるものではないのだと言っ

「へーすごいですね」

「なに、私の部隊は物好きの集団でね。一人一人がそれぞれの得意分野を持っている。仲間からはネズミ部隊なんて呼ばれてもいるさ」
きつと、この部隊は何らかの事故や上から圧力を掛けられて編成された部隊なんだろうな。だが、逆に言えばこの事態ならば自由に動けると言うことが

「いろいろ、大変なんですね。自衛隊も」

「そうでもないさ。こちらは気軽に楽しくやればそれでいいのだから。だからと言って職務を放棄するわけでもない。ちゃんと動くするさ」

なるほど、この部隊はこの人を中心に統制が取れているようだ。まるで、小室のチームのようだ

「フッフ」

俺はつい笑ってしまった

「な、なんだね？いきなり笑うとは」

「いや、すいません。でも、似てるんですよ。俺達のチームに」

「さっき、話していた小室？君のチームの事か？」

「ええ、あいつらもあなた達のようなチームでした。小室を中心にしっかりと統制が取れてたんです。」

「なるほどな。」

それで、その後は談笑してしまった。近くに居た隊員達も話に混ざり多くの事を知る事が出来た。このチームは個性を大事にしてそれぞれが動ける部隊なのだ。それに隊長である。星三佐もしっかりした人でちゃんと一人一人を区別して指示を出している。

この人達なら生き残れるだろうと俺は密かに思っていた

「所で、星三佐」

「ん？なんだね」

「もし、海に出ようってなら、脱出した後は港に行きましょう。そこに自分の船がありますから」

「本当かね！？」

ものすごい勢いで立ち上がった三佐

「ええ、この商売なんで外国に売る時もありますしさ。ちゃんと船の一つや二つ持ってますよ。因みに大型船ですから人数には困りませんよ？」

「ほゝ、本当にすごいな。英樹君は」

「いえいえ、そうでもないですよ。あなた達に比べればね。俺のし

てることなんて人を殺すための道具を売ってるんですから、人にはあまり賛同されない職業ですね」

「そんな事はない。私は幾人もの屑を見てきたが、君は違う。この事態に陥った場合、大体悪人は他人を落としても生き残ろうとする。しかも、簡単にな。私はそれが許せんのだよ。自衛隊の中にもそういう奴はいた。だから、私は分かるんだ」

そう言ってまっすぐ俺の方を見た

「そうですかね〜なんか、照れるな。それじゃあ美鈴と敏美の所に行きます」

「その二人は彼女かね？」ニヤニヤ

ニヤニヤしながら言ってきたきつとからかつつもりなんだろう

「ええ、二人とも俺の事を愛してくれていますから。それじゃあ」

そう言っただ俺は職員室を出た

「あゝあ、振られちゃったな〜」

私は呟くように言った

「何を言ってるんですか？隊長」

「あら、居たの？呉衛門」

「ええ、先程から」

「そう」

そう言って私はコーヒーを飲んだ

「まだ、諦めなきゃいいじゃないですか。あなたらしくないですよ？」

呉衛門が言ってきた

「そうね。ありがとう、呉衛門」

「いいえ、あなたのお力になればそれで十分です。それでは私も」

そう言っつて呉衛門も職員室を出た

私は夕焼けの空をずっと見ていた

（私・・・あの子に惚れちゃったんだもんねー目ぼれて奴？彼と最初に会った時胸が痛くなっただもん。それで、アタックはして見たけど振られてばかりだからな〜ちよつと悲しいや。でも、ここで諦めるわけにはいかないわ。彼をこっちに振り向くまでアタックし続けるのよ！私）

そう思いながら私は降りて行く夕日を見た

作戦名 Y A S I M A

俺と自衛隊員の星三佐は学校から脱出するための計画を立てていた。しかし、それには大型車両が必要になってくる。

何故かというと俺達を含めた他の一般人も一緒に脱出するからだ。現在、この学校にある移動手段は俺達の乗って来た装甲車と三佐が乗って来たヘリだけである。

しかし、ヘリは例の攻撃を受け内部を損傷していた。彼女の部隊の整備員が応急処置をしたが、片道の距離しか飛べないことが判明している。そして、俺の装甲車も人数制限があるため借りにこれで脱出しようと思っても往復する時間が必要になってくる。

その間に奴らが攻め込んできたりヤクザが来たとなってはうまくいく可能性も少ない。

と言う事で急遽、俺の家に残っている大型車両を取りに行く事になったのだが、この学校に避難している数は予想よりも多い事が判明した。俺の家に残っている車両は多いのだが、それを動かせる人が少ないため難儀していた

（職員室）

「はあ」

星三佐がため息を吐きながら入って来た

「その様子じゃあ駄目見たいですね」

俺が言った

「ええ、彼らは自ら動くとうしないで私達にまかせっきりにするみたいよ」

そう言いながら近くの椅子に座った

「どうぞ、三佐」

呉衛門さんがコーヒーを渡す

「ありがと、しかし、どうしようかね？」

コーヒーを飲みながら言った

「そうですね。思ったより、数が多いですからね、家にあるものなら大抵は揃えられますが、それを動かせる人が欲しいですね」

そう言って俺は銃の整備を行っていた

その時

コンコン

「ん？誰でしょうか」

呉衛門軍曹が扉に向かった

「「あ、あの」「

職員室に来たのは美鈴と敏美だった

「あれ？どうした、二人とも」

俺が言った

「うん」

「私達にも手伝えることはないかなって」

「思ってた」

「そりゃありがたいが今回の場合は訳が違っからな」

「「どういう事？」」

二人が聞いて来た

「実は……」

俺はこれまでの事を話した

「ということだ」

「ふん」

「だったら」

「高城さんの両親や松戸さんは？」

「あつそれは聞いてなかったわ」

俺が思いついたように言った

「じゃあ、」

「私達から」

「言つて見るから」

「英樹は」

「ここで待つてて」

そう言つて二人は職員室を離れた

「どうしたんだ？英樹君」

三佐が聞いて来た

「もしかしたら、できるかもしれませんよ？この作戦」

そう言つて俺は銃の整備に戻った

（数分後）

コンコン

「誰ですか？」

呉衛門軍曹が言った

「私は高城壮一郎、英樹君に呼ばれて来たのだが」

「ああ、あなた達ですか。どうぞ」

そう言つて壮一郎さん、百合子さん、松戸さん、森田、コータが入つて来た

「どうしたのかな？英樹君」

壮一郎さんが言つた

「ええ、実は手伝つてもらいたい事があるんですよ」
そう言つて俺は今回の作戦を話した

「……と言つ訳なんです」

「なるほど、よし、分かつた。手伝おう」

壮一郎さんはあつさりと了承した

「壮一郎さんがいいなら私も」

百合子さんも

「俺も手伝わせて下さい。英樹の旦那」

松戸さんも

「英樹の頼みだからな」

森田も

「こんな機会は二度とないからね」

コータも全員了承した

「よし！ブリーフィングを行う。呉衛門軍曹、担当の隊員を呼んで来てくれ」

星三佐が命令を出す

「了解しました」

そう言って呉衛門軍曹が職員室から出た

数分後、担当の隊員達が入って来た

「では、ブリーフィングを行う。まず、我々はヘリである民家にある大型車両を回収する。」

星三佐が説明する

「三佐、そこに向かうとしても確実に車は動かせるのですか？」

一人の兵士が言った

「ああ、それに関しては心配ない。その家の当主がここに居るからな」

そう言っただけの方を見た

「どうも、初めまして齊郷英樹と申します。家にはEMP対策をしているので問題はありません。それに家にはまだ、持って行っていない武器・弾薬もありますのでそれも一応、回収しようと思えます。」

「それから、この作戦には一般人も混ざっているとは言っても銃火器は扱えるので問題はない。」

三佐が補足する

「あの〜」

コータが手を上げた

「どうした？少年」

「ヘリで移動するって言ってましたけど、ここら辺の乗り物とかは全部ダメになったんじゃない？あ……」

「ああ、この事は内緒にしていたのだが、実はヘリは何とか動かせる」

「じゃあ、それで脱出すると言うのは？」

今度は森田が答えた

「残念だが、それはできない。ヘリは動かせると言っても連続的に動かせない事が分かっている。だから、ヘリは今回で使用を終える」

「そ・そうなんですか」

森田は残念そうに言った

「安心しな森田」

「英樹？」

「行く場所は俺の家なんだぞ？それこそ安全地帯も良い所だ。これより他つて言ったら沖合に泊まってる空母やイージス艦位なもんだぞ？」

「そう・・・だよな」

森田は若干明るさを取り戻した

「なお、今回、呉衛門軍曹と残っている隊員は引き続き学校での安全を確保していてくれ。では、他に質問はあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「よし、解散！」

そう言っただけ俺達は準備に取り掛かった

く屋上く

屋上には関係者以外立ち入り禁止となっていた。そのため見送りは若干少ない感じである。

「英樹」

「無事に」

「帰ってきてね？」

二人が上目ずかいで言ってきた。やべえ、可愛い

「安心しな。お前ら二人を残してどこにも行きやしないさ。お前らこそしっかり待っている」

「「うん！」」

「パパ、ママ、早めに帰ってきてね？」

「もちろんだ」

「ええ、沙耶ちゃんを一人にはしておけないからね」

「出発するぞ！全員乗り込め」

三佐が大声で言った

「よし、エンジン始動」

「了解、エンジン始動！」

カチツカチツ

ウィイウィイン

「おお、動いたな。良かった良かった」

担当していたであろう整備員が安堵の声を上げた

「よし、上昇！」

へりはゆっくりと上がって行きやがて前に進み始めていた。

へりに乗る森田やコータは若干緊張していた

そして、そのまま俺達を乗せたへりは俺の家へと進んで行った

再び、俺の家へ

俺達は小学校を出発して俺の家に眠っている車両を回収しに行くのが任務となっていた。無論、学校に避難している民間人や美鈴、敏美の足となる大型車両を取りに行く。

そういえば、軍用車両以外にも民間の車両も置いてあったな。せっかくだから魔改造してそれを輸送手段にした方がいいかな

バラバラバラ

俺達を乗せたUH-60は今の所異常を見せていない。だが、いつまで持つか分からないのも事実だ実際にあの攻撃を受けたのだから普通なら飛べないはずだ。だからこそ、慎重にならなければならない

「こちら、パイロット目標まで後、5分」

ヘリのパイロットから目的地までの時間を知らせてくれた

「よし！皆、聞いてくれ。ヘリが英樹君の家に到着したら、隊員は周辺の確保、私と英樹君のチームが家の中の安全を確保する」

三佐が皆に作戦内容を伝える。自衛隊隊員は「了解！」と言って各々の武器の準備を始めていた

「目標までの時間、後、二分！」

「よし、壮一郎さん、百合子さん、松戸さんは家の外を俺とコータと森田は家の中の安全を確保する。それでいいですね？」

「分かった」

「分かったわ」

「分かりやした」

壮一郎さんと百合子さんが答えた

「OK」

「分かったよ」

コータ、森田も返事をした

「目的地到着！着陸します！」

一瞬着陸時の衝撃を受けたがそれを物ともせず隊員達は速やかに外に出た。同じく反対側のドアから壮一郎さん、百合子さんが出て行った

俺達はその後、ヘリを出て速やかに家の中へと入った

く英樹家く

家の中は思ったほど荒れてはいないようだ。それに奴らが入った形跡もない

「どうやら、家の中には入ってないな」

俺が言った

「ああ、そうだな。それに他の侵入者もないようだ」

星三佐が答える

「ガッこちら、外部隊、周辺確保できました。」

外の確保もできたようだ

「御苦労、そのまま待機してしてくれ」

「了解です」

そう言つて無線を切つた

「さて、英樹君、車はどこにあるのかな？」

三佐が聞いて来た

「慌てないください。ちゃんとありますから」

そう言つて例の扉を開けた

く車庫く

「これは……すごいな」

三佐は驚いたようだ

「ええ、すごいでしょ？なんせ、世界中の軍用車両が揃ってんですから」

「で、英樹、どうするの？」

コータが聞いて来た

「うーん、とりあえず、兵員輸送車と大型の車両がいいですかね？
三佐」

「ああ、そうだろうな。しかし、輸送車はともかく大型の車両なんてあるのか？」

三佐が聞いて来た

「まあ、一応あるんですけどね……」

「どうした？何か問題でも？」

「いや、特には問題ないと思いますが、ちょっとチート的な車でしてね」

「でも、あるんだろ？だったら見せてくれよ」

森田が言った

「仕方ない、えーとボタンはどこだっけ？」

俺は手探りでボタンを探した。

「あ、あつた」

ポチッ

ウイイン

一番奥の壁が動き出してそのまま壁が上に入った

「こ……これは」

三佐が驚いた

「これ、日本じゃあ走れないだろう」

森田が驚いた

「どうしたの？これ」

コータは逆に聞いて来た

そこに止めてあつたのはトレイラートラックである。前は映画トランスフォーマーのリーダーコンボイと同系の車両である。名前はピタービルト379

「こいつは俺がイラクに渡ってたときに使用した車両なんだ。まあ、あそこは何かと危なくてな。いろいろ施してはある」

「例えば？」

森田が聞いた

「そうだな。防弾装備だろ、タイヤは軍用タイヤだし、後ろのコンテナの方も防弾にはしてある。後はエンジンだな。通常では売られないエンジンを取り入れてあるそれによってどんなに重くなっても牽引できるようになってるんだ」

「「へえ」」

三人はそう言いながらトラックを見た

「と、とりあえず、他の隊員も中に入れてしまおうか」

「そうですね」

そう言つて三佐は無線の外に居る隊員達を呼び寄せた

数分後、他の隊員達も到着したが皆驚きの声を上げた。一部の隊員は狂つたように歓喜していた。きっと、マニアかなんかだろう

その後、いろいろ選別する事になりあのトレーラーも持つて行く事になった。（てか、あれはやばくないか？）

「あら、懐かしいわね。このトレーラー」

百合子さんが言つた

「あれ？百合子さん見た事、ありましたっけ？」

俺が言つた

「ええ、冬の時偶然、見かけたのよ。乗っていたのがあなたと知ったのは後の事だけだね」

「へえ、イラクにも行ってたんですか。百合子さん」

「ええ、仕事でね」

「おい、百合子。その話は聞いた事がないぞ」

突然、壮一郎さんが出てきた。内心、ビックリしたよ

「あ、あら？言ってますでしたっけ？」

百合子さんは冷や汗を流しながら言った

「ちょっと、あっちで話そうか」

そう言つて二人は近くに止めてあつた。輸送車の陰に入つて行つた

「百合子さん、お大事に」

そう言つて俺は手を合わせた

「英樹君、何手を合わせてるんだ？」

三佐が来た

「いや、ちょっとした戦友への安全を願つたのですよ」

「？よく分からんが、まあいいか。それより、聞きたいんだが」

「なんでしよう？」

「これはどうやって出すんだ？他の装甲車とか輸送車はあのリフトで昇りそうだが、これはさすがに出せないだろう」

そう言ってピータービルトを指さした

「ああ、それならちゃんと別ルートから出られますよ。ポチツとな」

俺が近くのスイッチを押すと別の出入り口が出てきた

「こつちならいちいち、上げなくても大通りに出られますよ」

「はあ、すごいな英樹君は」

「いや、そんな事はないですよ。それより、ちゃんと整備したいので他の隊員も手伝わせてもらっていいですか？」

「ああ、いいぞ。」

そう言って三佐は一旦離れた。

「松戸さん」

「何でしょう？旦那」

「これから、魔改造計画を実行する」

「おお！前々から計画されていた。あの計画ですか！」

「ああ、松戸さんは装甲車と輸送車の方を自衛隊の方たちと一緒にやって下さい。俺はこっちをやりますんで」

そう言つてピーターを指さした

因みに魔改造計画と言つのは世界が崩壊する前、松戸と英樹が計画した車改造の事である。以前にも同じ事をしたのだが警察沙汰になつてしまい。なんとか表沙汰にはならなかった。封印の計画である。今回は学校に居た時制作したものである（by作者）

「分かりやした。では、」

そう言つて松戸さんは離れて行つた

「さて、こっちもレベルアップと行こうか」

「少々お待ち下さい」

ウィイウィイウィイン

ガチャン！ガチャン！

「よし！完成！」

俺は改造されたトレーラーを見て満足そうに言った

まず、塗装はブラックにして太陽の反射で別の色が出てくるレインボーと言う物にした。それから前方部分に雪かきのブレードを付け

てエンジンへのダメージを失くす、そして、タイヤにはガードを取り付けてパンクできないようにした。もちろん、後ろの荷台の方のタイヤも施した。コンテナの方は上部を取り外し更に壁を取り付けた。

一応、四方には機関銃を取り付けられるようにしてある。後、コンテナは二段階方式にしてあり下の部分が兵員部分になる

後、窓は鉄板を取り付け破られないようにしてある。

それと、前方の部分の屋根に小型のミサイルを設置してある。緊急時用に使うつもりだ

それと、奴らが邪魔な時に使用するガトリング方も取り付けた。二丁ぐらい弾は武器庫に置いてあった

「はあゝまた、すごい改造をしたね英樹」

コータが言ってきた

「まあ、普通の車よりは幾分か頼れると思うぞ」

「ははっ確かに」

その後、三佐達も来て改造されたトレーラーを見て驚いていた。松戸さんの方もうまく改造されたようだ。ほとんどが原形をとどめてないほど改造されていた

やっぱ、改造は楽しいよね！改造こそ男の夢だ！

そう思いながら俺は整備を進めて行った

最強コンボイ部隊

俺達は俺の家で輸送車やら装甲車を魔改造して学校に向け出発の準備を行っていた。

そこで、我らのコンボイ部隊を紹介しよう

ピータビルド

英樹が使うトレーラートラックである。最初は民間車両であったが、英樹の改造により軍の車両にも負けない改造車両となった。エンジンは非売品のエンジンを使用しておりとある機関から拝借したものである。また、全体に防弾装備をしておりどんな攻撃にも耐えうる装甲となっている。前方にはブレードが装備されておりこれで、奴らを蹴散らせる構造でまた、エンジンにもダメージが行かないようになっている。

また、後ろにはM1A2の主砲の120mm滑腔砲（例えば言うなら映画のデス・レースに出てきたトレーラー）が乗っけてある。乗員は横から乗ってもらう設計になっている

96式装甲車改

これは、自衛隊の装甲車であるが車体を改造して本来の人数より多くの人員が乗せられるようになっていた。また、上部にはガトリング砲を装備しておりわざわざ、乗員が出なくとも運転手が操作をして撃てるようにシステムを改造してある

フクス装甲車

これはドイツ軍の六輪装甲車。ドイツではよく使用される装甲車である。定員は10名+2名と比較的乗れる車両である。これはタイヤに回転式のブレードを装備して奴らを近づけなくしてある上部には重機関銃も装備できるので改造はそこまで行われていない

B T R - 3

ウクライナで製造されている装甲車で主武器が30mm機関砲である。こいつには通信車としての役割もたなってもらったため後ろの部分にアンテナを設置した。また、簡単にはやられないように新型の装甲板も取り付けてあるためちつとやそつとじゃあ壊れないようにしてある

74式特大型車両

これは自衛隊のトラックの中で最もでかい車両で今まで幾度となく使用されていた。そこで改造のいは念を入れて施した。まず、荷台の部分を帆屋根ではなく鉄板の屋根に改造した。その上には機関銃が取り付けてある。前方にはブレードを装備し雪かきのようにそうこうする事が可能である。また、タイヤの露出度が高いためこれを装甲板で囲い下に潜り込めないようにしてある。エンジンも本来のではダメなので新型のエンジンを取り入れた

これで、最強のコンボイ部隊が結成された

俺達は準備を終えそれぞれの車両に乗った

「さて、皆準備はいいかな？」

俺は無線で各車両に連絡を取る

「こちら、96式に乗る星三佐だ。こちらは異常ない」

「こちらはフクスに乗る高城壮一郎だ。私の方も異常はない」

「こちら、BTR-3に乗る高城百合子よ。こっちも大丈夫」

「こちらは74式トラックに乗る松戸です。英樹の旦那大丈夫でっせ」

各車両から応答があつた。

「よし、全車俺のトラックに付いて来い！先陣は俺が切る！」

「」「」「応！」「」「」

ブオオオオ！！！！

ピーターがうねりを上げる

「行くぜ。相棒久々に暴れるか」

そう言ってアクセルを全開に開けた

ブロロロロ！！！！！！

く大通りく

一部の倉庫のシャッターが開いた

ウイインガチャン

アゝアゝ

奴らがその音に気付き近寄って来た。その瞬間……

ブオン！！グチャ！

一番近くに居た奴はピーターの突進によって頭が潰れた

「うおら！！！」

俺はハンドルおもつきり切った

キキツ！！

その後後続車両が次々と出てきた

ブオン！ブオン！ブオン！ブオン！

ブオオオオオ！！！！x5

「よし、全車付いて来ているか？」

俺が無線で呼びかけた

「こちらは三佐。異常ない」

「こちら、壮一郎。問題ない」

「こちら、百合子。問題ないわ」

「こちら松戸、大丈夫でっせ」

全車から連絡があつた

「よし、配列を変える。三佐、壮一郎さん、百合子さん、松戸さん、俺という順番にしましょう」

「了解！」「了解！」「了解！」

そして、それぞれの車が順番になり列を乱すことなくきれいに並ぶ事が出来た。

「では、三佐。指揮の方をお願いします」

俺が言った

「了解。任されたよ。では、全車私の車両に続いて学校を目指す。その後、港から脱出する。分かったか？」

「了解！」「了解！」「了解！」

そうして、俺達は学校を目指すべくどんどん奴らを蹴散らして行った

とある廃墟ビル

「頭」

ヤクザの一人が来た

「なんですか？」

「例の集団、動き出した見たいでっせ」

「そうですか。では、我々も動くとしましょう」

「後を付けて脱出手段を奪うと言ったことですね？」

「ええ、そうですよ。では、準備の方をお願いします」

「分かりやした」

そう言ってヤクザが出て行った

「くつくつく、今度こそ後悔してもらいますよ。英樹君。そして、私は自由を手に入れます」

紫藤は高笑いしながら外に向けて銃を撃っていた

く再び大通りく

俺達は学校に向け順調に進んで行った。しかし、途中で奴らと車の残骸に手間取っていた

ドルルルル！……！

ドドドドドド！……！……！

ドッドッドッド！……！……！

「くそ、これじゃあ時間通りに辿りつくか。分からないな」

「そうだね」

ピーターには俺と森田とコータが乗っていた

「コータ、近くの奴らが撃てない。M2で一掃してくれないか？」

「分かった。やって見る」

そう言った瞬間……

ドッドッドッド！……！……！……！

鉄板窓ごしに奴らがミンチにされていくのが分かった

「よし、このまま……」

行こうと言おうとした瞬間

「……」

キキキップシュー

「あわわ、どうしたの？英樹」

森田が言ってきた

「いや、前で何かあったみたいだ」

そう言つて無線機を取り出した

「こちら、英樹、何かありましたか？」

俺は、星三佐の車両に呼びかけた

「こちら、三佐、実は道路全面が車の残骸で封鎖されていてな。どうにも通ることができない状態だ」

「なるほど、コータ、道路の状態がどうなってるか分かるか？」

俺はコータに聞いた

「えーと、うわ、こりゃあ酷いな。どんな事故、起こしたか知らないけどほとんどが大型車両見たいだよ。しかも、追加で乗用車が突っ込んでる」

「そんなに酷いのか」

だとしたら、アレが必要かもな

「コータ、中に戻ってくれ。」

「え？どうして？」

「いいから、ちょっとした兵器を出すんだよ。星三佐」

「なんだね？」

「今から砲撃を行います。前の車両は俺の車の後ろに居てくれませんか？」

俺が言った

「分かった。全車聞いたな？直ちに英樹君の車より後ろに下がれ」

そう言った瞬間、全車が俺の車の後ろに向かって動いた

「さて、準備をするか」

そう言ってピーターを動かした

ブロロロ・・・

「英樹、どうするの？」

コータが聞いて来た

「何、戦車砲で一発ブチかますのさ。」

そう言った瞬間、運転席にモニターが出てきた。そこに移ったのはさっきの残骸になっている車両であった

「あれ？もしかして、戦車砲ってこれに乗ってるの？」

森田が言った

「ああ、俺使用の改造だけだな。映画に出てきた車両を見て作ったんだ。それじゃあでっかい花火を打ち上げようか」

そう言ってスイッチを押した

ポチッ

ドドーン！！

ヒュン！！

ドカーン！！！！

弾は見事、残骸にぶつかり大爆発を起こした。

「よし！三佐、もう行けますよ」

俺は無線で連絡を入れた

「ああ、了解した。全車、後に続け」

そう言って俺達は再び、学校を目指すのであった

学校に到着、そして脱出

俺達は大通りを抜けてそのまま無事学校に到着した。

「学校」

ブオオオ！！（クラクション）

俺はトレーラーのクラクションを鳴らした。奴らに気づかれるかも知れんがそんな事は構わない。すぐにここを脱出するんだからな

キキップシュー

俺達の車両が入ると同時に門で待機していた自衛隊員がすぐさま閉めた

ガチャ

「ふう、何とか着いたな」

俺は水を一口飲んで喉の渴きを潤した

「英樹、お帰り」

小室がやって来た

「おう、ただいま」

「すごいな。こんな物まで持ってたんだ」

そう言ってピーターを見た

「まあ、こいつは相棒みたいなもんさ。今まで俺を守ってくれた」

そう言っただけ俺も見ただけ

「所で、なんで、スーツ姿なんだ？」

「ああ、これか？まあ、気分転換つてやつさ。」

そう。俺の姿はマフィア風のスーツを着込んでいた。家に帰った時、偶々見つけた。どうせなら仕事風で行ってみようかと思って着てきたのだ

「気分転換でスーツなんか着るか？」

小室が笑いながら言った

「失礼な奴だな。これは俺の仕事用のやつなんだよ。そんじょそこらのスーツと一緒にされちゃあ困るね」

「は・・はは、そうなんだ」

「所で、そっちは何か変化はあったのか？」

俺は聞いた

「いや、特に大きな変化はなかったよ。奴らもここまでは来てないみたいだし」

「そうか」

良かった。これで、事は順調に行けるだろう

「では、三佐。すぐに移動の準備をしまいましょう。さっきのクラクションで奴らに気づかれたかもしれませんから」

俺は三佐に言った

「そうだな。よし、呉衛門軍曹と数名の隊員はすぐに一般市民に行つて来てくれ。残りは見張りを頼む」

三佐は指示を出した

そして、すぐさま呉衛門軍曹は一般市民に脱出の用意ができた事を伝えに行った。俺達は外で奴らが来ないように見張りをしていた。

因みに俺はトレーラーの荷台で双眼鏡で見ながら見張りをしていた

「やつぱ、あのクラクションはまずかったかな？すぐに来なけりやあいいんだが、予想はできないな」

俺は独り言のように言った

「「英樹」」

「おお、美鈴に敏美か。どうした？」

振り返ると二人は梯子を昇りながらやって来た

「英樹が」

「帰って来たって」

「聞いたから」

「そうか。それで脱出の準備は終わったのか？」

俺は二人に聞いた

「うん」

「終わってるから」

「ここに来たの」

「そうか。じゃあ、手伝ってくれるか？美鈴はこっちを敏美はそっち側の見張りを頼む。ほれ、双眼鏡」

そう言って二人分の双眼鏡を渡した

「「分かった」」

そう言って二人は俺の隣に座って双眼鏡で指定された方を見始めた。暫くすると校舎から多数の一般市民の人達がやって来た。予想通り結構な数がいた。そして、今星三佐が皆に説明をしていた

「ふう、これからどうするかね」

俺は独り言のように言った

「「どういうこと？」」

二人が聞いて来た

「いや、世界中でこんなことになってんだ。一体、人類はどの位、生き残りがいるんだろうなって思ってたさ。多分、生き残ってるとしても今までのように対人関係が築かれるかと言えば答えは”NO”だ。見ず知らずの人間の中に奴らに噛まれた奴がいるかもしれないという疑心暗鬼の世界になって行くんだろう」

「「・・・・・・・・・・」」

二人は黙って聞いた

「だが、少なくとも俺は身の回りに居る奴らだけは信じていたいもんだな」

ギユウ

気が付くと二人は俺の服を握りしめていた

「どうした？」

「私達は」

「英樹の事」

「信じているよ?」

そう言って俺を抱きしめた

「ああ、俺もだよ」

そう言って俺も二人を抱きしめた

とその時だった

「西、前方!! 奴らが来たぞ !!」

一人の自衛隊員が叫んだ。西の方を見ると数体ではあるが奴らの形が確認できた。

「東からも来たぞ !!」

そう言われて見ると確かに東からも来ていた

「クソ! 挟み打ちか。三佐! 市民の状態は!?!」

俺は三佐に聞いた

「こっちは今から始める。それまで、耐えてくれ!」

そう言って市民を移動させるように始めた

「よし、コータ、お前にアキュラシーAEを使って西側を頼む! 俺は東をやる」

そう言ってコートに渡した

「分かった！こぼしは無しだよ？」

ニヤリと笑って言った

「ああ、そっちもな！」

そう言っただけでもバレットを持って東に向かった。呉衛門軍曹の指示で他の自衛隊員にも俺達を支援してくれるようにしたみたいだ。

他の隊員は軽機関銃とかいろんな銃で固めていた

俺は近くにあった体育倉庫の屋根に昇りそこから構えた

「おら！！終わりだ！」

ド　ン！！

一番と遠くに居た奴の体に弾がブチ込まれてそのまま後ろの奴も巻き添えにしながら倒れて行った

そうすると、他の隊員達も一斉に射撃を開始した

ダダダ！！！！

ドン！ドン！ドン！

西側でも発砲し始めたようだ。だが、奴らは倒れて行きたびに増え

て行くどっかの増殖モンスターか!?

「クソ!おら!」

俺はありったけの弾を奴らにブチ込んで行く。その時だった

「「英樹!」!」」

美鈴と敏美が来た

「どうした!?二人とも」

「星さんが」

「準備が」

「終わったから」

「いつでも」

「行けるって!」

「分かった!お前らは俺のトラックに先に乗っててくれ。俺はコータの所へ行く」

「「分かった!」」」

そう言って二人は走って行った

「さて、俺も行きますかね」

そう言ってコータのいる西側に向かった

（西側）

「コータ！！」

ドン！

「何！？」

「準備が終わったみたいだ。すぐに移動するぞ！」

「分かった！すぐに行くよ」

そう言って一番近くの車両に向かって行った

俺もトレーラーに走って行った

ガチャ！ボタン

「よし！全員乗ったか？」

俺は無線で連絡して見た。すると全車両から応答があった

「よっしゃあ！！行くぜ！二人とも、しっかり掴まっているよ？」

そう言ってアクセルを思いっきり踏んだ

ブオオオオオ！！！！！！！！

ピーターはうねりを上げて進んで行き門に思いっきりぶつかった

ガシャアアン！！！！！！

だが、改造車であるこの車にとっちゃあ何の意味もないけどな！

「きゃあ！？」

二人は振動で驚いたようだ

「まだまだ、行くぜ！」

ドカツ！グシャ！

近くに寄って来た奴らは皆踏みつぶされたり跳ね飛ばされていった。
後続車両も皆無事のようにだ

「よし、大通りだ。このまま高速に乗るぞ！」

そのまま俺達を乗せたコンボイ部隊は港に向け進んで行った

床主高速

俺達は学校を脱出してそのまま港に向け進行していた。しかし、途中の橋などは誰の仕業か知らないが落とされていた。

そこで、唯一大丈夫だった高速を使って移動をしている

ブオオオオオ

「ここら辺はあまりいいね」

森田が言った

「ああ、殆どの人間は下を使っていたからな。それに警察とかが封鎖をしてたからだろう」

高速に入る時パトカーが塞ぐように止まっていたためそう言う事が予想できる

「でも、さすがに一台もないってのは逆に不気味だね」

高速には俺たち以外車が無い事が分かっていた。だが、誰も使っていないのはおかしすぎる。普通なら廃棄された車両とかがあってもおかしくはないはずだ

「確かにな。俺達にとつちゃあ、ありがたいが油断はしない事だ。分かったな？」

「うん、そうだね」

そう言いながら俺達は進んで行った

「サービスエリア」

俺達は途中にあったサービスエリアで休憩する事になった。

「いや、長時間、運転してるとさすがにきついな」

俺は腕を伸ばしてストレッチをした

「はい、英樹」

「おう、ありがとう。敏美」

敏美は俺にスポドリを渡してくれた

「ンクンクプハー！うまい」

俺はスポドリを飲みながら言った

因みに美鈴はトイレに行っている

「ねえ、英樹」

「なんだ？」

「私達はどこまでにげられるのかな。前みたいに日常に戻るのか

な」

少し不安そうに言った

「さあな。正直どこに逃げるのかは俺にも分からない。それに元の日常に戻る事はない。これだけは言っておく」

「そう・・・なんだ」

敏美は更に落ち込んだ

「だからこそ。俺達は生きるんだよ。生きて生きて、そして、最後に死ぬときにはこういうんだよ。生きてて良かったってな」

「そうだよな。死んでからじゃあ遅い事もあるもんね」

「ああ、そうさ。それに敏美には美鈴や俺がいるんだ。だから、そのためにも生きてて欲しい。少なくとも俺はそういう風に思ってるぜ」

「うん！分かった。ありがとう英樹」

そう言って笑顔になった敏美

「良いってことよ。彼女が悲しんでる時、何もしないってのは俺の主義に反する事だからな。気にすんな。それより、美鈴が戻ってくるぞ」

「うん。そうだね」

そう言つて敏美は美鈴の元へ行つた

「確かに、こんな世の中じゃあ生きててもしょうがないって思うかもな。だが、この地獄から抜け出せたときには逆にハッピーエンドが待ってるかもな」

俺は独り言を言つた

「つと燃料がヤバいな。給油しておこうつと、おつあそこに良い物があるじゃあねえか」

そう言つて見たのは一台のタンクローリだった。きつとスタンドに入れようとした時にあの事件が発生したのだろう

俺はピーターを動かしてタンクの近くまで行き給油を行うことにした

「おお、満タンに入ってるな。こりゃあ結構結構」

タンク内を見て見ると未使用のまま放置されたみたいだ。そして、そのまま給油を行った

「よし、これで満タンだな」

「英樹君」

「ん？あつ三佐、どうしたんですか？」

振り返ると三佐が立っていた

「おなかは空いてるかね？」

「ええ、小腹ではありますが」

「そうか。だったらクッキーがあるんだがどうだ？私の手作りだ」

そう言つて袋に入つたクッキーを差し出した

「三佐が作つたんですか？これは美味しそうですね。では頂きます」

そう言つてクッキーを一つ摘まんで口に入れた

モグモグ

「ど・・・どうだ？」

三佐は不安そうに言つた

「うん、うまい！うまいですよ。三佐、料理、上手なんですね」

俺は満足げに言つた

「い・・・いや、それほどでもないがな／＼」

三佐は照れながら言つた

「これはお世辞じゃあないですよ。本当にうまいです」

「そうか。それは良かった。じゃあ私はこれで失礼する」

そう言つて戻つて行つた。

戻って行く途中スキップで行った。相当嬉しかったのだろう

「さて、俺も戻るとしますかね。」

そう言って再びピーターを動かした

＼星side＼

「＼＼」

私は上機嫌だった。なんせ、好きな男に手作りのクッキーを渡して尚且つうまいと言ってく入れたのだからな。

クッキーはサービスエリアの厨房で作ったものだったがお気に召してもらえて良かった。

「三佐、嬉しそうですね」

呉衛門軍曹が言った

「まあな。君の言った通りだありがとう」

「いえいえ、私は助言をしたまでですよ。実際是三佐、あなたの力です」

「そういうな。君の助言が無かったら私はあの時すでに諦めていた。本当にありがとう」

「なんだ、隊長も乙女って事ですか！ヒューヒュー」

近くに居た隊員がやし立てた

「こ・こら！はやすんじゃない！／＼／」

私は赤くなつて言つた

「隊長、今怒つても怖くないですよ」

さらに他の隊員がやした

「／＼／＼／＼こら／！待て／！」

私は近くにあつた棒を振り回しながらはやした隊員に向かって行つた

「あつ！隊長、それ、反則！」

「うるさいうるさい！！」

そして、隊員を追いかけて行つた

＼星side out＼

「ん？向こうがなんか騒がしいな」

「「そう？」「」

二人が言つた

「そんなことより」

「星」

「きれいだね」

俺と美鈴と敏美はピーターのエンジン部分で横になりながら空を見上げていた。丁度、夜になっていたので星がきれいに見えた

「ああ、そうだな。こんなのいつ以来かね」

俺が言った

「世の中も」

「この空みたいに」

「平和だったら」

「いいのにな」

二人が言った

「そうだな。それはいつか来るだろう。それまで俺達は生き残らなきゃあいけない。そのためには俺の支えになって欲しいな」

「うん！」

「もちろん！」

そう言っただけ俺達は再び空を見上げた

襲撃

俺達はサービスエリアで一晩過ごした後、朝になって出発した。理由は夜だと電灯もついてないので移動するには危険だからである。だから、移動は日のあるうちにしておくことになったのである。

そんなこんなで俺達は港に向け移動していた

俺はピーターで好きなアニソンを流しながら運転していた。同乗している美鈴や敏美、森田は後ろの席で寝ている

ブオオオオオ

「ん〜良い天気でしかも自分の好きな曲が聞けるってのは最高だな
」

俺は一人で言いながら運転をしていた

「しかし、本当に一台もないな。逆に不安になって来た。大丈夫かな。ゲームだとこの辺りでゾンビが大量発生したりするんだよな。それが高速が断たれているかだ。」

そう。簡単に事は進まない俺は思っている。ゲームでも現実でもこれは同じ事だ。何度か挫折などをして人は強くなっていくのが世の中の常識だ。

「まっそんな思い詰めてもしようがないか」

そう言いながら俺達の車列は進んで行った

「三佐車両」

私達は順調に港に向け進行していた

「三佐、順調ですね」

呉衛門が言った

「ああ、だけど、油断はするな。英樹君の前に言ったヤクザというのも気になる。隊員達は常に警戒態勢にしておけ」

「了解しました」

そう言つて呉衛門は無線で各車両に乗っている隊員に指示を出した

「しかし、この高速も怪しい所ですね。三佐」

「全くだ。まるで、嵐の前の静けさだな」

私が言った

「そうですね。」

そう言いながら私達は進んで行つた

「ヤクザ」

「頭、奴らはサービスエリアを出て港に向かっていませ」

側近のヤクザが言った

「なるほど、彼らは港に向かっているのですか。となると、船で脱出と言った所でしょうか」

紫藤が言う

「ええ、ですが、前に頭が言っていた。EMP?でしたっけ、アレの影響でほとんどの者が動かないのでは?」

側近が言う

「ええ、確かにそう言いました。ですが、相手はあの武器商人なのですよ?きつと、EMPも効かない船を持っているでしょう」

「確かに、それはあり得ますな。」

「ですが、ここで野放しという訳にも行きません。ですから、あの武器商人以外は排除して下さい。分かりますね?」

「なるほど、私らの分野ということですね」

「ええ、そのとおりです。どんな手を使っても構いません。やって下さい」

「分かりました。判断はこちらで良いですね?」

「ええ、頼みましたよ」

そう言って紫藤はどこかに消えた

く英樹く

「ふわ、これなら、何事もなく港に着けそうだな」

俺が言った

「そうだね。そしたら、船でここを脱出だ。」

森田が言った

「ん？」

俺はふとミラーで後ろを見た。すると知らない車が走っていた

「あれは……」

そう言った瞬間……

チュン！バキッ！

何かが飛んできてミラーが壊されてしまった

「！？。英樹、どうしたの！？」

美鈴が言った

「クッソ！ヤクザだ。あいつらどっかのメカニックでも雇ってんのか！？三佐！」

俺はすぐさま無線で三佐を呼びだした

「どうした！？英樹君」

「ヤクザです！俺達の後ろに付いてます。奴ら、どっかのメカニックスを雇って車で移動してきました！」

「何！？よし、各車両に乗っている隊員諸君、すぐさま臨戦態勢に入れ。敵はすぐにでも攻撃してくるぞ！！」

無線で隊員に呼びかける三佐

その後、隊員達はすぐさま銃器を取り出したり機銃に取りついた

「森田、お前らも臨戦態勢だ。俺は運転に集中するから、援護は頼んだぞ」

俺が言った

「OK、任せておいてよ。」

そう言ってM4を取り出した

「英樹」

「私達も」

「手伝うよ」

美鈴と敏美が銃を持ちながら言った

「ありがとう。二人は近距離、遠距離ので分かれてくれ。」

「「分かった」」

そう言つて二人は近くの窓に寄つた

「ふふふ、相棒、久々に戦闘に入るぜ。準備はいいか？」

俺は自分の愛車に語りかけるように言つた

ブオオ!!

俺はクラクションで開戦の合図を出した。

ドドドド!!!!

ドルルルル!!!

最初に火を吹いたのは後部車両の上に付いていた機銃だった。

一瞬、後ろの状況を確認すると最初はヤクザの車が一台であったが、その数はだんだんと増えて行き、結果的には俺達の車列が囲まれるまでに増えていた

「クソ、奴ら一体、どこからこんなにも大量の車両を出したんだ!」
「?」

俺は叫ぶように言つた。ヤクザは他の車両にも攻撃を開始し始めた

ダダン！ダダン！

ドドドドドド！……！

ダン！ダン！ダン！

ヤクザは様々な銃器で俺達の車両に攻撃した。しかし、俺達の車両は改造車でそんじょそこらの攻撃じゃあやられはしないぜ

だが、敵の攻撃はどんどん増していった

「ええい！めんどくさい！！」

そう言つて戦車砲のモニターを出した

「英樹！それってもしかして……」

森田が言つた

「ああ、戦車砲だ！後ろの奴らを吹き飛ばす！上に居る隊員さん。伏せて下さい！」

俺は無線でコンテナの上にいる隊員に呼びかけた。隊員は「了解」と言つた

「うつしやああ！！！！発射ああああ！！！！」

ポチッ

ドカーン！

120mmが火を吹いて一直線にヤクザの車に直進していった

「命中!!」

そう言つてガッツポーズをした

とその時・・・

バババババ

高速の上を飛ぶ物があつた

「英樹君！へりだ！あいつら、こんな物まで用意していたのか!？」

無線で壮一郎さんから連絡が入った

「おいおい、こりゃあ冗談だろ?」

運転席から上を見て見ると軍の最新鋭アパッチ・ロングボウ攻撃ヘリであつた。元々はアメリカ軍が使っていた物だがここ最近で日本の自衛隊にも搬入されるようになったヘリである

「英樹！あれは!？」

森田が言つた

「あいつはアパッチ攻撃ヘリだ。対戦車ミサイルを積んでやがる。森田！こいつを使え」

そう言ってバビロンからある物を取り出した

「こいつは!？」

「そいつはスティンガーミサイルだ。大丈夫、素人でも扱えるように調整はしておいた。お前はそれをあのへりに向けて照準を合わせて撃つだけだ!やってくれ!」

「で・でも・・・」

森田は困惑していた

ド・ド・ド・ド・ド!!!!!!!!!

アパッチのチューインガンが俺のトラックに直撃した。損傷は軽度だった。

「いいから、撃て!!じゃないと俺らが木端微塵になるんだよ!!」

俺は叫ぶように言った

「わ、分かった!」

そう言っつて森田はスティンガーをへりに向けた

ピ・ピ・ピ・ピーーーー!!!!

「おら!!」

バシュウ!!

さすがに車の中だけあって煙が車内に舞ったがミサイルはへりに一直線に向かって行った

へりもミサイルに気付き退避行動に移ろうとしたが先にミサイルが直撃して、テールローターが損傷し、飛べなくなっていた

ヒュンヒュンヒュン・・・・・・・・・・ドカーン！！

へりは高速の下に落ちて爆発を起こした。

「よっしゃあ！！！！よくやった森田！！」

「ああ、良かった」

そのまま森田はへたり込んだ

「よし、三佐！このまま突破してしましましょう！港まではもつぐです！」

「分かった！全車、急いでこの区域を脱出だ！」

そう言いながら俺らはスピードを上げた

襲撃 2

俺達は高速でヤクザの襲撃を受けたが何とか撃退し、そのまま逃走した。

そして、高速を降りて港の近くの町までやって来ていた。

ブオオオオ

「ふうゝなんとか奴らは追ってこないみたいだな」

俺が言った

「そうだね。よかった」

森田が言う

「ガッ、こちらは星三佐、英樹君大丈夫か？」

無線で三佐が呼びかけてきた

「ええ、少し攻撃を喰らいましたが、問題ない範囲です」

俺が答える

「そうか。それは良かった。港までは後、どのくらい分かるか？」

「この町を抜ければすぐそこですよ。全車に付いてるPDAを見て下さい。それに道順が載ってますから」

実はカーナビの替わりに高性能なPDAを全車に取りつけているためより正確な情報が入ってくる。そのため道に迷わないのだ！

「よし、全車、私の車両に続いて付いて来てくれ。」

三佐が言々と各車両から応答があった。

「よし、港まではあとちょいだ。三人とも頑張ってくれ」

俺は美鈴、敏美、森田に言った

「分かったぜ。英樹」

「うん！分かった」

三人とも応える

「よし……………」

行こうと言おうとした瞬間…………

ドカーン！！

「……………！！」「……………」

俺の車両の後ろの付近で爆発音があった。念のためトレーラーを確認したが幸い無事みたいだ

「英樹！」

「今の何！？」

美鈴と敏美が聞いて来た

「分からん。また、ヤクザ共が来たのかもしれない。十分に警戒してくれ。三佐、全体に臨戦態勢を敷いて下さい。」

俺が言った

「了解した。皆聞いたな。また、ヤクザ共が来たのかもしれない！十分に警戒してくれ」

三佐が言つと各車両から「了解」の声が聞こえた

「さて、次はどんなを出してくるんだ？あの馬鹿教師は」

そう言つて周りを警戒していた。

その時！

ブオオオオオ

後ろから付いてくる大型車両があつた

「来たな。どれどれ……おいおい」

俺はミラーの替わりに持っていた鏡で後ろを確認した。なんと、そこにあつたのはイタリア軍仕様のチェンタウ口偵察装甲車であつた。

その周りには黒ベンツが4〜5台付いていた

「なんで、奴ら軍用車両なんて持ってんだ！？どっから手に入れた！」

「英樹君、後ろは何か変化はあったかね？」

壮一郎さんが聞いて来た

「壮一郎さん、奴ら装甲車を持ちだしてきましたよ。全くチートすぎる」

「な、何だって！？やつら、どこからそんな物を……」

どうやら関連性のあった壮一郎さんも知らないようだ

「三佐、奴ら装甲車を持ちだしてきましたよ」

「何！？種類は分かるか？」

三佐が聞いて来た

「チェンタウ口偵察装甲車ですよ。あの砲台が付いてる」

「くそ。また、厄介な物を持ちだしてきたな。」

「それに付属として黒ベンツが五台あります」

本当に厄介な物を出してくれたな馬鹿紫藤、こいつは礼をたっぷりとさせてもらうぜ

そう思ってた時だった

ドン！

チェンタウロから撃ってきた

ドカーン！

「！！クソ！戦車砲がやられちゃった！」

俺のトレーラーに付属している戦車砲がチェンタウロによって壊されてしまい大破してしまった。トレーラーの上部に乗っていた隊員は無事みたいだ

「これだと、結構、不利になってくるかもな・・・」

「英樹！どうすんだよ！？これじゃあ、ヤバイぜ！」

森田が言ってきた

「焦るな。焦ったらそこでゲームオーバーだ。」

とは言っても、あれは厄介だな。どうにかして壊す事は出来ないかな？

・・・仕方ない。引き付けるか

「三佐」

「なんだね？」

「俺が装甲車の方を引き付けます。その隙に逃げて下さい。多分ベ
ンツの方が付いてくると思いますのでそっちの対処をお願いします」

「・・・分かった。集合は港でいいか？」

三佐が理解してくれたみたいだ。ありがたい

「ええ、了解しました。先に付いたらPDAで連絡して下さい。」

「分かった。武運を祈る」

「そちらこそ」

そう言って無線を切った

「と、言うことだ。協力してくれるな？三人とも」

「ああ、英樹が困ってるのに黙って見てられるかよ。」

森田が笑う

「私達は」

「英樹のそばに」

「居られればいい」

美鈴と敏美も応えてくれた

「よっしゃああ！！二回戦の始まりだぜ！！どっせいい！！」

キュキュキュキュ！！！！

俺はピーターを大きな交差点で左折した。タイヤと道路の摩擦音が曲がるたびに大きくなっていった。そして、後ろのトレーラーも何なく付いてこれたみたいだ

ブオオオオ！！キュキュキュ！！

予想通りチェンタウロも曲がって来た。ベンツの方はそのまま、三佐達の車両を追って行った

「よし！予想通りだ！森田、PDAだとこの先には何がある？」

「えーと、石油貯蔵施設みたいだよ。結構でかいかも」

なるほど、いい舞台じゃねえか。

「よし！勝算が見えてきた！三人とも装甲車に向かって攻撃してくれ。牽制でも何でもいい。それから、好きな銃を取ってくれ」

そう言ってバビロンからたくさんの武器を出した。ただし、遠距離専用だ

「「「分かった！」」」

そう言って三人は好きな銃を取って攻撃し始めた

ダン！ダン！ダン！

ダダン！ダダン！

ダーン！ダーン！

「よし！その調子だ。どんどんやっちゃってくれ！」

そう言いながら俺達は石油貯蔵施設に向かって行った

崩壊

俺達はヤクザの襲撃を再び受け、逃走していた。しかし、奴らは装甲車を出してきた。そこで、俺は一旦、三佐と分かれ装甲車を引き付けていた

そして、俺達は先にある石油貯蔵施設に向かっていった

「石油貯蔵施設の前の道」

ブオオオ！！

「くそ！しつこいな」

俺が言った

ドドン！

「おっと」

ギリギリで弾を避けた

「森田、貯蔵施設まではどのくらいだ！？」

「えっと、あと数百メートルで入口が見えるよ！」

森田が答える

「あれか！よし、捕まってる！どっせいいいい」

キュキュキュガシャーン！

トラックはギリギリで入口に入りフェンスを突き破った。その後ろから装甲車が付いて来た

作戦通りだ。ついでにコンテナ上部に居る隊員達には中に戻ってもらった

「英樹、」

「ここに」

「来たのは」

「いいけど」

「どうするの？」

美鈴と敏美が聞いて来た

「何、映画でよくあるだろ？大爆発シーン、アレを再現するのさ」

俺は冗談交じりで言った

「本気か？英樹」

森田が青ざめた表情で言った

「ああ、冗談に聞こえるかもしれないが本気だ。それしか手はない。

戦車砲をやられちまったんだからな。何かアイデアがあれば聞か？」

「「「・・・・・・・・・・」」」

三人とも黙ってしまった。

「なら、この作戦で行くぞ。内容はこうだ。まず、俺達が逃げるフリをしながら奴を引き付ける。PDAで見る限り、この貯蔵施設は半島のような形になってる。半分まで来たら俺がミサイルでタンクを撃つ、後は逃げるだけださっきの入り口までな」

俺は説明した

「その間」

「私達は」

「何をすればいいの？」

二人が聞いて来た

「その間、三人はあいつを引き付けるように陽動をしてくれ。付かず離れずの感覚でな。大丈夫お前ら三人ならできると俺は信じてる」

「しょうがないな。そこまで言われちゃあ」

そう言って森田はファマスを握った

「まかせてよ。英樹」

「期待にこたえるからね」

美鈴と敏美もM14とAK-74を持った

「ああ、よろしく頼むぜ。運転は任せて欲しい。それじゃあ開始だ」
そう言って行動を開始した

ダダダ！

ダン！ダン！ダン！

ダダダダダ！！

三人の持っている武器が火を吹き後ろに居る装甲車に弾幕が張られる

装甲車の方は攻撃により若干、速度は落ちたがそれでも健在だ

「よし、いいぞ三人ともその調子で頼む。えーとコンビナートは・
・・・あった。」

半分まで行った時、巨大な石油貯蔵庫があったしかも、見事なまでにきれいに並んでいた。このでかさなら俺達も危ないがあの装甲車をやるには十分な物になる

「よし、美鈴、あそこにあるタンクをランチャーで吹き飛ばしてくれ！」

「分かったわ」

そう言つて美鈴はRPG-7を担いだ。

「いいか？俺の合図で撃つてくれ。」

「分かったわ」

「よし、スタンバイ、スタンバイ……GO!!」

カチツブシュウウウウウウ!!

ブシュウウウウウ!!

RPG-7と小型ミサイルが同時に進行しそして……

ドド ツカ ンン!!

!!

巨大な爆発を起こした。

「よっしゃああ命中!!皆、掴つてろおおおお!!」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

!!

俺はアクセルを全開まで踏んだ

ドカーン!!ドカーン!!ドカーン!!ドカーン!!ドカーン!!ドカ

ーン！ドカン！ドカン！ドカン！ドカン！ドカン！ドカ
ン！

タンクは連鎖的に爆発を繰り返していた。俺達は爆発より前に居たためあまり衝撃は来ない

「誰か！後ろを確認してくれ」

俺が言った

「えーと、英樹！もっとスピード上げて！爆発がすぐそこまで来るよ！！」

森田が言った

「分かった！真の力を見せてやるぜ！うおおおおおおおお！
！！！！」

俺はこれでもかって位にアクセルを踏んだ。ピーターはうねりを上げてスピードが増していった

ブオオオオオ！！！！！！！！！！

そして・・・

ブオオオオオ!! ガシャ
ン!

ドカーン！！

キキ
ーッ
！！

俺達は何とか爆発に巻き込まれずに済んだ

「ふう、危なかったな」

俺が言った

「うん、そうだね」

美鈴と敏美が言った

「そうだ！あの装甲車は！？」

そう言つて森田は貯蔵施設の方を見た

「どうだ？森田」

俺が言った

「待つて・・・何か見える」

そう言つたので俺達も貯蔵施設の方を見た

ブオオオ・・・

装甲車は炎の中から燃えながら出てきた。それはまさに地獄からのヒットマンと言つたところか？

「とりあえずは倒したみたいだね」

森田が言った

「ああ、そうだな。三佐の方は無事かね？」

俺が言った

「大丈夫っしょ、多分」

「おいおい、多分ってな」

そう言いながら火に包まれる装甲車を見た

「英樹！」

「星さんから」

「連絡、来たよ！」

そう言っPDAを持ちながら言ってきた

「おう、そうか。無事に着いたみたいだな。どれ？」

俺はPDAを見た時だった

ピピピピ

PDAに付いてる電話が突然鳴り出した。相手は三佐からだ

「こちら、英樹、三佐どうしました？」

「英樹君か。そちらは終わったようだな」

「ええ、なんとか、そちらはどうです？」

「こっちは港に着いたんだが、ヤクザがしつこくてな今、銃撃戦に入ってる」

そう言われてよく聞いてみると発砲音が聞こえたりしていた

「分かりました。すぐに向かいますのでもう少々持ちこたえて下さい」

「分かった。できる限り早く来てくれ」

そう言って三佐は電話を切った

「さて、早速向かうとするぞ。あっちは大変みたいだからな」

そう言って俺達は三佐達のいる港に向かった

祝、本当にありがとうございます！！！！

はい、どうも、シュバルツです！

今回は報告がありましてやらせていただきました。

では、ゲストに英樹君を呼んでいます。どうぞ！

「はい、どうも、英樹です。よろしくお願いします。」ペコリ

「いやゝこんなの初めて書くから緊張するなゝ」

「おう。ってか作者」

「何？」

「報告って何だ？朗報でも入ったのか？」

「うん。ちゃんというから待って」

「分かった」

「とりあえず、そのソファーに座りなよ。はい、お茶」

コトッ

「悪いな。ズズゝゝ。うん。うまい」

「そりゃあ、良かった。じゃあ、発表しまゝす。なんと今書いてる、

学園黙示録が……」

「ああ、俺主演のやつな」

「ななななんと！！！アクセス数が35万アクセスを頂きました！！！」

パフパフ

「まじか！？そいつはすごいな、俺もやりがいがあるってもんだ」

「正確には356,931アクセス数ありました。皆さん、自分の作品を読んで頂き本当にありがとうございます！！」ペコリ

「俺からも礼を言わせてもらうぜ。本当にありがとうございます」ペコリ

「しかし、書き始めは本当にだめだった自分がこんなにも書けるようになったのはびっくりだよ」

「本当だよな。書き始めの頃なんか、字数もいかない誤字脱字は多しそりゃあ最悪ってもんだ」

「グッ……本当の事とはいえ心に来るな」

「実際そうなんだから仕方ないだろ？」

「ここまで、来れたのも今まで読んで頂いた皆様のおかげです！それに貴重なアドバイスもありがとうございます。」

「そうだな。その謙虚さは俺も認めるぞ。作者」

「やっぱり、こういうのは謙虚さがないとダメでしょ。」

「そうだな。人間、謙虚さは必要だな。」

「これからも、頑張つて行きたいのでこれからもよろしく願います！」

「こんな、軍オタな作者ではありますが、どうかこれからもお願いします」

「ちよっ！それは言う必要ないっしょ！？いいムードで来てたのに！」

「うるさい。本当のことなんだからいいだろ。殺されたいのか？」

英樹はバビロンを開いた

「おうおうおう、やれるもんならやってみ、こちらら伊達に軍オタしてるわけじゃないぞ」

作者はアメリカ陸軍一個大隊を出した

「おまつ、アメリカ軍出すなんて卑怯だぞ！！」

「うるさい！お前があんなこと言うからだ！全軍、攻撃開始！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！

「うわっと！？このやろ。ならこっちはコンボイ部隊だ！出でよ！」

そう言うとき英樹の後ろに本編で出てきたコンボイ部隊が現れた

「ふふふ、作者を舐めてもらっちゃあ困るね。こっちは無限の可能性を秘めているんだ！」

そう言うときアメリカ空軍、海軍、海兵隊が現れた

「おもしれえ、現アメリカ軍に喧嘩を売ってやるよ。そら！攻撃開始じゃあ！」

そう言うとき両軍攻撃を開始した

く離れた場所く

「はあ。英樹と作者は何してるんだ？」

小室が言った

「いいんじゃない？喧嘩するほど仲がいいって言うし」

麗が言った

「で、でも喧嘩ってレベルじゃないような・・・」

コータが言った

「いいのよ。コータ、あいつらは勝手にやらせておけばいいの」

沙耶が言った

「そうだぞ。平野君、いざとなったら私達で止めればいい。な？小室君」

冴子が刀を持ちながら言った

「え！？そ、そうですね・・・あははは」

小室は苦笑いしながら言った

「でも、その内終わるんじゃない？私たちはそれまで話していきましょうよ」

鞠川先生が言った

「そうだな。それが一番いい。それにしてもこのお茶は美味しいな」

星三佐がお茶を飲みながら言った

「うむ、たまには別の場所で暴れるのもまた、一興というものだ。な？小百合」

莊一郎がいう

「ええ、本当なら私も英樹君に加勢したいところなんですけどね」

小百合さんもお茶を飲みながら言った

「でも、皆さん」

「そろそろ」

「お開きになる」

「みたいですよ?」

美鈴と敏美が言った。

「よし!皆!最後は俺の曲に合わせて言うてくれ!」

森田がギターを弾きながら言った

「いいぞ。いいぞ。森田君、ガンガンやれ!」

松戸さんが言った

「森田、うるさい」

パンパンパン!!!

沙耶が近くにあったハンドガンで森田の足元を撃った

「は・・・はい、すみません・・・」ガタガタブルブル

床主港

俺達はその馬鹿教師が送って来た装甲車を石油貯蔵施設で破壊して、三佐と合流しようとしていた。しかし、三佐からヤクザのさらなる襲撃を受けて港で銃撃戦になっていると言う

俺達は港まで猛スピードで行っていた

ブオオオオオオ！！！！！！

「ちょ、ちよつと英樹！飛ばし過ぎじゃない！？」

森田が言った

「仕方ないだろ。三佐達が危ないんだから」

俺は冷静的に言った

そう言いつつ邪魔になっている廃棄車両を蹴散らしつつ進んで行った

バキャン！バキャン！

蹴散らされた車は脇に飛んで行き他の車両とぶつかっていた。たまに奴らの方に行って奴らがそのまま潰されるのも見た。正直、気持ち悪い光景だ

そう思いいつつも俺達の車両は港に向け進行していた

く港、三佐グループく

ダン！ダン！ダン！

「全員、気をしっかり持て！やられたらそこでお終いだ！」

私達は港でヤクザと銃撃戦になっていたが段々と弾が乏しくなってきた。その証拠に私達の隊員の中にはハンドガンで戦っている者もいた

「二尉、私の銃を使え」

そう言つて隊員に渡した

「申し訳ないです。三佐はどうするんですか？」

「何、英樹君の仲間に貸してもらつさ」

そう言つて彼らの仲間、平野コータくんのいる装甲車に向かった

「平野君！」

ダン！ダン！

「はい！？何でしょうか？」

コータは撃ちながら言った

「すまないが、銃を貸してもらえんか！？」

「どうぞ！装甲車の中にあります！好きなものを選んで下さい！」

「すまない！」

そう言って私は装甲車の中に入った

装甲車の中

「よりどりみどりだな」

私は装甲車の中に入って驚いた

そこには私の分隊にも劣らない銃がたくさん置いてあつた。全部英樹君の物なのか？

私は近くにあったミニミニ軽機関銃とM16を手にしてまた、外に出た

外に出るとさらに銃撃戦は激しくなっていた。私は呉衛門の近くに行き銃撃を始めた

ダダダダダダ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ミニミニで弾幕を張った

「三佐！その武器は！？」

呉衛門から聞いて来た

「何、英樹君の物さ。少々借りるだけさ。軍曹、敵はどんな配置だ

？」

私は冷静に聞いた

「はっ、敵は向こうの車両に固まっています。また、その向こうの倉庫の屋根にスナイパーが陣取っています」

軍曹も冷静に応えた

「そうか。英樹君達がこっちに向かっている。もうしばらくの辛抱だ」

「了解しました」

そう言って再び戦いに身を投じるのであった

く三佐outく

ブオオオオ

俺達はもうすぐ港に着こうとしていた。港周辺には奴らが銃撃音を聞いて集まっているのだろう。その証拠に奴らの数が港に行くにつれ増えている

「英樹」

「皆は」

「無事かな？」

美鈴と敏美が不安そうに聞いて来た

「ああ、大丈夫だろう。三佐達もいるしそう簡単にはやられないだろ」

俺は笑顔で言った

「英樹！あれ！」

そうやって森田が指さしたのは港の入り口だった。

「よし、皆、戦闘準備に入ってくれ！着き次第銃撃戦になつてゐるだろう」

そう言つと皆、それぞれの銃を取り出した

ブ
オ
オ
ン

俺達は何事もなく港に入った

to New

ダダダ
！！！！

ダン！ダン！ダン！

$$T_1 T_2 \cdots T_{n-1} T_n$$

港の奥から銃撃音が聞こえてきた

「一番奥からだな。行くぜー!!」

そう言つてアクセルを踏んだ

＼コータside＼

俺達はヤクザの襲撃をまた受けて港で銃撃戦になっていた。小室や宮本さん沙耶さんがそれに応じて反撃している。俺も自分の銃で反撃した

ダン！ダン！ダン！

「クソ・・・英樹、どこにいんだよ。そろそろ、来てもいいだろ？」

独り言のように言った

その時・・・

ブオオオオオ！！！！！！！！

「まさか!!」

＼コータside out＼

「見えた！行くぜー！！捕まってるー！！!!」

俺達が行く先にはヤクザ共がいた

「おら!!!!」

キュキュキュ!!!!!!

ピーターを思いっきりドリフトさせた。普通なら横転してもおかしくないのだが、まあ、そこはご都合主義と言う事をお願いする

ドカーーン!!!!

見事、ドリフトを成功させトレーラーの部分でヤクザ達が盾にしていた車を吹っ飛ばした。車は海の方に飛ばされ落ちて行った。無論、ヤクザも同じく吹っ飛ばされていた

プシュー

「銃撃やめ!」

三佐からの命令で銃撃が止まった

「ふう〜終わったぜ」

俺はそう言って水を飲んだ

キラン

「ん?」

俺は光った方を見てみた。倉庫の屋根にヤクザがいた

「あそこにいるのか・・・あれは動くかな?」

そう言ってスイッチを押した

ウイイイン

モニターが出てきた

「おし、一発だけ動けるな。それ！」

ドオン！！

戦車砲はやられたと思っていたがどうやら一発だけ撃てるようだった。そして、撃った後は意気消沈してしまった

ドカーン！！

弾は見事に倉庫に直撃し燃えていた

「よし、これで完了っ」と

ガチャンボタン！

そう言っただけ俺はピーターを降りた。美鈴や敏美、森田も同時に降りた

「英樹！」

向こうから小室やコータ達が出て来た

「よう。小室、それに皆、無事なようだな」

俺は左手を上げて言った

「ああ、そつちも無事みたいだな」

小室が安心そうに言う

「おいおい、武器商人をなめて貰っちゃあ困るね。こえでも死地は潜りぬけてんだ。そう簡単に終わったりしないさ」

俺は余裕の表情で言った

「とにかく無事で良かったよ」

「ああ、俺も嬉しいね」

そう言ってお互いの生を分かち合った

「英樹君、助かったよ」

三佐が敬礼してやって来た

「いえいえ、お互い様ですよ。それにしてもやっと港に着きましたね」

「ああ、後は君の用意している船で脱出だ」

「そう言えば、そちらは人がいませんでしたか？」

「大丈夫だ。今、鞠川校医と複数の看護婦をしていた者たちで負傷者の方に周っている。幸い重症者はいない」

毒島先輩が言った

「そうですね。それじゃあ、船を出すのでしょうか」

そう言って手元のリモコンを押した

ピッ

ウイーンガチャン

すると、近くの倉庫が分解し、中から出てきたのは……………

「おいおい、こんな物まで所有していたのか……………」

「すごいな。武器商人とは……………」

「いやはや、英樹君には驚かされる」

と口々にそれぞれの感想を出してきた

皆が驚いたのも無理はない、倉庫から出てきたのは戦艦アイオワである。この戦艦は大戦後期に出て来てそれまでの間主力艦としてアメリカ軍で使われていた戦艦である

「どうだい？これは圧倒的だろう」

俺が言った

「英樹はすごいな。でも、これどこで手に入れたんだ？」

「何、少しばかり借りて（盗んで）来たのさ」

俺はにこやかに笑った

「また、字が違つよーな……」

コータが言った

「気にするなつてあまり気にしているとそのうち爺になつちまうぜ。それより、三佐」

「あ、ああ。何かね？」

「さつさと乗船しまいましょう。急がないと奴らがこつちに向かつてますから」

俺は真剣な顔で言った

「分かった。すぐに……」

ド　ン！！！！

三佐が言いきろつとした時俺達の後ろで爆発音が起きた

「なんだ!？」

小室が言った

「分かん。警戒しろ」

キュラキュラキュラ

そして、燃えている倉庫の奥から何かがこっちに向かって来ていた

その正体は？

続く・・・

厄災、再び……

俺達は無事、三佐達と合流し港から脱出を図っていた。しかし、あの厄災が再び現れた……

「今度は一体何なんだ!？」

小室が言った

「この状況でやってくると言えばあいつしかないだろ。小室」

そう言つて燃えている倉庫の奥を見た

キュラキュラ

「……ヤクザ共は軍隊でも買ったのか?なんで、エイプラムズがこんな所にあるんだ……」

三佐が言った

そう。俺達の目の前に現れたのはアメリカ軍の主力戦車M1A2エイプラムズである。この戦車は第三世代の戦車で湾岸戦争から現在に至るまでアメリカ軍の中核を為す戦車である

「こいつは……厄介だな……」

毒島先輩が言った

ウイイイン、ドカーン!

エイプラムズの戦車砲が火を吹き弾の方角は・・・・・・・・

ドーン！！！！

俺の愛車ピーターに直撃した。いくら防弾仕様とはいえ戦車砲をまともに食らっちゃったら為す術がない

ピーターは吹っ飛ばされて海に落ちた

ドボン！！

「くそ・・・俺の愛車が・・・」

俺は落胆した

ガチャ

「ふふふははははは！！！！！！！！いい様ですね〜その絶望に満ちた顔・・・堪りませんね〜」

エイプラムズから出てきたのはあの馬鹿教師であつた

「紫藤！！！」

宮本が叫んだ

「おや？誰かと思えば宮本さんじゃありませんか〜久しいですね〜お父さんとは無事に再会できたようですね〜まあ、後、数分で皆いなくなりますから安心して下さい」

馬鹿はへらへらと笑いながら言った。正直、殺したい

「あなた、それでも人間なの!？」

「私は、自分の欲求に従っているだけです。己の自己満足を満たせばいいんです。やれ人助けだのそういうのは私から見れば偽善だ……ふくくはははは!……!……!」

紫藤は笑いながら言った

「あなた!……!」

ガチャ!

宮本はM1A1を構えた

「おっと、ヘタに動かない方がいいですよ。すでに次の弾は装填されています。あなたが撃つ前にこっちの戦車砲が先に火を吹きますよ?」

「……クッ」

宮本は悔しそうに顔を歪めた

「ただし……私もそこまで鬼ではありません。英樹君、君と取引がしたいんですよ」

「……俺とか?」

「ええ．．．武器商人としての君に．．．ですよ．．．」

そう言つてニヤリと笑つた

「英樹！あんな奴なんかほっとけ！！」

小室が言つた

「小物は黙つてなさい！」

ダン！

ブシューウウ

弾は小室の足に直撃した

「ぐあああ！！！！あ．．足が．．．」

「孝！！！」

「小室君！！！」

宮本と毒島先輩が小室に駆け寄つた

「小室！！！！貴様！！！！！」

「おっと、英樹君ヘタに動かない方がいいですよ．．．じゃないと次は死んでもらう事になりますからね．．．ククク」

そう言つて銃口を俺に向けた

「・・・・・・・・分かった・・・・・・・・取引は何だ？」

俺は武器商人としての俺に戻した

「難しい事じゃありませんよ。あの船を我々に譲っていただけないでしょうか？」

そう言つて戦艦アイオワを指さした

「紫藤・・・・貴様・・・・」

小室は足を抑えながら言つた

「小物は黙っているって言つただろうが！！！！俺は英樹君に用があるんだよ！！！！」

紫藤は切れたように言つた

「・・・・・・・・分かった。紫藤・・・・あの船は譲つてやろう。ただし、俺達の仲間に手を出すな。」

俺は奴を殺したい衝動を抑えた・・・・なぜかつて？エイプラムズの他にヤクザ共が俺達を囲んでいるからな。それに武装解除までされている

「これは、賢明な判断ですよ。英樹君、分かりました。あなた方に危害は加えません。ただし、出航が完了するまでの間、あなた達を見張らせていただきます」

そう言つてヤクザ共に指示を出す紫藤

「それと・・・・・・・・あの船の力ギだ。受け取れ」

ヒュン

パシッ

「ククク、確かに受け取りましたよ。おい！お前ら！」

「「「「「へい！！！」「「「「「」

ヤクザ共は分担して動き出した・・・・・・・・すると、どこに隠していたのか輸送トラックやら装甲車が持ち出されてきた。

俺達は離れた所からその光景を見ていた

「あいつら・・・・・・・・どこにあんな大量物資を隠していたんだ？」

三佐が言つた

「大方、スーパーやら学校の備蓄倉庫から持ち出した物でしょう。じゃないとあんなには集まりません。」

俺が言つた

「だけど、英樹 輸送車とか装甲車はどう説明するの？床主じゃあ自衛隊の基地はないはずだけど・・・」

コータが言つた

「確かにな・・・あいつらどこから持ち出して来たんだ？」

俺が言った

「もしかしたら・・・」

三佐が気づいたように言った

「何か気付いたんですか？星三佐」

森田が言った

「ああ、これは私の推測だが、床主の郊外には自衛隊専用のスクラップ工場があつてな。あそこなら輸送車とか装甲車、戦車、ヘリマで廃棄できる場所がある。もしかしたら、そこから持ち出したのかもしれない」

三佐が推測を言った

「それが妥当だとしても弾はどうするんです？俺達を襲ってきたアパッチとかはミサイルやチェーンガンまでありましたよ？」

コータが言った

「多分、事前に発電所とかに派遣された自衛達から奪ったのだろう。それならアパッチとかチェーンタウロが弾を積んでいたのも頷ける」

「とにかく、今は大人しくしてましよう・・・今は・・・ね」

俺が言った

数分後

ヤクザ共は無事、船に搬入を終えたようだ

「さて、私達はここから脱出させていただきますが……あなた方はここに残っていて下さい。まあせいぜいあの死人どもに食われない事だけを祈っておきましょう。はははははは……！！！！！！！！！！」

ウザい高笑いを上げながら紫藤は船に乗り込んで行った

ブオオオオオオ！！！！！！！！！！

船が汽笛を上げてゆっくりと港から離れて行った

その光景に他の避難民などは絶望に暮れていた

「……行っちゃったね」

コータが言った

「我々はここで終わりなんじゃないか……」

軍曹が言った

「英樹・・・」

美鈴と敏美が不安そうに俺を見た。

だが俺は……………

「ふふふ……………あーっはっはっはっは！……！！！」

笑っていた

「ひ……………英樹？」

森田が心配そうに見て言った。きっと気が狂ったんだと思うたのだろっ

「この俺が、裏社会で世界の武器倉庫と言われた意味が分かるか？」

俺はニヤリと笑った

「どういう事だ？英樹、言ってる意味がさっぱり分からないよ」

小室が言った

「答えは……………これだ！！！」

パチン！

俺は指を鳴らした

次の瞬間……………

ゴポッゴポゴポゴポ・・・

水面から泡が噴き出て来て・・・

ザバーーーーン!!!!!!!!!!

「なるほど・・・これが武器商人の力・・・というわけか」

三佐は納得したように言った

「すごい・・・マジですごいぜ！英樹」

小室が言った

「ほう・・・」

毒島先輩は見上げて言った

「何・・・これ」

宮本は啞然とし

「齊郷・・・あんたすごすぎだわ」

沙耶は驚きながら

「うつひょーーーー！！！！」

コータは乱舞した

「わっおつきいね」

ありすは喜びながら言った

そこに現れたのはどの国も開発していない英樹オリジナルの潜水戦艦名前をW A R ^{ウォー}この戦艦は英樹一人で作成、開発した超ド級戦艦である。(外見としてはM G S 4に出てきた潜水戦艦に似ているが、甲板があるので外見は普通の戦艦に見える)

主砲は大和と同じ46cm砲、副砲が38cm砲、その他の武装として12.7cm砲が12基、SAMが10基、機銃が24基、高角砲が15基、レールガンが1基搭載してある。さらに潜水が可能なので魚雷も装備してある

これ一隻で一個艦隊と戦える代物の戦艦である

「これはどうしたんだい？英樹君」

三佐が聞いて来た

「こいつはどここのブラックマーケットにも出回っていない最新型の戦艦ですよ。俺作成の戦艦ですけどね。今まで出番がなかったからこの港の下に眠らせてたんですよ」

「なるほどな……」

三佐は納得したように言った

「さて、急がないと奴らが来ます。乗船して下さい」

「分かった。よし！避難民から先に乗れ！」

そう言って俺達は乗船を開始した

厄災、再び・・・・・・（後書き）

やってしまった。だが、後悔はしていない

床主、脱出（前書き）

戦艦WARについて

主砲46cm砲 4基

副砲38cm砲 6基

その他

12.7センチ砲 12基

SAM 10基

対潜ミサイル 4基

高角砲 15基

機銃（40mm4連装） 24基

レールガン 1基

機関 原子炉 15 標準タービン 4

他

艦載機 ヘリなど多数

外見は大和に似ているが中身は最新鋭の電子機器やらなにやらです

ごい性能を持っている

艦載機も積んでいるので戦闘機から爆撃機まで充実に揃っている

また、潜水艦のように船自体を海中に入れることが可能である

床主、脱出

俺達はある馬鹿教師に再び再会してしまい、なんと脱出用の戦艦アイオワを奪われてしまった。皆は船を奪われてしまったことにより絶望に満ちていた。しかし、俺にはまだ、出していない俺専用の戦艦を出したことによって皆の顔に再び希望を出す事が出来た

そして、今は積み荷や他の避難民を船に搭乗させていた

く床主港く

「皆さん、慌てずに乗り込んで下さい。時間はたっぷりありますから」

自衛隊員が避難民に対して指示を出していた。俺は甲板から港の入口をコータや森田と一緒に監視していた。

小室もやりたいと言ったのだが、馬鹿教師の食らった銃弾が足に残っているとの事なので船の中にある医務室で静香先生に治療を行ってもらっている

く甲板く

「こいつは、すごいな……」

森田が船を見て言った

「ああ、俺の最高傑作さ。外見は大和のようになっている」

「英樹、それはなんで？」

コータが聞いて来た

「まあ、簡単に言うとな俺の好きな船だったからな。分かるだろ？この砲台の美しさ。そして、世界最大と言われたこの船の形に」

そういつて見上げた

「「ごめん・・・分からない」「」

森田とコータが同時に言った

「何！？お前ら、この美しき芸術が分からないのか！？」

俺は興奮して言った

「英樹・・・多分、そう思ってるのお前だけだと思っよ」

森田は哀れな目で見ながら言った

「そ・・・そんな目で見るな！それじゃあ、俺が時代遅れの人間じゃないか！コータ、お前から何か言ってくれ！」

そう言ってコータに振った

「・・・・・・・・」

コータも哀れな目で俺を見つめていた

「だから、そんな目で俺を見るな！俺が惨めになっちまうだろ！やめろ！やめてくれ！」

そんなおふざけをしながら俺達は監視を続けた

数分後・・・

「よし、後少しだな」

俺が言った。

俺はなんとかさっきの状況から脱出して監視態勢に入っていた。暫くは森田とコータの視線が痛いほど突き刺さったが二人もそれをスルーしてくれた

「だけど、少し遅れてるね。このままだと奴らが来ちゃうよ」

コータが言った。コータの言うとおり避難民は順調に乗船して行ったがそれでもまだ、全員が乗り切れたわけではない。さっきの銃撃戦で奴らが確実にこちらに向かって来ている。

「焦っても仕方ないじゃないか。焦って替わるなら今頃、終わってるよ」

森田が言った

「森田の言うとおりだ。俺達はいち早く発見したら防衛体制に入る。一応言っておくがこの船は最新式だ俺の一言で全システムが動くように設定してあるからな。そうそうに奴らは近づけないさ。俺がいる限りな・・・」

そう言つて望遠鏡で港の方を見た

その時

ガシャーン！ガタガタガタ！！

「来たよ。奴らだ」

コータがSVDで覗きながら言つた

下では避難民が一斉に騒ぎ出したが隊員が何とか落ち着かせたようだ。俺は無線で三佐に呼びかけた

「こちらは英樹、三佐、聞こえますか？」

「ああ、聞こえる。どうした？」

「奴らが来ましたよ。俺達は攻撃にかかります」

「了解、避難民の方は任せてくれ。」

そう言つて切つた

「よし、まずは準備運動がてらに砲台の試射でもしますか。12・7センチ砲、右30度、下20度」

ウイイイン、ガチャン

俺の言葉通りに12・7センチ砲だけが動いた。

「放て」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

一斉に砲台が火を吹き砲弾は奴らに向かって降り注いだ

ドカン！ドカン！ドカン！ドカン！

アアアアア

奴らの悲鳴がどんどん消えて行った。

「す・・すごい」

森田が静かに言った

「当たり前だろ。英樹は武器商人なんだよ？」

コータが言う

「そうさ。俺は武器商人、裏の世界では世界の武器庫なんてフレイズがあるんだ。しかも欠陥品は無いぜ？」

俺はニヤリと笑った

「さて、今のうちに全システムを立ち上げておくか。全システム機動、機関始動せよ」

ウィイイイイン

俺の言葉をスイッチにして全システムが立ちあがる。同時にエンジンの方も始動した

「そう言えば、英樹」

「なんだ？ コータ」

「この船の機関は何を使ってるの？ まさか、ボイラーとか言わないよね」

「そんな古臭い物なんかには頼るかよ。この船に積んであるのは原子炉だぜ？ このでかさになれば、それぐらいのパワーは必要だ」

「原子炉！？ マジかよ……」

森田は驚いたようだ

「なら、大丈夫だね。速力はどのくらいになるの？」

「まあ、ざっと40〜50ノットの間かな？」

「うへ〜巡洋戦艦より速いや」

「だろうな。だが、それぐらいなければ一個艦隊には太刀打ちできないさ。ちゃんと対潜ミサイルだって積んでるんだぜ？」

「へ〜戦艦の弱点を克服したんだ」

「まあな、さて、避難民の方はどうか？」

そう言って見てみた

「急いで下さい！」

隊員が大声で指示を出していた。避難民はほとんどが乗船しきっているようだ。後は複数の隊員と僅かな避難民だけだった

「よし、順調だな。コータ、ここからは遠距離射撃と行こう」

「OK」

そう言って持っているSVDで射撃し始めた。俺もバビロンからM14を出して射撃を始めた

ダン！ダン！ダン！

バン！バン！バン！

俺達の射撃によって奴らは次々と倒れて行った。しかし、奴らも数が減るところかどんどん増えて行った

「どれだけの数があるんだ？」

ダン！

「分からないね。もしかしたら、床主の住民が全部押し寄せているのかも・・・」

バン！

俺達は射撃しながら話していた。因みに森田には重機関銃で一掃してもらっている。たまに森田の方を見ると……

「い——やっほう——!!!!——くらえ——!!!!」

[illegible]

思いつきり、撃ちまくっていた。皆、この状況に慣れてしまったのか。そんな事はどうでもいいこの状況こそが今、生きていると言う証なんだ。

死してなお歩く屍になるよりは十分マシな事だ

そう思いながら撃っている

「ガッ、英樹君、全員の乗船が終わったようだ。出発してくれ！」

三佐から連絡が入った

「了解しました。おい、射撃中止だ。船を動かす。森田とコータは先に船の中に入っててくれ」

「分かった！」

そう言って船の中に入って行く二人

「さて、お前の初陣だ。とことん実力をを見せてくれ……46c
m砲発射準備、目標、床主港」

ウイイイイン、ガチャン！！

46cm砲の砲門すべてが床主港に向けられた

「この距離じゃあまだ、危険だな。もう少し離れるか。機関、巡行に入れ」

ボオオオオオオ！！！！！！

でかい汽笛と共に船が右旋回する。そして……

「よし、十分な距離だな。発射あああ！！！！！！！！！！」

ドーン！！！！！！

砲弾が一気に床主港に向け発射され……

ドカーーーーーン！！！！！！！！

見事、命中し床主港が火の海になっていた。火の中から奴らが燃えながら出てきた。一体だけではない数十、数百と言う数が現れ海に落ちて行く

まるで、地獄の行進のように……

「憐れだな……死んでも尚、歩き続けるんだから」

その光景を見ながら俺は呟いた

こうして、無事、床主から脱出した俺達であつた。しかし、まだやらなければならぬ事がある。それはあの馬鹿教師をこの世から葬る事だ

場所は割れている。俺はシステムに場所を登録させ船の中に入った

未来の希望（前書き）

更新が遅れてしまつて申し訳ない

未来の希望

俺達は、無事、床主を脱出した。しかし、まだ、やらなければならぬ事がある。それは、あの馬鹿教師をこの世から葬る事、少なくともこの先の未来にとって脅威な存在であることに違ひはない。しかし、静香先生の情報によると先生の友達が空港に取り残されているらしい。なので、今回は床主空港に向かう事にした

しかし、その前に俺らの船では床主を無事脱出したとの事で宴会を開くつもりらしい（三佐の提案）理由は市民に少しでも安らぎが必要だとのことだ。食糧はもちろん飲料水は俺らが持ってきたのと船に積んである物を足しても5年分は生き残れる量なので問題はないと言う事で今、俺らは甲板でパーティを開いていた

甲板

「じゃあ、無事、床主を脱出できた俺らに乾杯」

俺が乾杯の音頭を取った

「乾杯！！！！！！」

そう言うとき、各々思い思いのひと時を楽しんでいた。森田は楽器を弾いていた奴らと組み演奏会を開いた。コータは銃でクレー射撃を始めた。それにつられて美鈴がショットガンでやり始めたりしていた。

俺はサーヴァントを呼びだし、それぞれ休息を与えた

「よし、皆今日はゆつくり休んでくれ。机の上に並んでいる食べ物や飲み物も飲んでいいからな」

「ありがたき幸せ」

セイバーが言った

「よし、自由行動だ。好きなところに向かってくれ」

そう言うつとサーヴァント達はバラバラに行動し始めた

俺は皆の様子を見ながら酒を飲んでいた。まあ、こんな世界になっちまったんだこれくらいは許されるだろう

「ふうゝなんとかひと段落したな」

俺は皆を見ながら言った

「英樹」

「ん？おつ敏美、どうした？」

敏美が声を掛けてきた

「となりいい？」

「ああ、どうぞ」

そう言うつと敏美は隣に座った

「やっと出られたね」

「ああ、そうだな。だが、まだやる事がある」

「やる事？」

「ああ、あの馬鹿教師をこの世から葬る事さ。少なくとも奴は今後の未来にとって脅威であることに違いはない。前の世界ならあつと間に消えていただろうが今は違う」

そう。前の世界ならば日本の政府が動いたり、国連が動いたりしてらるだろう。しかし、今はそんな機能はないに等しい。

今の世は例えて言うなら北〇の拳みたいな暴力が支配する世界になり果てた。多分、ワクチンなどが出来たとしても数年はこの状態が続くだろうと俺は思ってる

「やっぱり、前の世界みたく戻らないのかな？」

敏美はジュースを飲みながら言った

「ああ、たとえワクチンが出来たとしても今度はその取り合いになるだろうな。どっちにしろ人類が生き残るのはほんのわずかな人口位な物さ。そういう覚悟はしておいてもおかしくはないぜ」

「そうだね。私は英樹と一緒に居られればどこにだって付いて行くよ」

「敏美……ありがとう」

そう言つと敏美はキスをした

チュッ

「へへ・・・キスしちゃった／＼」

下をベロツと出しながら言つ敏美であつた

「照れるな。」

俺はそう言つと酒を飲んだ

「敏美く英樹くこっちに来なよ」平野君がクレー射撃をするつてさ
く」

美鈴が大きな声で言つた

「おう！今行くぜ！行こうか。敏美」

「うん！」

そう言つて俺達は敏美のいる所に向かつた

く甲板（クレー射撃場）く

俺らは美鈴とコータのいるクレー射撃場に来た。他には高城夫婦や三佐などもいた

「英樹、お手本、見せてあげてよ」

コータが言った

「しゃないな。なら、公式的な奴で行くとするか」

そう言っただ俺はバビロンからモシン・ナガンを出した

「そ・それは！モシン・ナガン！ソ連が作りだした狙撃銃だね！」

コータは目を輝かせながら言った

「ああ、そうさ。俺はこれで十分だ。しかし、よくクレイ射撃なんてできたな。何か飛ばす物でもあったのか？」

俺が言った

「ああ、それなんだけど、なぜか、貨物室を探したらこんな物が出てきたよ」

そう言っただ出してきたのは野球選手が良く練習などで使う球を飛ばす機会だった

「こんな物積んであったか？まあいいや、とにかくやるか。コータ、球を飛ばしてくれ」

「OK！」

そう言っただコータは機会を持って離れた場所に行った

「いくよー！」

ガチャン！

「OKだ。いつでも飛ばしてくれ」

ガコン！

ダン！

パン！

飛ばしたのは野球の球であった。それを俺は一発で撃ち落とした

おお

周りから驚きの声が聞こえた

「やるね、英樹！じゃあ、これはどうかな？」

ガコン！ガコン！ガコン！

ダン！ガチャ、ダン！ガチャ、ダン！

パン！パン！パン！

今度は三発連続で来たがそれを撃ち漏らすことなく全部撃ち落とした

おおおお！！！！！！

「まっざつとこんな物よ」

そう言つてモシン・ナガンを担いだ

「見事な腕前だな。英樹君」

壮一郎さんが言つた

「いえいえ、そうでもないですよ」

「すごかつたよ！」

「英樹！」

美鈴と敏美が言つた

「ははっありがとう。二人とも」

「やるね。英樹」

「サンキューコータ」

そう言いながら俺達はクレー射撃を続けた。

こんな楽しい事がいつまでも続けていけたらな。そんな事を思いながらパーティに没頭した。

くおまけく

「あゝあゝ暇だな」

小室は医務室で一人、寝ころんでいた

「僕も足を撃たれてなかったら上のパーティに参加できたのにな」

ガチャ

「孝、いる？」

医務室に来たのは麗であつた

「麗か。どうかしたのか？」

「うん。孝、一人寂しいかなって思つて上から抜け出してきたやつた。ほら、食べ物も持つて来たから一緒に食べよう？」

そう言つてお盆の上にある。食べ物を見せた

「麗、ありがとう」

「いいのよ。気にしないで、さっ食べましょう」

「ああ、頂きます」

「頂きます」

モグッモグッ

「うん、うまい」

僕が言つた

「でしょ？私の選りすぐりだからはずれないわよ」

麗は笑いながら言った

「ほら、孝、ジュース」

「おう、サンキュー」

ゴクツゴクツ

「プハー、ああ、なんだか落ち着いて来た」

「そう？なら、良かった……ねえ、孝」

「なんだ？」

「私達つてどこまで行くのかな？」

「というと？」

「私達はずっとこのままなのかな？前の生活みたく戻れないのかな？」

「……それは、分からない。でも、僕は英樹に着いて行けばずっと生きていけると思ってる。だから、僕は生き続ける。うまくは言えないけどさ。麗にも付いて来て欲しい」

「孝……分かった。私はずっと孝のそばにいるよ」

そう言って抱きしめる麗

「お・おい、麗」

「少し、このままでいさせて、孝の体温が残るくらいに・・・」

「・・・ああ、分かったよ」

そう言って孝も抱きしめた

床主空港

俺達は船で港を離れた後、先生の友達がいる。床主空港を目指していた。先生の話では友達はSATに所属しており名前は南　リカというらしい。SATの中でも精鋭に入る類の腕前だそうだ。

「艦橋」

「英樹君、もうすぐ空港の方に着くぞ」

三佐が言った

「ありがとうございます。三佐。コータ、周りはどんな状況だ？」

コータに聞いた

「えーと、今の所他の船は見えないね。紫藤が乗ってる戦艦は見えないよ」

「そうか。ならいい」

そう言つて俺達を乗せた船は空港に向かっていた

「リカside」

私達が空港に立ち籠つて早6日になる。外部との連絡は例の光のせいで遮断されてしまい外の状況は全く分からない状況である。

唯一のバディである田島はあいつらの餌食なつて自決したわ。でも、

本当に良いバディだった。そんな悲しみもくれないまま時は過ぎていき、今、空港の中で他の隊員たちや避難民と一緒に立て籠もっているけど、正直、どこまで持つかは分からなくなってきた。

外にはあの死体共が溢れておりバリケードが徐々に弱くなってきているのが分かる。

「しかし、まあ、良く生き残れたよな。俺達」

他の隊員が言った

「まあ、それだけ運が良かったって事じゃないか？そうでしょ？隊長」

「そうだな・・・しかし、田島を失って大きな穴が出来たのは間違いない。しかし、俺達にはまだ、やらなければならない使命がある。分かるな？」

「ええ、そうですね。隊長の言うとおり、田島の分もしっかりと働いてもらうわよ。皆」

「了解！」「」

そう言っただけで私達は管制塔に上った

（リカ side out）

「英樹君、空港が見えてきたぞ」

三佐が言った

「どれどれ？・・・奴ら、空港にまで現れたのか・・・」

俺は双眼鏡で滑走路を見ながら言った

滑走路の方を見てみると、警備員や空港の整備員など空港に働いていた人達が主に奴ら化してしまっているようだ

「ん？英樹、管制塔の方を見てみなよ。誰がいるよ」

コータが言った

「どれどれ？・・・んゝ警察かな？多分、上から狙撃して奴らの侵入を阻んでいるんだろう」

「だとしたら、SATの連中かもしれないな。狙撃銃を使うって言うたらそれしかないからな。今の日本では」

三佐が言う

「ですね。よし、まだ中に生き残りがいるかもしれない。上陸して調べるとするか」

俺が言った

「でも、英樹、この船ってそういう専門な奴あつたけ？」

森田が言った

「この船を作ったのは俺だぞ？森田、あらゆる状況を設定してある。

だから強襲揚陸艦の機能も備わっているんだ。それに航空母艦としての役割も果たせる。三佐、そこにあるスイッチを押してくれませんか？」

俺が三佐に言った

「んっ……これかな？」

ポチッ

ウイイイイン………

三佐がスイッチを押すと後ろの部分からジャンプ台の滑走路が出てきた。これは、飛距離が少ない分をジャンプする事によって補われる方式である。現代なら中国がロシアから買い上げた軽空母がいい例だ

「おお、相変わらず、すごいね」

コータが言った

「まあ、こう言う形だと航空戦艦って言った方が近いかもしれないな。艦載機はハリアーとかアパッチだとかそれに大型輸送ヘリだっ
て搭載してるぜ？海上からだとか強襲用のホバークラフトと後は戦車とかまあ、陸上で動ける戦闘車両はこの船に積んである」

「よくもまあ、そんなに積んでるね。構造上なんか、無理な設定があるけど……」

コータが言った

「コータ君、世の中には知らなくていいという物がある。気にしては駄目だ」

軍曹が言った

「はあ、そう言う物ですか。」

「ああ、そう言う物だ」

「さてっと、じゃあいつちょ派手におっぱじめますか!」

俺が言った

〈会議室〉

「では、ブリーフィングを始める。」

進行は三佐だ

「現在、我々は空港から少し離れたここにいる。そして、民間人及び警察関係者がいると思われるのは空港内にあると思われる」

モニターで簡易的な空港の地図を出して説明をする

「まず、艦載機などで上空から邪魔な死体共を片づける。そして、強襲ホバークラフトで上陸、戦闘車両は先行し奴らの掃討を行う。」

そう言ってどんどん進める三佐

「なお、空港には弾が当たらないように注意してくれ。艦載機はアパッチの他にブラックホークとチヌークを使用する。戦闘車両は必要な分だけ出してくれ。掃討が完了した後は警察関係者と接触、脱出の説得に向かう。その際、鞠川先生に付いて来てもらう」

「分かりました」

先生はお茶を飲みながら言った。相変わらず緊張感ないな

「では、他に質問はあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「では、作戦開始！」

そう言うのと他の隊員達はすぐさま、行動に出た。

「ねえねえ、英樹君」

「なんですか？鞠川先生」

「私は、後から向かえばいいんだよね？」

「ええ、と言っても自分と一緒に来てもらえばいいですよ。自分はこの船を管理しなきゃいけないですし」

「そう。良かった」

そう言ってほんわかと笑顔になる先生

「早く会えると良いですね。先生の友達」

「うん！早く会いたいな〜リカなら私よりしっかりしてるから大丈夫だとは思っただけだね〜」

「先生、それって自分が頼りないように聞こえますよ?。」

俺はニヤリと笑った

「もう、そんなんじゃないって〜じゃあ、私は部屋に戻るわね〜」

そう言って会議室を出た

「さて、俺も準備するかな?。」

そう言って自分の部屋に戻る俺

〜艦長室〜

この艦長室は俺が特別に作り上げた部屋である。武器はもちろん弾薬類、更には食糧庫まである万能的な部屋である

「さて、服は仕事用の服でいいか〜」

そう言ってマフィア風のスーツに着替える

「うん、やっぱりこの形が一番しっくりしてるな〜学生服も良かったがこう大人向けの服の方が一番しっくりする」

鏡で見ながら言った

「後は、武器か。ハンドガン系ならサムライエッジを二丁入れとこ
う。」

そう言ってハンドガン用のホルダーとサムライエッジを取り出した

「長物は……改造型バレットとM4にしておこうかな？」

そう言っでガンケースにバレットとM4を収納した。このガンケースはどんな衝撃にも耐えられる機能を持っている。たとえば戦車で踏まれようが壊れはしない

「よし、準備完了つと外に出ますかな」

そう言っで自分の部屋を後にする

（甲板）

甲板に出るとすでに自衛隊員達が整列していた

「では、作戦開始！各員、必ず帰還して来てくれ！」

「了解！！！！」

そう言っで艦載機の方とホバークラフトにそれぞれ分かれて行動して行った。三佐は上空から援護する形になっている。

俺はこの戦艦から艦砲射撃を行うつもりだ。それを合図に作戦が始される

「ガッ英樹君、こちらはいつでもいいぞ。始めてくれ」

三佐から無線が入る

「了解しました。ご武運を」

そう言つて無線を切る

「さて、世界最大と言われた艦砲射撃、存分に楽しむとしますかね。
46cm砲始動、左舷三時方向上20度」

ウイイイインガチャン

「よっしゃああ!! 攻撃開始!!!」

ドカーーーン!!!!!!!!!!

こうして救出作戦が始まった

床主空港 2

俺達は床主空港にて先生の友達や他の人を救出する為、三佐と別に行動していた

俺は戦艦を使用し後方支援を行った。三佐は前線で指揮を執っている

「撃てー！ー！！」

ドド　　ン！！

46cm砲から弾が発射される。そして、着弾地点は奴らが多くいる中心に落ちた

ドカーン！！！！

大きな爆発音と共に奴らが吹き飛ばされていった

く南　リカsideく

私達は死人どもを中に入れないため管制塔からバリケードの部分に溜まっている死人を狙撃した

パン！

「巡查、これじゃあキリがないでっせ」

SAT隊員が言った

「仕方ないでしょ。あいつらを入れたら私達が全滅するのよ？他にいい案があれば聞けど？」

「分かりましたよ。でも、どうします？このままじゃいずれ弾切れになりますよ？」

「そうね……」

そう言っただけでいると

「おい！あれを見てしろよ！」

他の隊員が海の方を指さした

見るとそこには見た事のない船がこっちを目指していた

「何よあれ？」

私は言った

「とにかく日本の船……ではなさそうですね。あんな船は見た事ありません。自衛隊でも所有してない大きさですよ」

「どうして、分かるの？」

私は質問した

「こう見えて私は軍オタなんですよ。だから、一通りの事は分かります」

隊員が言った

「じゃあ、あれはアメリカ軍？」

「いえ、アメリカ軍でもあんな船は所有してませんよ」

「じゃあ、一体……」

なんなの？って言おうとした瞬間だった

ドド　　ン！！

「！！！」

さっきの船がこっちに向け砲撃を行ってきた。そして、着弾地点は・
・・・

ドカーン！！！！

あの死人共が多くいる部分に命中した

その後、あの船からヘリとホバークラフトが出てきた

「あれは……自衛隊が使用するホバークラフトですね」

さっきの隊員が双眼鏡で見ながら言った

「てことは味方なの？」

私が言った

「分かりませんが少なくとも私達に弾が飛んでこないと言う事はそういう風に認識してもいいんじゃないですかね？」

「そう・・・よし、私達は下に移動、隊長に報告するよ」

「」「」「了解！」「」「」

そう言つて管制塔を降りる私達であつた

（南 リカ side out）

俺はWARから砲撃をしばらく行っていたが粗方、片づけられたのでヘリで移動する事にした。

ヘリポート
後方甲板

「英樹君つてヘリも操縦できるの？」

静香先生が言つた

「ええ、一応、一通りの車両、航空機は操縦できますよ。」

俺が言つた

因みに今いるメンバーは静香先生、森田、宮本、俺の四人である。コータはホバークラフトで先に他の隊員達と一緒に出勤していた

ヘリポートに駐機してあるのはUH-60通称ブラックホークという汎用ヘリである。このヘリはアメリカ軍がヒューイの次に最も使

用しているヘリである。他にも映画などにもたくさん出て来ている。

「英樹君、これは何人乗りなの？」

宮本が言った

「まあ、大体6～8人は乗れるぜ。タイプによっては違うがな」

俺が説明した

「ふ～ん」

「さて、俺達も出るとしますか、静香先生は助手席に森田と宮本は銃座に付いてくれ」

そう言うとは皆は指定された席に移動する。俺も移動し操縦席に座った

「よし、つと皆、準備は良いか？」

俺が聞いた。すると、皆は黙って頷いた

ヒュイイン……………

バラバラバラバラ

ブラックホークは特に問題を起こすことなく無事に飛びだった

～空港上空～

バラバラバラ

俺達は空港上空まで辿りついた。すると・・・

「英樹君、地上の制圧は完了したぞ。まだ、少数の奴らはいるが大した脅威ではない」

三佐から連絡が入った

「了解です。三佐は自分の後に続いて下さい。着陸しますんで」

「了解した。呉衛門、後の指揮は頼んだぞ」

無線越しに三佐が命令していた。

くへりポートく

俺達は空港の緊急ヘリポートの着陸した

ヒュイイン・・・

ガチャバタン

俺達はヘリを降りた。隣のヘリポートに三佐達の乗ったブラックホークが着陸した

「中はないと思うが一応、警戒したままで行きましょう」

「そうだな。」

そう言って下に続く扉を開けた

く空港 二階く

スタスタスタ……

俺達は無人の空港内を探索していた

「やはり、誰もいないな」

三佐が言った

「もしかしたら、向こうも警戒してるのかもしれない。じゃな
いとこんなに静かにはできない」

俺が言った

「でも、英樹、仮にだけどこに誰もいなかったらどうするの？」

森田が言った

「いや、それはないと思うぜ。さっき双眼鏡で見たんだが、管制塔
から狙撃してるSATの連中がいた。いないは絶対じゃないと思うぜ」

「確かに……」

森田は納得したようだ

「さて、問題はここからだ。ここにいる避難民と警察の連中にどう
接触するべきかな……」

俺が手に顎を載せながら言った

「いや、その必要はないみたいだよ。英樹君」

三佐が言った

その瞬間……

「動くな!!」

「WOW……」

俺達はSATの連中に囲まれてしまった

「あなた達は何者？ここに何の用があるの？」

一人の女性隊員が言ってきた

「もしかして……リカ？」

静香先生が口を開いた

「え？静香？静香なの？」

そう言ってメットを取る女性隊員

「リカ!!」

そう言っただけでリカさんと思われる女性に抱きついた

「本当に静香？」

「そつだよ！良かった〜無事で〜」

泣きながら言っていた

リカさんも目に若干涙を溜めた

「無事に再会できたな」

俺が言った

「ええ、良かった」

宮本も泣いていた

「もらい泣きか？宮本」

「仕方ないでしょ、静香先生あの喜んだ顔」

「確かにな・・・」

その後、静香先生が泣きやむまで数分時間がかかってしまった

「私は南 リカこのSATの副隊長をしています」

そう言って三佐に敬礼した

「私は星 久実三佐だ。よろしく頼む」

そう言つて三佐も敬礼した

「で、さっきの攻撃はあなた方が？」

リカさんが言つた

「ああ、静香先生があなたがここにいるという情報を提供してくれてな。英樹君に頼んであの船でここまで来たんだ」

「そうですか。本当にありがとうございます」

そう言つてリカさんは頭を下げた

「いえ、礼を言うなら彼にしてやって下さい」

そう言つて俺を指した……俺？

「三佐、なんで俺何すか？」

「君がああ船を用意してくれなかったらこの作戦自体できなかった。だから、さ」

三佐がそう言つた

「君が英樹君か本当にありがとう」

そう言つて俺に頭を下げるリカさん

「頭を上げて下さい。リカさん別に俺はそこまでの事をした訳じゃない」

「でも・・・」

「いいから、俺はただ乗り物を用意しただけなんですから」

「分かった。」

どうやら納得してくれたようだ

「そういえば、リカさん」

「はい、なんででしょう？」

「ここには隊長は居るのかな？」

三佐が言った

「ええ、隊長は奥の部屋で作戦を練っています。案内しますよ」

「ありがたい、英樹君達はここで待機していてくれ。私が行ってくる」

「分かりました」

そう言うとりカさんと三佐は奥の部屋へと行ってしまった

こうして、空港の生き残りと接触する事に成功した俺達であった

床主空港3

俺達は床主空港で無事、南　リカさんや他のSAT隊員、避難民と合流する事が出来た。その後、リカさんの案内で三佐はSATの隊長の所へと案内されていた。

俺とかはロビーで待機していた。

「空港ロビー」

「ふわ、三佐、まだかな？」

俺は近くにあったソファーに座りながら言った

「そうね、早くして欲しいわね」

隣には鞠川先生が座っていた

「それにしても……………」

「どうかしたの？英樹君」

鞠川先生が聞いて来た

「いや、あいつのことですよ。あの馬鹿教師、一体どこに向かったかと思ひましてね。」

「あ、紫藤先生？あの人の事はもう気にしないでいいんじゃない？」

「いや、ああいう奴ほど、しぶとく生きますからね。こんな世界じゃあ好きにできちまう。それに、自分の事を一番だと思ってる節がありますからね。」

そう言って持ってきた水を飲んだ

「そう。確かにしぶとく生きそうね。でも、会う事なんてあり得るの?。」

先生が言っただ

「それが分からないんですよ。空港に付く前、船のレーダーを見たらですが奴の乗った船が移りませんでしたからね。一体どこに消えたのやら。」

そう言っただ俺は窓の外を見た。

とその時、三佐達が入って行っただドアが開いた

「英樹君、待たせただな。」

そう言っただ三佐が近づいてくる

「いいえ、大丈夫ですよ。それより、どうでした?。」

「うむ、すぐに脱出の準備を行うそうだ。それまで、私達は周囲の警戒、アンデットが近づいたら、防衛態勢に入る。私は、無線で軍曹に伝えてくる。」

そう言っただヘリポートの方に向かってしまった

「私とかはどうすればいいの？」

先生が聞いて来た

「ん〜そうですね。じゃあ、先生は自分と一緒にいて下さい。」

「分かったわ〜」

ほんわかと笑顔になる。やっぱりこの人と一緒にいるとのほほんとしてしまうな〜

「英樹」

「おう、どうした？宮本」

宮本がトイレから出てきた

「結局、どうなったの？」

「とりあえず、SATの隊長が避難民を説得するみたいだ。それまでの間、俺達はこので、監視を行う、もし、奴らが出てきたら即防衛態勢に入るぞ。三佐は下の連中に連絡しに行った」

俺が説明した

「そう。じゃあ、私は向こうの窓で森田君と一緒に監視してるわね。」

「おう。任せた」

そう言つて宮本は森田を連れ、別の窓へと向かった

「じゃあ、先生、自分達はそこの窓で監視を行いましょう」

「分かったわ」

そう言つて俺達は近くの窓に近寄つた。

＼三佐 side＼

私は、今後の事を下にいる呉衛門軍曹に連絡する為、ヘリポートに来ていた。そして、乗つてきたヘリの無線機で周波数を軍曹のチャンネルに合わせた

「こちら、星三佐だ。軍曹聞こえるか？」

「こちら、呉衛門軍曹、三佐、聞こえますぞ」

軍曹はすぐに返事をした

「軍曹、今、SATの連中が避難民の説得に向かった。しばらく、そこで待機していてくれ。」

私は軍曹に説明した

「了解しました。ルートはどういう感じですか？」

軍曹が質問した

「2ルートで分けて行っ。一つはヘリによる輸送だ。そして、地上ルート、これにはヘリで乗り切れなかった人達とSATの隊員が乗ってもらっ事になっている。ああ、それと避難民が来るまでの間、我々は警戒態勢に入るぞ。アンデットは見つけ次第、排除してもいい、全員に伝えてくれ」

「了解しました」

「では、次の連絡を待て」

そう言っ無線を切った

「ふう、これで、後は避難民だけか」

そう言っ海の方を見た。空は雲一つない快晴であつた。いつもの日常だつたらこれほど、嬉しい事はないのだが……

「ん？あれは……」

私は海の方を凝視した。英樹君の船とは別に違う方向から大型船がやって来ていた

「海自のおおすみか？いや、それにしてもかすぎる……あれは一体？」

私は気になつたのでヘリに積んであつた望遠鏡でその方向を見た

「……まずい！すぐに知らせねば！」

そう言っ階段を下りて行つた

「三佐 side out」

「ふわ、平和だね」

俺は外とを見ながら言った

「ほんとね。これで、いつも通りなら十分なんだけど」

先生が言った

あれから、ずっと監視をしているが、中々SATの人達や避難民が戻って来ない。それゆえに暇すぎるのだ。奴らがいれば射撃訓練のできるのだが・・・下の連中や砲弾によって片づいてしまったためほとんどいない状態だ

「私達、ここを出たらどうなるのかな？」

先生が言った

「正直言うと分かりませんね。ワクチンができるまではずっとこの状態でしょうし、それにできたとしてもまた、新たな戦争が起こるかもしれませんね。その間は平和という文字は出てこないでしょう」

俺が言った

「そう・・・だね。でも、いつかは来るんだよね？」

「ええ、少なくとも自分はそう信じていますよ」

そう言った瞬間だった。非常階段の扉が開いた

「英樹君！」

三佐が来たみたいだ

「どうしたんですか？そんなに慌てて」

「緊急事態だ！いますぐ避難しないと・・・」

そう言った瞬間、外から大きな爆発音が起きた

「キャッ！？何？！」

先生が驚く

「チッ、もう着いてしまったか！」

外を見て驚愕した。なんとあの馬鹿教師の乗る戦艦アイオワがこっちに向かって艦砲射撃を行ってきた

「あの馬鹿教師・・・この隙を狙っていたな・・・」

俺は低い声で言った

「英樹！」

宮本も来た

「おう、宮本」

「何があつたの!？」

「あの馬鹿教師が来たんだよ。あいつ、今度こそ決着を付けるつもりだ」

「紫藤が!？」

宮本は驚いたように言った

「三佐、すぐに下の連中を砲撃の届かない場所に移動させて下さい。」

俺が言った

「分かった!」

そう言つてヘリポートの方に向かった

「静香先生」

「はい!？」

「先生はリカさんにこの事を伝えて来て下さい。場所は分かりますか？」

「ええ、さっき聞いたから」

「では、お願いしてもいいですか?」

「分かったわ！」

そう言ってすぐさま、走り出していった

「宮本」

「何？」

「しばらく、ここで待機だ。向ここの動きを見る、戦争は……その後だ」

そう言っただけはニヤリと笑った。

果たして、英樹達はどうなってしまうのか？無事、床主空港から脱出できるのか？それは、次回……

最終決戦

俺達は空港で避難民の到着を待っていたが、思わぬ襲撃を受けていた。なんと、あの馬鹿教師が機会を探って攻撃してきたのだ。

「空港　ロビー」

「くそ！こいつは手厳しいな・・・」

俺は身を隠しながら言った。戦艦アイオワは見てくれは大戦時のままだが中は驚くほど改装されている。いわゆる現代改装という奴だ。特に電子機器が一番厄介である。殆どが最新鋭の物で自動装填装置などの電子機器は今の電子機器では合わないほどの改造を施してある

「英樹君！」

三佐が来たようだ

「三佐！どうでしたか！？」

「言われたとおり下の連中は砲弾の届かない場所まで移動させた。だが、どうする？このままでは埒が明かないぞ？」

三佐が言った

「仕方ない、あの船にいる人たちには悪いがW A Rを投入します！全システム、再起動、レールガン発射用意」

そう言うと、アイオワとは反対に停泊していたW A Rが動き出す、

こちらも最新鋭ではあるがレールガンの発射には幾分か時間がかかってしまう。レールガンは実弾兵器の中で最強の部類に入るが、発射するまでに電力を最大限にまで上げなければならない。

そのため実際に指示があつてから発射するまでの間、時間が掛ってしまうのだ

「三佐！レールガンが発射できるまでの間に避難民やS A Tの人達に移動を開始させて下さい！そうしないと後が持ちません！」

「了解した！」

そう言つて三佐は走つて行つた

その間にもアイオワからの艦砲射撃は続いた。滑走路はボロボロになり空港自体にも衝撃がたまに来る。

「英樹君ゝなんとかならないの？」

鞠川先生が言つた

「確かに・・・仕方ない、艦載機を飛ばすか」

そう言つて手元のリモコンを押す。

すると、W A Rの後ろから航空甲板が出てきて艦上戦闘機が飛び出していく、通常の空母より搭載数が少ないが、それでも囀としては役に立つてくれるはずだ

案の定、アイオワは戦闘機に向かって対空攻撃を始めた。戦闘機は

巧みに攻撃をかわしていく

「計画通り・・・」

俺は某死神アニメの顔をしてしまった

それと同時に避難民がやってきた。空港の戦闘を見てざわめく人たちもいたがすぐにSATの人達が治めた

「英樹君、ルートは二つで分ける」

三佐が言った

「了解しました。俺は外の様子を見てるんで、あとはお願いします」

「了解だ」

そう言っ分かれる

（馬鹿教師side）

「くつくつく、これも想定の内ですよ。英樹君」

私は港で船を奪取したあと、しばらく見つからないように行動した。そして、予想通り、英樹君たちは空港にいる愚民を助けに行ったみたいですね。

「頭、どうでしょう?」

側近のヤクザが言った

「しばらく、様子を見ましょう。それから砲台の準備を私の合図で攻撃を開始してください」

「分かりやした」

そう言っで離れる

「さて、最後に立つのはどちらでしょうか？英樹君？ククク・・・」

そう言っで笑った

（艦砲射撃を開始して数分後）

「それ！どんどん撃ってしまいなさい！」

私は無線機で指示を出す、無線越しから「分かりやした！」と返事が返ってくる

「ククク、圧倒的に私たちが有利ですね。」

「ええ、そのようです」

側近も賛同した

「さて、これから（ドオン！）な・・・なんだ！？」

そう言っで外を見た。そこには数機の戦闘機であった

「頭！戦鬪機でっせ！」

「そんな事は分かっています！すぐに攻撃しなさい！」

そう言って指示を出す

しばらく、対空射撃をやってなんとか撃ち落とすことに成功した。船にも多少の傷ができてしまったが航行に問題はない

「よし、攻撃を「頭！」今度は何です！？」

無線越しから部下の声が聞こえた

「頭！船内にあの化物が！ぎゃあ！離せ！ぐわあああああ！
！！！！！！」

そう言つて無線から断末魔が聞こえた後、グチャグチャという音が聞こえ始めた

「くそ！どこの区域です！？」

「えっと、一番下からでした。」

「すぐに防衛体制を敷きなさい！」

「わ、分かりやした！」

そう言って近くの無線から各区域にいる部下たちに指示を出す側近

「クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！」

！クソ！クソ！クソ！クソ！クソ！」

私は狂ったように同じ言葉を繰り返していた。思えばずっと思惑どおりに動かなかったことが多すぎた。この世界になっても神は味方をしないというのか！？

そう思っていると・・・突然、大きな揺れが船全体を襲った

（馬鹿教師side out）

「よし、九十%まで上がったな・・・」

手元のPDAを見ていった。PDAにはレールガンのチャージ数が表示されていた

「英樹君！こちらは収容が完了した！後は君達とSATの隊員だけだ！」

無線で三佐が呼びかけた

「了解しました。すぐに向かいます！」

「君らはヘリポートに来てくれ！私が迎えに行く！」

そう言っって無線を切った

「さあ、先生、行きましょう。ここを脱出しますよ。」

「え、ええ、そうね」

そう言っておれたちはヘリポートに向かった。途中、宮本達と合流し無事、ヘリポートに到着した

「ヘリポート」

「さて、あれはどうなったのかね？」

そう言っただ眼鏡でアイオワを見た。あれから砲撃が止んだためこちにとつちやあ都合だが、いったい何があった？

「良かった、あれに乗らなくて」

俺が言った

「どうしたの？英樹」

宮本が言った

「これを見てみるよ。そしたら分かる」

そう言っただ眼鏡を渡した

「？・・・分かった」

そう言っただ宮本は双眼鏡を覗いた

「！・・・確かに英樹の言う通りね」

宮本は納得したように言った。俺たちが見た物・・・それは、甲板を歩いている奴らの姿であった。奴らは一直線にヤクザとやりあっ

ていた。ヤクザも負けてはいなかったが一人、また一人と奴らの餌食になっていった

そうしている内に三佐の乗るブラックホークが飛んできた

「英樹君、迎えに来たよ」

「ありがとうございます。三佐」

「礼は後でいい、さっさと脱出するぞ」

そう言っただけで俺達はヘリに乗りこんだ

（ヘリ内部）

俺達はヘリで空港を後にする。その間にも俺はアイオワの方を見ていた

「ひでえな……」

アイオワの方はまさに地獄であった。船という限られた場所では確実に奴らの餌食になってしまう

「英樹君、アイオワの方はなぜ、攻撃してこない？」

三佐が言った

「船に奴らが隠れてたんですよ。途中で攻撃してこなくなったのも裏付ける（ピピピ）おっチャージが完了したか……」

PDAをみると大きくチャージ完了の文字が表示されていた

「英樹君、それはあ？」

先生が聞いた

「これは、船に搭載されてるレールガンですよ。実弾兵器上最強の部類に入る代物です。」

俺が説明をする

「へえ」

先生は納得？したのかそう言った。本当は分かってないかもしれないが……

「よし、発射するか……ポチッとな」

PDAに表示されている発射ボタンを押した。するとWARの方からオレンジ色に発射するレールガンが見えた。弾はまっすぐアイオワへと行き……爆発を起こした

その光景に皆が見とれていた。

「すごい……」

「これは……」

「つか、ヤバくないか？」

「すごいわね」

上から宮本、三佐、森田、先生の順に言った。アイオワは炎上しながらも沈没には至っていなかった。甲板から奴らが雪崩のように落ちて行った

「見て！ヘリが出てきた！」

宮本が言った

煙で見えなかったが、奥からヒューイが一機飛んできた。操縦者は・
・紫藤だった

「あの馬鹿教師・・・しぶといな」

俺が言った

その時、無線が入った

「ふははは！！！！！残念だったな英樹君、これは私の勝ちだな！あ
っはっはっは！！！！！！！！！」

ウザイ高笑いが無線越しから聞こえてきた。俺はすぐさま対戦車ライフルを構えたが三佐に抑えられた

「奴の後ろをってみろ」

そう言われてヘリの奥の方を見た。すると・・・

「おいおい、こいつはやばいな・・・」

俺は絶句した

奴の後ろには一体の奴らがいた。今、まさに紫藤に襲いかかろうと
していた

「ふははは！！！あ？なんだ！？くそ！やめろ！ぐわ！？あs外
gンパジヨイjだj:fhpじゅいえいhっじよだpjじゅあ！！
！！！？？？？？」

紫藤は後の奴に気がついたが時すでに遅し、奴は紫藤の首筋に噛ん
だ。途中から紫藤の声がおかしくなっていた

操縦者を失ったヘリはコントロール不能になりそのまま落下してい
く・・・・・・落ちた先は・・・・・・戦艦アイオワであった。

しかも、それが止めとなり大きな爆発を起こした。きっと弾薬庫に
でも引火したのだろう。船体は大きく傾き徐々に沈んでいった

「哀れだな・・・・・・」

俺が言った。

そうして、俺達はそのままWARに帰還する。こうして、空港にい
る避難民とSAT隊員達を助け出すことができた俺達であった

最終決戦（後書き）

次回予告：次でこれを最終回にしたいと思っています。今まで読んでくれた読者の皆様方、本当にありがとうございます。

では、次回までよろしくお願いします！

最終話、明日への希望

俺達は、空港であの馬鹿教師＋ヤクザ共を叩き潰した（と言っても、殆どは奴らのおかげで攻撃のチャンスが回ってきただけだ）。そして、避難民も無事に収容し床主空港を離れることになった。その間、俺は沈みゆくアイオワを見ていた。

所有者として最後まで見届ける。それが流儀ってもんだろ？

く甲板く

「終わったな・・・」

俺はアイオワを見ながら言った

「「英樹く！」」

「ん？」

俺が振り返ると美鈴と敏美がこっちに走ってきた

「やっと」

「あいつを」

「倒す事が」

「できたね」

二人が言った

「ああ、そうだな。これで、もう邪魔する者はいない。さて、これから、どこに向かおうかね？」

俺が言った

「なら、提案があるぞ。英樹君」

三佐が近づきながら言った

「なんです？提案って」

「実はな、さつき無線で入った情報なのだが、横浜付近の自衛隊及びアメリカ第七艦隊がまだ、生きていたようだ。彼らは無線で生き残ってる者たちを呼び掛けていたらしい。私が応答するとすぐさまこっちに向かって来て欲しいとのことだ」

「なんとまあ……」

俺は思わず言ってしまった。俺たち以外で生き残りがいたからなそりゃあ驚くに決まってる。だが、いい情報だ。その小さな情報だけでも生きる希望が見えるって言うんだから、人間の精神ってすごいよな

「それに、向こうの情報だと結構な生き残りがいたみたいだ。他にも沖縄、アメリカ、イギリス、フランスなどの所でも生存者がいるみたいだ」

「そうなんですか。だとしたら希望が見えたと言う所でしょうね」

俺が言った

「そうだな。今現在、国連でも新ワクチンの開発が始まっていると言つ。これなら、近い将来、通常の日常が戻ってくるかもしれないな」

そう言つて三佐はタバコを啜えた

「じゃあ、とりあえず横浜付近に移動するとしますか？」

「ああ、君の好きにしてくれていい。この船の艦長は君だ」

「ええ、そうさせてもらいましょう。機関全速前進、目標、横浜港」

そう言つとWARは大きな汽笛と共にゆっくりと動き始めた。まるで、明日への希望を背負つて行くように

「さらばだ。床主市」

俺はそう言つて床主市方面に向かって敬礼した。いつかは元に戻る日が来るだろう。だが、それまでの道のりが今後の人類にとって大きな影響を与えると云つても過言ではない。

しかし、人類は過ちを犯して成長する生き物だ。今までの歴史が証拠だ。いつの時代でも人類は過ちを犯すだが、その度に成長する。これも人類の素晴らしい所だ

「「英樹」」

二人は俺の服を掴みながら言った

「俺達には希望がある。その希望を失わない限り、人は生きていくものだ。たとえ、その先に地獄が待っていてもな……」

そう言つて俺は二人の肩を掴んだ

船は上がりゆく太陽の光を浴びながら、人々を乗せ、希望を乗せ、全速で向かっていく……

最終話、明日への希望（後書き）

はい！と言う事で学園黙示録はここまでです！

今まで、読んでくれた読者の方々改めてありがとうございます！おかげ様で46万以上のPVを頂く事が出来ました。これも一重に皆さまのおかげです！本当にありがとうございます！

では、次の小説で会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372p/>

学園黙示録と武器商人の男

2011年6月3日22時20分発行